

萬里無雲といふことを題にてよめるなかうた

短歌

逸民

馬のつめつくすかきり、ふなのへのいたらふきはみ、くにほらはくも  
ゝおりあらず、うな原は浪もたふねは、國原の遠きさかひに、海原の潮  
路のはてに、村雲のあると見ゆるは、青山のつゞくなりけり、まらな  
みの立と見ゆるは、鳥山のならぶなりけり、然ばかりはるけき山の、  
かばかりに見ゆるおもへは、からくにのいつつのたけも、蝦夷の海八  
十の島も、やゝくはうかびかいでむ、と思ふまではれ渡りたる、  
けふにもあるかも

今日ほもよにはよく晴れぬ常世への

とほつあき人舟出すらむぞ

### 贈正五位秋元正一郎小傳

秋元安民通稱正一郎幼名ヲ正朔ト云フ姫路藩秋元右源次包菊ノ次男ナリ母ハ矢島氏文政六年正月元日姫路城鵬門内ノ自邸ニ生ル天資剛毅身軀肥大幼ヨリ文學ヲ好ミ竹馬遊戲ノ際猶書籍ヲ懷ニシ傍ラ之ヲ閱見シテ以テ娛樂トス一時城北増位山ノ寺院ニ蟄居シテ讀誦勤勉スル所アリ少年ノ頃藩校仁壽山學費ノ使令ヨリ尋テ書藏預ト爲ル奉職中庫裡所藏ノ和漢書籍一トシテ閱讀通觀セサルナシ性强記穎邁何レノ史乘ト雖トモ一讀忽チ之ヲ知了ス衆呼ヒテ神童トナス青年ニ至ル比ヒ猶博ク天下ノ書籍ヲ學ハント欲ス然レトモ藩制容易ニ他藩ニ出ルヲ許サス因テ一時内願シテ龍野藩士某ノ籍ニ就キ諸藩ノ間ニ歷遊ス時ニ小野藩碩學野之口隆正ナルモノアリ國學ヲ以テ一家ヲ爲ス安民即チ野之口ノ門ニ入り專ラ國典及歌文ヲ研修ス野之口亦其非凡出藍ノ才ヲ愛シ自家ノ養子トス安民是ヨリ野之

口ヲ名乗り名ヲ正蔭ト改ム後チ逸民又御民ト呼ヒ終ニ安民ト改ム而シテ京阪其  
他諸國知名ノ士ト交ヲ結ヒ學業益成ル其後故アリ野之口ノ養子ヲ辭シテ秋元ニ  
復シ又若狹國小濱藩ノ儒學伴信友ヲ師トシ學フ而シテ自ラ播磨國三木ニ塾ヲ開  
キ一家ノ學業ヲ教授ス

時ニ姫路藩漸ク開明ニ進ミ國學ノ一課ヲ設置シ安民ヲ招徴シ歸藩セシム家初メ  
北條口ニ居ル幾許モナクシテ櫻町好古堂前ニ邸ヲ賜ハリ國學寮ヲ其構内ニ建設  
シ國學教授ヲ命セラル安民傍ラ洋書ヲ繕キ泰西ノ風土人情ヲ探リ其制度文學ニ  
至ル迄深ク之ヲ究ム當時寫眞術ノ如キ未タ一般ニ聞知セサリシモノニ至リテモ  
亦能ク之ヲ研究シ大阪ノ大醫緒方洪庵ト共ニ其製造ヲ試ミタルコトアリ又海外  
名所歌集ヲ著シ以テ當時ノ人士ニ泰西諸國ノ狀態ヲ知曉セシム又夙ニ西洋形風  
走船ノ構造製作ヲ究メ安政三年自ラ藩主ニ建言シテ其船舶ヲ造ラシメシコトヲ

請フ藩主遂ニ其言ヲ容レ安民ニ造船ノ總理ヲ命シ之ヲ監セシム是ヨリ先キ領内  
本庄村ノ漂民四名亞米利加ヨリ歸朝ス安民請フテ藩ノ小吏トナシ從來ノ船大工  
等ヲ併セテ之ヲ使役シ以テ造船ニ着手ス其船材ノ購入ヨリ附屬ノ器具ニ至ルマ  
テ悉ク安民ノ考案指揮ニ出ツ歲餘ニシテ竣工ス名ケテ速鳥丸ト號ス初メ安民ノ  
造船ニ着手スルヤ攝州住吉神社ニ立願スル所アリ功竣リ進水式ヲ舉クルニ至ラ  
ハ則チ自ラ其船ニ乘リ神社ニ參拜報賽センコトヲ誓ヒタリシカ今其竣成ヲ見テ  
深ク之ヲ感喜シ直ニ參拜ノ途ニ就ク其解纜ニ際シ國風一首ヲ詠ス時ニ安政五年  
六月二十六日曉ナリ

速鳥はやどりのみふねうかふる朝しほに

ねがひもみちてゆくこゝろかな

尋テ又安民ノ指揮監督ニ依リ神護丸ヲ製造セリ是レ實ニ我邦ニ於ケル西洋形船

船ノ嚙矢ニシテ當時姫路ノ産出ニ係ル米穀木綿等ヲ江戸ニ輸送スル頗ル頻繁常ニ帆前船ノ便ニ依リシモ屢海上難破ニ遭遇シ又事アル毎ニ吏員ヲ其碇繫港ニ出張セシメ船舶ノ修繕貨物ノ引揚等其費用實ニ莫大ナリ然ルニ該二船ノ成ルニ及ヒ當ニ危険ノ虞ナキノミナラス航海頗ル迅速僅カニ數日以内ニシテ江戸品川海ヨリ播磨室津ニ歸港スルヲ得ルニ至レリ藩主其功勞ヲ賞シ屢恩賜スル所アリ安政年間藩主在府中江戸ニ徵シ幕府ノ國學者前田夏蔭ニ謁セシム一日藩主夏蔭ニ談ルニ安民カ學業上ノ事ヲ以テス夏蔭曰ク秋元ノ學業熟達到底不肖ノ及フ所ニ非スト此時ニ當リ尊王攘夷ノ說漸ク草莽志士ノ間ニ起リ安民夙ニ泰西ノ制度文物ヲ究メ熱心勤王ノ說ヲ主唱シ藩主ニ獻言スルコト數次文久二年正月ニ及ヒ尊攘ノ說益四方ニ囂シク諸藩ノ有志爭フテ京師ニ上リ物情騷然タリ時ニ安民藩ノ内命ヲ奉シテ京阪間ニ微行シ具サニ天下ノ形勢ヲ探知シ其時局切迫容易ナラ

サルヲ視歸リテ藩主ニ建言スル所アリ同年六月藩主入京スルニ際シ河合惣兵衛等ト共ニ上京ヲ命セラレ村井修理少進小河彌右衛門等ト相結ヒ諸藩ノ名士ト往來シ專ラ勤王ノ說ヲ主唱ス屢ニ條公姉小路公及大原公ニ謁見シテ獻言スル所尠カラス諸藩ノ士亦安民ノ學業ヲ慕ヒ就テ學フ者頗ル多ク安民大ニ尊攘ノ大義ヲ鼓吹シ深ク燕陶ニ勉メ以テ王室ノ爲メ盡サシメンコトヲ期セリ不幸ニシテ一朝病ニ罹リ遂ニ起タズ安民ノ藩ニ在ルヤ尊攘ノ大義ヲ以テ專ラ子弟薰陶ノ骨子トナセリ當時幕府無限ノ勢力ヲ有シ藩主酒井雅樂頭ハ累世徳川氏譜代ノ士ニシテ特殊ノ因縁ヲ有スルモノ此藩主ノ下ニ在テ尊王ノ說ヲ主唱スルヤ頗ル忌憚スヘキモノアリ安民辭ヲ婉曲ニシテ之ヲ説ク巧妙諸生ヲシテ皇室ヲ尊重スル感念ヲ深ク其腦裡ニ銘セシメ一藩ノ勤王說ハ之カ爲メニ勃興シ文久年間盛ニ尊攘ノ志士ヲ輩出シタル多ク

ハ安民ノ門下生ナルヲ見ル洵ニ姫路藩ニ於ケル勤王ノ鼻祖トシテ人ノ認ムル所  
謂ナキニ非サルナリ其病殆ント危篤ニ迫リシ時老臣河合屏山和歌ヲ贈テ慰問ス  
いとゞしく物思ふ秋のいやましに

月だにはれぬこの頃の空

安民病床ニアリテ返歌ス

たはくくのわが玉の緒をかけておもふ

はれぬ夜頃の月やいかにと

是レ實ニ絶筆ニシテ藥石効ヲ奏セス終ニ八月二十九日京師三本木ノ寓居ニ歿ス  
享年四十京都寺町廬山寺ノ墓地ニ葬ル諡號ヲ徹心院正純空室居士ト曰フ遺子二  
人アリ長男安平東京ニアリ基督教ノ傳導ニ従事シ次男洗二現ニ水戸市ニ於テ醫  
術ヲ開業ス安民著書頗ル多シ其重ナルモノ左ノ如シ

宇宙起原、神議、活語範、大伴遠祖傳、空室雜考、こゝろおきて、蠻名漢譯  
箋、高橋氏文注補意、伊勢の濱萩、大稜詞集疏、隣域異聞、神國風、海外名  
所歌集、古祝詞新疏、類題青藍集、八岐大蛇變化考、道祖真義、萬語叢、例  
語部類

○立 春

とゞこほるおもひもとけてゆく水の

こゝろづからや春はなつらむ

○竹籬間鶯

たかむらの折かけ垣の巢ごもりは

まだよをしらぬ鶯のなく

○春 月

かすみけりあはれむかしの花の香に

わが身ひとつの春の夜の月

○春遠情

日の木のゆうはよりやかすむらん

あたらす山の春の明ほの

○更 衣

衣さへうすきにうつる世なりけり

あはれきのふの花ぞめの袖

○夏 月

夏の夜は夢の浮橋中絶はて

しらむか月のかつらぎの山

○夏人事

うむとだに見ゆぬもあはれ夏引の

糸のはそきをなりはひにして

○初秋風

忍ぶれとなみだのしるをいかゞせむ

われになふきそ秋のはつ風

○いとあつかりける病のやうくおこたりかたに

なりて八月もちの夜おき出て前裁の月をうちな

がめつゝ

よもぎふの今宵の月にうれしきは

とまりし露のいのちなりけり

○夕 鹿

ふみわけて何のかひよと鳴鹿ぞ

くれなはなけのよるのにしきを

○時 雨

いく人の夢をつくしてしぐるらん

常なき風のゆくするの空

○枯 野

一時をくぬりし花のおも影も

霜にやつれて野は老にけり

○雪

世のちりをふりしづめたる雪はかり

はなやかならぬ花もありけり

○富士山

日の本の寶の山は豊年の

しるしの雪をいく世つむらむ

○速鳥の船にのり居て七月はかり

黒船の網のはしだて踏なれて

入にし月を帆の上に見る

○安政二年閏七月緒方章萩原廣道は難波よりおの  
れば姫路より明石につどひあひて月見あそびけ  
るいさよひの夜中すぐる頃遠近にわかるとて

かへるさの袖にやなれむ横雲は

まださりけなきあたら夜の月

○會津藩士南摩綱紀の姫路を立ける馬のはなむけに  
みちのくはおもひやるたに遠けれど

又もあひ津の名をぞたのむる

○近藤芳樹の長門にかへるを片島までおくりて  
もだしてやわかればせましいひ深川

いひつくすべきけふにしあらねば

○都にて時雨のふりける夜

雲さわぐおたぎの嵐さおくれて

都の月にしぐれふるなり

○鷺

わたり島わたりわおらん荒鷺の

羽おきにきはふそとの濱風

○火輪船

わきかへる湯氣のゆくへのなみ車

くるしや下にすみやかかれては

○五島の沖にて夷人の乗れる蒸氣船の洲にあたり  
てうち碎けぬるよしを聞ける時

神風に烟みだれてひの國の

おきにくだくるなみ車かな

○酒



鳥蟲によしやこむ世は成ぬとも

猶るひなきに泣むとぞ思ふ

○ 俄羅斯の舶の難波津におかし入ぬときよける時に  
津の國のなにはおもはぬ世ともがな

いで住よしの神ならは神

○ 源義家卿

射むかひしあだちの眞弓末途に

君がひく手のまよきとぞなる

○ 楠正成朝臣

雲の上になすびし夢の行末や

はるゝ世しらぬさみだれの空

○ 武田信玄入道

甲斐がねの嵐に羽うつあしたづは

親にも子にもつれなかりけり

○ 加藤清正

むらがるる鶏の林をふみたてゝ

うそぶく風にちる木の葉かな

\* \* \* \* \*

贈正五位境野求馬小傳

### 贈正五位境野求馬小傳

境野求馬名ハ意英幼時象之助ト稱シ後チ求馬ト改メ之ヲ通稱トス文化七庚午年正月六日姫路ニ於テ生ル曩祖境野意惠酒井家ニ仕テ年寄役ニ進ミ祿千二百石ヲ食ム以來累世重職ニ就ク求馬ニ至リテ食祿五百石物頭役小姓頭役等ヲ歷テ番頭役タリ同藩ノ首席家老高須隼人ノ姉某ヲ娶ル某ハ河合寸翁ノ外孫ニシテ屏山ノ外姪ニ當ル寸翁ノ遺志ニ依リ屏山主トシテ其婚姻ヲ媒ス文久二年尊王攘夷ノ說四方ニ行ハレ諸藩ノ志士京都ニ集ルヤ藩主酒井雅樂頭忠績幕府ノ命ニ依リ上洛シ洛中取締ノ事ヲ掌ル求馬命ヲ帶ヒテ出京シ藩士ノ精英ヲ總領ス此時ニ當リ同藩勤王ノ士河合惣兵衛秋元正一郎等モ亦京都ニ在リ縉紳ノ諸家ニ出入シ諸藩ノ志士ト往來シテ謀議ヲ凝ス求馬ノ次男傳十郎宗貞夙ニ惣兵衛ニ養ハレ河合氏ヲ冒シ養父ト共ニ出京シ禁闕ヲ護衛ス亦々惣兵衛正一郎等ニ隨テ尊攘ノ說ヲ主張

シ謀議ニ與ル藩主喜ハス惣兵衛等ヲ阻止シテ會合セシメス求馬特ニ藩邸外ニ於テ稍廣キ僑居ヲ設ケ志士ノ密會所トナシ樞密ノ書類ヲ保管シ會議ニ當リテハ毎ニ會長トナリ陰ニ其機務ヲ掌ル文久三年藩主徳川將軍ニ代リテ再ヒ上洛スルヤ復タ求馬ヲシテ所部ノ一隊ヲ率ヒ出京シテ警衛ニ當ラシム河合惣兵衛及傳十郎等同藩ノ志士モ亦入テ洛中ニ在リ諸藩ノ間ニ周旋スルコト愈頻繁諸藩士出入織ルカ如シ河合屏山特ニ出京シテ藩主ニ切諫極論スル所アリ勤王佐幕諸說沸然藩邸ノ内口耳相屬シ藩吏頗ル志士ニ注目ス屏山惣兵衛等求馬ヲシテ陰ニ密書ノ保管ニ當ラシメ又惣兵衛等ノ機務最モ重大ナルモノハ求馬ノ寓所ニ於テスルヲ常トセリ

元治元年傳十郎京都ヨリ脱走シ長州ニ赴カントシテ大阪ニ至リ土佐藩邸ニ寓スルヤ藩主大ニ驚キ吏ニ命シテ嚴密ニ搜索セシメ反對黨ノ首領タル藩老高須隼人

ハ姻戚ノ關係ヲ以テ求馬ニ迫リ家僕ヲ派シ傳十郎搜獲ノ成功ヲ誓ハシム求馬陽ニ之ヲ諾シ譜代ノ僕榊原某ヲ大阪ニ至ラシメ陰ニ傳十郎ニ會シテ密旨ヲ傳フル所アラシメタルモ高須ニ對シテハ家僕ノ派遣竟ニ其功ナカリシ旨ヲ報シ後傳十郎捕ヘラレ藩獄ニ下リ拷問セラル、モ天下ノ公事ハ一言モ發セス藩吏ヲシテ脅怖セシムルヤ高須ハ姉弟ノ關係ヲ以テ求馬ノ妻某ニ逼リ離縁ヲ勸告シテ已マサリシモ某遂ニ從ハス是ヨリ先キ高須ハ百方策ヲ施シ求馬ノ股肱荒井某ヲ誘致シ反覆シテ已レニ從カハシメタリ嘗テ求馬ノ出京スルヤ毎ニ從者數名ヲ携フ而シテ荒井某ハ必ス其内ニ在リ某ハ求馬ノ物頭役タリシトキ其組子(藩ノ足輕)中ヨリ選拔セラレテ求馬ノ家ニ常勤セシ以來求馬ノ累遷ニ拘ラス絶ヘス出入シテ臣僕ノ如クシ多年懇勸ヲ境野家ニ盡クシ求馬ノ藩外出張ノ命ヲ奉スル事アル毎ニ藩主某ヲ御貸人ト稱シテ從者中ニ加ヘラレテ求馬モ亦之ヲ無二ノ忠良トシ京都ニ

於ケル志士ノ密會ニ當テハ家僕柳原ト共ニ席上ニ侍セシメ給仕或ハ書記等ノ事ニ當ラシメタルモノナリ藩主江戸ニ在リ嚴命ヲ藩老等ニ傳フルヤ藩吏ノ治獄愈急ヲ加ヘ高須ハ荒井某ノ手ヲ以テ求馬ノ謀ヲ探知シ惣兵衛以下勤王諸士ノ動靜ヲ審ニシ求馬ニ逼ルコト甚シ是ニ於テ求馬ハ荒井某ノ反覆ハ姫路藩勤王ノ事ヲ全敗ニ歸セシメ我股肱タリシモノ、重罪ハ國事ニ對スル已レノ咎責輕カラスト爲シ病ト稱シテ家居シ親疎内外ノ別ナク他人ト面會ヲ謝絶シ妻子ヲ斥クルコト數日其間公私細大一切ノ書類ハ悉ク之ヲ手カラ分裂破毀シ特ニ家僕柳原ヲシテ連日之ヲ火中ニ投セシメ更ニ勤王ノ大義ヲ説キ藩主ニ切諫スルノ書及其傳達ヲ乞フノ書ヲ高須ニ致シ或ハ河合元藏等ニ遺言シ或ハ傳十郎ニ密意ヲ傳ヘシメ又子孫ヲ獎勵スルノ書ヲ作り深夜衾ヲ被リテ病臥ニ裝ヒ手巾ヲ以テ覆面シ短刀ヲ以テ割腹シ不歸ノ客トナレリ時ニ元治元年甲子四月二日ナリ享年五十五姫路吉

田町景福寺山ノ墓地ニ葬ル



贈從五位中條右京小傳

### 贈從五位中條右京小傳

中條右京初ノ名ハ吉村熊太郎名ハ基好京都姉小路家ニ仕フルニ及ヒ姓名ヲ賜ヒ  
テ中條右京ト稱ス父名ハ重國通稱ヲ源平トス中興ノ祖重好甚兵衛ト稱ス正徳三  
年始テ出石藩主仙石氏ニ仕ヘ世々卒屬ニ列ス重好ノ子國之國之ノ子吉國吉國ノ  
子ハ重國ナリ重國三子アリ長ハ即チ基好ナリ次ヲ重次ト云ヒ次ヲ重之ト云フ  
基好天保十四年七月朔日ヲ以テ但馬國出石ニ生ル長シテ棒術捕方ヲ學ヒ捕方ハ  
免許ニ達シ棒術ハ皆傳ニ達ス居常好シテ國史ヲ讀ミ傍ヲ和歌ヲ嗜ム萬延文久ノ  
交天下益多事有志ノ士爭フテ勤王ヲ唱ヘ京師ニ往來ス基好謂ラク志ヲ立テ父母  
ノ名ヲ顯サンハ此時ナリト屢京都ニ上ランコトヲ請フ父許サス遂ニ一書ヲ机邊  
ニ遺シテ家ヲ脱シ上京押小路家ニ仕フ時ニ文久ニ成年三月ナリ幾許モナクシテ  
辭シテ姉小路家ニ仕フ公極メテ之ヲ寵遇ス嘗テ公ノ賢明ヲ忌ム者アリ同三亥年

五月廿日ノ夜公偶朝ヨリ退クニ當リ賊數人ナシテ公ヲ途ニ要シ之ヲ暗中ニ刺サシム從者皆遁ク基好刀ヲ挺キ賊ヲ追フ及ハス願ミテ公ヲ索ムルニ重傷ヲ被リ氣息喘々トシテ未タ絶スルニ至ラス乃チ公ヲ負ヒテ館ニ歸リ血衣ヲ脱セスシテ直ニ醫ヲ迎ヘ之ヲ療スニ三日ヲ經テ遂ニ薨ス左ニ掲クル基好ヨリ郷里ニ送リタル手翰ヲ閲スルニ當時ノ情况躍如トシテ紙面ニ溢ルルヲ見ル

以書面申上候追日暖氣之節に相成候處彌御安泰被成珍重奉存候然者當月二十日夜四ツ半之頃主人少將殿御義御參内之御退出掛有栖川宮様北之方女住御殿之角廻り掛之處こまよせのかけにて侍三人隠れ居候少將殿御供之者尤下部提燈持壹人右に下拙左に御太刀を以金輪勇と申相士其頃より下部仕くつ持壹人都合士貳人と下部貳人四人之御供の處侍一人拔身を以主人少將殿へ切掛候處下部二人共雲霞に逃さり相士金輪勇

と申者主人之御太刀持下部同様ニ逃行候少將殿へ一太刀切附候へば少將殿扇子にて御うけ被遊候に付下拙直に侍一人切附候處一人之侍雲霞に逃行追かけ候と致處に又二人少將殿へ取掛候様子にて又跡歸りにて二人者共へ向候處二人共拙者へ取掛候故拙者一二間程跡へ寄候へば又少將殿へ取掛候様子にて拙者又主人少將殿之方二人者へ切附候一人之者之刀壹腰拙者共と少將殿と二人にて奪ひ取候處直に壹人之者雲霞に逃行其内一人者へ下拙共右之脇之下へ切附候は直に壹人者共雲霞に逃去拙者追かけ候處に少將殿御義御切きず六ヶ敷様に候間少將殿を御かひほうし直に姉小路殿内へ主人と共に二人かゝる合せて歸り候尤戦之節下拙共は一人侍之爲め刀拔身面に投附られ候處を身を振かへてのがれ候其流れ右足へ刀之きつ先たち候得共少之傷にて相濟候養生之處



追々宜候間御安堵可被下候

主人少將殿御義御大病之處大切被致候間此段申入候

拙者共之處諸藩共に姉小路殿御一門方にて御祝被遊實に拙者の心中は充分に忠義立候様に奉存候敵の者共を討取候はぬ段は何共恐入候得共諸人共に拙者をほめくれ候間此段は御歡ひ可被下候  
奪ひ取候處之敵之刀一腰之長さ二尺三寸

井に銘は奥和泉守忠重と有之

ふちは鐵にて無地に銘藤原と有之

頭も鐵にて無地に鎮黄と有之候

右之段取敢へず申入候

右忠義之處御一門様方思召に依て何れ御褒美も可被下候處猶又後日可

被下候尤あゝさつ之印迄にと思召御一門様より金五百疋并仙臺ひらの袴壹枚尤御前之御召し也井かたひら壹枚井かたきぬ一ツ右之通被下候依て申入候尤戰之節ひとへ物井袴かたきぬ共血しほに相成頭面も亦血大に附實に申上方なき次第に御座候  
前書之通取あへず申入度早々謹言

五月廿二日

吉村熊太郎右京

基好

米木御家内御中

吉村御父方

山本春平様

田上利作様

筒井廣次様  
西川幾衛様  
吉村仙藏殿

右之通御名前之處へ如此御咄可被下候以上

六月基好ノ勞ヲ嘉ミシ公ノ常ニ佩フル所ノ刀ヲ賜ヒ更ニ二人扶持ヲ加増シ用人格ニ進メラルル同月亦三條公ニ召サレ主人路頭遭難之砌身命ヲ抛テ忠節ヲ盡シ候ヲ聞食サレ淑感ノ趣關白殿下へ命セラレタル旨ヲ傳ヘラレ且白銀五枚ヲ賜フノ恩命ヲ拜ス其八月京都變動七卿長門ニ走ル基好乃三條西公ノ命ヲ奉シテ但馬ニ使シ途ニシテ多田彌太郎高橋甲太郎等ノ三條公ノ召ニ應シテ京師ニ造ラントスルニ會シ則チ變ヲ告ケ道ヲ轉シテ兼行俱ニ大阪ニ抵リ追及シテ長門ニ之ク九月下旬三條公ヨリ出石藩主勤王正義ノ聞アルヲ以テ同藩ニ之キ專ラ周旋スヘキ旨

ヲ命セラレ長州ヲ發シテ但馬國朝來郡ニ赴キ同志某ニ會ス然ルニ藩主勤王ノ志厚キモ藩士和セサルノ狀況アルヲ以テ却テ不測ノ厄ヲ釀シ禍父母ニ及フノ虞アリ長門ニ歸リ時ヲ待ツニ若カサル旨某ノ強諭ニ逢ヒ直ニ播州ニ赴ク途偶明石ノ旅舎ニ於テ美玉三平ニ逢ヒ平野次郎等ノ澤公ヲ奉シテ兵ヲ生野銀山ニ舉クルヲ聞キ基好直ニ行テ之ニ從フ軍敗ル、ニ及ヒ同志長曾我部太七郎ト共ニ長門ニ走ラントシ途播州神西郡猪篠村ニ於テ土兵ノ要撃スル所ト爲リ遂ニ銃丸ニ中テ仆ル時ニ文化三年十月十四日年二十一ナリ明治維新澤公京師ニ歸ラルルヤ父重國ヲ召シテ手書及香花料ヲ賜フ書ニ曰ク

故 中 條 右 京

先年但州一舉ノ節隨從遂戰死候段不堪痛却候從前姉小路家變事ノ節拔群之忠誠モ有之義今般歸洛ニ付急度賞美致度存候處俄ニ九州下向不任

素志候條先乍些少金子百疋爲香花料相奠度存候

戊辰正月

宣 嘉

中條右京親戚中

明治二十四年十一月五日東京靖國神社ニ合祀セラル

○春 雨

青柳のいとより細き春雨に

山のは霞む夕暮の空

○山 雪

山の名のあらしにわろす白雪に

大るの川の水の寒けさ

以上二首は京都よりかこせし歌なり

○題しらず

君か爲くだけてやまむ身にしあれば

誰をたよりに音づればせむ

おひしげる葎かまか中をかきわけて

清きなかれの源は見む

以上二首は長門よりかこせし歌なり

\* \* \* \* \*

贈從五位太田六右衛門小傳

太田久米藏所藏

此の書は、  
太田久米藏の  
所蔵の書也。  
其の書は、  
太田久米藏の  
所蔵の書也。  
其の書は、  
太田久米藏の  
所蔵の書也。  
其の書は、  
太田久米藏の  
所蔵の書也。  
其の書は、  
太田久米藏の  
所蔵の書也。

### 贈從五位太田六右衛門小傳

太田六右衛門幼名熊太郎ト云フ後六右衛門ト改ム名ハ雅義但馬國朝來郡竹田町ノ人ナリ父名ハ雅方母ハ大橋氏雅義ハ其第二子ナリ文政六年三月四日生ル其先播州阿彌陀ノ城主蔭山左近ノ後ナリト云フ故アリ移テ竹田ニ居ル六男アリ悉ク家ヲ分ツ雅義ノ祖ハ其第六子タリ故ニ世々六右衛門ト稱ス

雅義幼ヨリ好シテ書ヲ讀ミ又武技ヲ嗜ム弱冠ニシテ邑ノ庄屋ニ舉ラル頗ル民望アリ天保七年天下凶歉餓饉道ニ充ツ雅義慨然トシテ曰ク我が勤儉財ヲ致ス所以ノモノハ適今日ノ用ニ供セント欲スルノミト乃チ米廩ヲ發キテ之ヲ賑恤ス郷人今ニ至リテ之ヲ德トス嘉永六年米艦浦賀ニ來ル幕府新タニ海防ノ策ヲ畫シ多ク國費ヲ要ス雅義率先義金ヲ募リテ之ヲ獻ス此時ニ方リテ天下多事人心恟々タリ雅義慷慨憂憤爲スアルノ志アリ曾テ會澤伯民ノ新論ヲ讀ミ深ク感スル所アリ大

息シテ曰ク今ヤ外夷跳梁殆ント制スヘカラス而シテ幕府人ナク一時ヲ糊塗シ以テ計ヲ得タリトス苟モ此ノ如シハ國勢陵夷俊傑アリト雖モ復之ヲ奈何トモスルナキニ至ラン是豈袖手傍觀スルノ時ナランヤト乃チ福知山藩士市川某ヲ聘シ自ラ武技ヲ講シ且邑里ノ子弟ヲ獎勵シ就テ學ハシメ又産ヲ傾ケテ四方正義ノ士ニ交ル適近郷ノ志士中島太郎兵衛ト語ル意氣相投ス文久三年秋平野次郎美玉三平本田素行朝日健等亦但馬ニ來ル相往來シテ密ニ謀ル所アリ十月澤宣嘉ヲ奉シテ義ヲ生野銀山ニ唱フ其十一日主將ノ命ヲ奉シ躬ヲ澤卿ノ直書ヲ携ヘ竹田町ノ志士松下一右衛門ヲ從ヘ出テ、出石藩主仙石讚岐守ヘ使スルヤ養父郡米地村ニ於テ同藩兵ノ至ルニ會シ其沮隔スル所トナリ雅義之ヲ通過セント欲シ百方巧ニ之ヲ辨ス一番手青木頼母ノ陣ハ輒ク之ヲ通スルヲ得タルモ二番手荒川庄兵衛ノ陣ニ至リテ可カレス遂ニ捕ヘラル尋テ生野ノ本營モ亦瓦解シ事敗ル雅義出石ノ獄

ニ下リ翌元治元年平野次郎等ト共ニ京都ノ獄ニ檻致セラル雅義天資至孝早ク父ヲ喪ヒ母ニ仕ヘ奉養極メテ厚シ獄ニ下ルニ及ヒ思慕益切ナリ屢書ヲ裁シテ以テ其無聊ヲ慰藉ス當時自ラ其消息ニ代ヘ數首ノ歌ヲ書シテ郷里ニ送リシモノ今尙卷物トシテ之ヲ存ス而シテ雅義ノ友人宮本池臣ナル者該卷尾ニ其顛末ヲ録ス池臣ハ生野ノ舉首トシテ之ニ應シ毎ニ平野次郎美玉三平等ヲ其家ニ會シ謀議スル所アリ遂ニ其子采女ヲシテ次郎等ト共ニ國事ニ奔走セシメタル者左ニ其ノ跋文ヲ載ス

雅義主はやくより世をうれたむ志ありて中島重孝とむつましかりき常に水戸の建白また藤田氏會澤氏の書を好み人にも讀せなどして倭魂つき立つるもと、せられけるさて文久三年亥十月生野にことありけるとき澤二位殿の指揮にまかせて出石へ使に出たる道にてとらへられしそ

悔しき事の限なりける其時に重孝は美玉安麿と共に播磨の夫粟にて死  
ぬ重孝の弟黒田與一郎はとらはれたり其外に平野國臣などあまたとら  
はれど成て共に都の囹圄にこめられけるか中に出石にともにとらはれ  
し松本一右衛門一人ゆるされて歸りぬあとは大かた平野をばしめ誅せ  
られたり雅義主と黒田とはのこりてありしかどもに病にかよりて身ま  
かりぬ此一卷はひとやの中にてよまれしを書つらねておくられしなり  
これたになくは何をかもかたみにとよめおかむあはれまたなきしのふ  
くさなりとかくは物してのこしおく物なりけり其よしいさゝか書そへ  
たるは

友かきの契ある宮本池臣なみた

ぬくいつゝかくはしるしぬ

慶應元年四月二十四日病テ獄中ニ死ス年四十三雅義ノ妻容貌醜恠ナリ其友或ハ  
以テ言ヲ爲ス雅義毅然トシテ曰ク古ヨリ節義ノ士美姫艶妻ノ誤ル所トナル其人  
固ヨリ乏シカラス吾輩既ニ志報國ヲ期ス以テ戒メサルヘケンヤト明治四年三月  
雅義ノ長男文吉(文吉ハ明治十一年十二月死去シ實弟久米藏其跡ヲ襲ク)亡父ノ  
爲メ同志ノ墳墓所在地ナル京都東山靈山ニ於テ藤本鐵石ノ墓傍ヲトシ碑ヲ立テ  
以テ其靈魂ヲ慰ス碑陰ノ文左ノ如シ

太田雅義但馬朝來郡竹田人勇而好義知天下將亂存志勤王文久三年十月有  
生野之義舉受命澤君奉使於仙石氏仙石氏捕而送之京獄慶應元年四月廿四  
日罹病没於獄中孝子文吉悲父不終志立碑靈山靈山同志諸人墳墓所在使予  
記其顛末如右云

明治四年辛未三月

陸軍兵學 尤大鳴 貞薰



大嶋貞蕪ハ元大阪控訴院検事長大嶋貞敏ノ實父ニシテ雅義ノ伯母諱ナリ又墓碑ノ側面左右ニ雅義及宮本池臣ノ歌各一首ヲ刻ム

ひとたひは埋れもてこそ後の世に

埋もれぬ名は顯れにけれ

池臣

世の爲に思ひしこともかひなくて

うきめ見るなり賤の男われも

雅義

明治二十四年十一月五日東京靖國神社ニ合祀セラル

獄中の作

○歳暮

さしむへき年のくるゝを悦ぶは

身にうき事のあればなりけり

○淀川にて

行末をいかねとをもふ心より

いとゝ身にしむ淀の川かせ

○古郷をおもふ

古郷をこふるあまりになかめやる

西山さへも霞はてつゝ

○たよりをきゝつる時

今は只思ひたはにし古郷の

山時鳥今朝を聞なる

○題しらす

贈從五位伊藤龍太郎小傳

諸人の祈る眞のかひしあらは

あはんとそをもふ神の恵みに



忠義由来志操好勤三事業極艱難  
 後容令除刑受諫者赤心亦於丹  
 言なるをいふ人の忠をれ  
 丹波國住人 伊藤執太郎 祐之

伊藤徳松所藏



丹波國水上郡中山村 四條殿御預り兵士  
伊藤直四郎様 巢内式部  
同 正左衛門様  
從軍部墨谷  
衣類壹枚添

御座候處去年霜月未終に御死去之よし尤下抽御病中は一所に居申候處其後外牢へ参り居候處御死去に相成申候尤同所に居申節下抽之衣類中へ此單物を仕込持出し申候に付御國へ参り直に御渡し可申上之處無據國事要用有之今以得罷出不申今使儘成便御座候に付指送り申上候今日餘り指急き申候に付要而己荒々申上候外に御辭世之歌半紙二三枚指送り申候何れに致し不遠内書面に相認め指送り可申上候先は右之段申上度早々如斯御座候以上

伊藤直四郎様

伊藤直四郎様

伊藤德松所藏

壬四月八日

伊藤直四郎様  
同 正左衛門様

四條殿御預り兵士  
巢内式部

### 贈從五位伊藤龍太郎小傳

伊藤龍太郎名ハ祐之丹波國氷上郡中山村ノ人家世々農ヲ業トス其先曾我氏ニ出  
ツト云フ後伊藤ト改メ波多野氏ニ仕ヘ天正年中明智光秀山陰征伐ノ際援兵ニ加  
ハリ赤井刑部ニ從ヒテ三ツ尾山ノ砦ニ籠リ波多野氏滅亡ノ後農トナリ中山村ニ  
住ス寶曆年間伊藤庄左衛門ノ代ニ至リ家益富ミ慈善ニ勉ム又數多ノ石燈ヲ神社  
佛閣ニ獻納スル凡ソ七里以内ニ及フ到ル所今尙碑石ヲ存ス時人呼ンテ佛庄左衛  
門ト稱ス庄左衛門ヨリ五代目ヲ直四郎ト云フ龍太郎ハ即チ直四郎ノ四男ニシテ  
天保六年正月元旦ヲ以テ生ル

龍太郎幼名ヲ卯之助ト稱ス性活潑ニシテ人ニ屈スルコトヲ肯ンセス農ヲ嫌ヒ專  
ラ武ヲ修ム十四歳ノ秋丹波國柏原藩士廣澤門平ノ養子トナリ同藩劍術家某ニ就  
キ劍道ヲ學フ一日該道場ニ赴クノ途中同門某ニ會ヒ相爭フ某龍太郎カ農家ノ出

ナルヲ知り罵テ曰ク汝士百姓ノ分際トシテ其本業ナル蛙斬ヲ爲サスシテ劍道ヲ學フカ如キ實ニ其分ヲ知ラサル白痴奴ナリト龍太郎之ヲ聞キ赫然トシテ怒テ曰ク咄汝糊米大名ノ小臣能ク聽ケ予ハ斯ク糊米大名ニ仕ヘテ終身満足スヘキモノニアラス良シ此藩ノ殿様ト同等迄出世スルトスルモ僅ニ二万石ニ過キス況ンヤ今ノ世如何ニ出世スルモ大名トナルコトヲ得サルニアラスヤ予カ鴻鶴ノ志汝燕雀輩ノ知ル所ニアラス他日大ニ予カ爲ス所アルヲ見ヨト其後幾許モナク意ヲ決シテ養家ヲ去ル時ニ嘉永三年ノ春ニシテ年僅ニ十有六直ニ生家ニ歸リ宿スルコト一夜終ニ劍道ヲ以テ身ヲ立ツルニ決シ翌朝直ニ京師ニ上ル途船井郡植生驛麴屋ニ宿ス偶一武士ノ隣室ニ宿スルアリ龍太郎ノ風采ヲ見其尋常ノ人ニアラサルヲ識リ何ノ用アリテ何處ニ行クモノナルヤ問フ龍太郎乃チ答フルニ武藝修業ノ爲上京スル旨ヲ以テス於是快談縱飲意氣忽チ投シ共ニ同行シテ京都ニ上ル龍

太郎カ其身ノ寄スヘキモノヲキチ知り同人ノ爲メ其身元ヲ引受ケ武藝修業ノ望ヲ達センコトヲ説キ終ニ其姓名ノ大野應之助ナルコトヲ告ク龍太郎大ニ之ヲ喜ヒ遂ニ同氏ノ門ニ入ルコトトナレリ蓋シ大野ハ所司代組與力役ニシテ京都新屋敷ニ道場ヲ開キ專ラ劍道ノ指南ニ從フモノ當時但馬城崎溫泉入浴ノ歸途ナリト云フ是ヨリ龍太郎大野ノ道場ニ練磨スルコト四年大ニ得ル所アリ印可ヲ受ケ代稽古ヲ爲スコト二年其間大野應之助ヨリ龍太郎ノ實父直四郎ニ送リシ書翰アリ龍太郎ノ武術修業中ノ情况察スルニ餘アリ

未得貴顔候得共書札を以致啓上候春暖之節に御座候處彌御安全奉賀候扱昨年以來御子息擊劍術爲修行御出に相成申候然る處今般被致歸國候拙方修行中出精格別業前も日數寄りも上達にて其上文學筆跡等も被心掛誠に歡申候此様子にて今暫も被致修行候はゞ格別と存候尤萬端御心配無之様

存候至而情實に修行無意被致候乍併被致歸國候は、精々御教導有之候様  
致度奉存候何分御用濟次第早々爲修行御越待入申候先者右用向而已得御  
意度如此御座候草々以上

三月九日

大野應之助

伊藤猶四郎様

尊下

再啓京都も所々見物處も盛に有之候間御用透も有之候は、御光來吳  
々待入申候

安政二年三月ニ至リ江戸ニ出テ或ハ旗本千葉某ニ就キ或ハ桃井俊藏天野庄藏等  
ニ就キ更ニ劍道ノ奥義ヲ極ム後同五年七月關東諸國ヲ遊歴シ又萬延元年三月ニ  
至リ天野庄藏ト共ニ水戸弘道館ニ聘セラレ劍道ノ指南ヲナスコト凡ソ二ヶ月餘

同年五月再々ヒ江戸ニ歸リ桃井俊藏ノ道場ニ於テ代稽古ヲナシ居レリ其江戸ヨ  
リ郷里ニ送リシ書翰今猶存ス

閏月廿一日附之貴札六月廿五日相達難有拜讀仕候如來諭殘暑難凌御座候得  
共御總容様愈御安泰被成御座奉恐喜候隨而私事無別條修業罷在候乍失敬貴  
意易思召可被下候扱御懇情に諸事御心添被成下難有奉存候出府後江戸之摸  
様稽古之様子熟覽仕候ては一日もばや、修行仕上げ申度少しも余事に志  
し無御座日々に稽古而已に相懸り罷在候乍去諸人之中上手も色々御座候  
間容易に上達六ヶ敷と粉骨仕候將亦甚兵衛妻死去仕候義御懇情に御挨拶被  
成下千萬難有奉存候着後も日々心配仕候得共遠路不任心底殘懷之至御座候  
何分父兄共無御見捨御心添奉希上候前書申上候通日々無寸暇不取敢御請迄  
如斯御座候恐惶謹言

六月廿七日

鈴木太次様

伊東龍太郎

賞酬

尙々近日殘暑も強御座候時季專一に御保養奉祈候常方相應之御用も候  
は、御遠慮なく被仰聞可被下候以上

伊東御父上様 同 龍太郎  
無異

一筆拜呈仕候嚴寒之砌御揃益御壯健御座可被遊珍重奉恐賀候隨而小子無異

儀罷在候條乍憚貴慮安思召可被下候然者當秋八月三日江戸發足奥州路へ修  
行仕霜月十六日歸府仕候先以大丈武に而日々無懈怠桃井先生へ通ひ申候間  
御安心可被下候扱又御母上様より稽古着被贈下難有奉存候早速御禮可申上  
筈之處折節奥路修行留守申到來に付不及其儀御無沙汰仕候宜被仰上被下度  
偏に奉希上候且亦此節京都大野先生出府被致段々心切御申被下稽古道具一  
式拵吳候に付大に都合宜敷御座候先は右之段申上度寒中御容体奉伺度以愚  
狀如斯御座候猶期後喜之時候恐惶謹言

十二月十八日

伊東龍太郎

伊東御父上様

伊東御兄様

猶以乍末筆寒氣強御座候節折角御保養專一に御暮可被爲遊様偏に奉



祈候扱亦御姉君御死去後如何被成候哉いまた何方よりも御迎不被成候哉是亦御序之砌御中越可被下候様奉願上候

時偶但馬國生野銀山地役人ヨリ桃井ニ對シ三丹地方ニ於テ適當ナル劍道指南ノ人ヲ得ンコトヲ依頼シ來ル俊藏即チ龍太郎ヲ勸ム龍太郎直ニ師ノ命ヲ奉シ但馬國高田村中島太郎兵衛ノ實弟黒田與一ト共ニ但馬ニ赴シ與一トハ同人ト曾テ諸國遊歷中兄弟ノ締盟ヲナセルモノニシテ鎗術ノ達人ナリ途次中山村ノ生家ニ立寄り滞在スルコト旬餘兄甚兵衛勸ムルニ主ニ仕へ父母ヲ安ニスルコトヲ以テス龍太郎聽カスシテ曰ク我レ天下ノ大志ヲ懷キ何ソ濁世ノ祿ヲ求メンヤ父母ノ孝養ハ兄之ヲ領セヨト奮然袂別但馬生野ニ至リ中島太郎兵衛北垣晋太郎其他諸國ノ志士ニ交ハル即チ相謀リテ或ハ太郎兵衛ノ宅ニ或ハ大塚藤内ノ宅ニ道場ヲ開キ專ラ地方ノ子弟ヲ指導ス然ルニ文政三年十月平野國臣戸原卯橋美玉三平

等ノ志士澤主水正ヲ奉シテ義兵ヲ此地ニ舉ケントスルヤ先ツ龍太郎ノ道場ヲ訪ヒ迫ルニ龍太郎ノ去就ヲ以テス龍太郎素勤王ノ志厚ク常ニ王室ノ式微ヲ憂ヒ王政復古ノ盛事ヲ切望スル者ナレハ直ニ其義舉ニ與ス是ニ於テ志士等本陣ヲ但馬國竹田ニ置キ農兵ヲ四方ニ募ル然ルニ竹田ハ地勢用兵ニ不利ナルヲ以テ本陣ヲ同國山口村妙見山ノ麓ニ移ス此時志士等勤王ノ大義ヲ説キ專ラ農民ヲ加ント欲ス農民等無智ニシテ浪士等ノ迫害ヲ恐レ陽ニ義舉ニ與スルカ如クシ且ツ請フテ曰ク我等農民固ヨリ寸兵ノ準備ナシ藩士ノ利兵ニ對シ用ユヘキニアラス願クハ小銃彈藥ヲ與ヘヨ然ラハ我等武術ノ素養ナキモ奮テ藩兵ヲ拒カント志士等農民ノ言ヲ信シ與フルニ小銃彈藥ヲ以テス農民等之ヲ受ケ麓ノ本陣ヲ去リ遠ク田圃ノ間ニ至リ俄カニ山麓ノ義兵ヲ狙撃ス志士等事ノ不意ナルニ驚キ且ツ農民ノ計畧ニ陥リタルヲ悔ヒ突進彼等ヲ撃ントセシカ平野國臣之ヲ制シテ曰ク縱ヒ如何

ナル事アルモ農民ヲ敵トシテ戰フハ我等ノ本意ニアラス天運ノ至ラサルヲ如何  
セント是ニ於テ戸原卯橘等十二人恨ヲ吞ンテ自殺シ龍太郎ハ平野國臣ト共ニ澤  
主水正ヲ奉シテ此地ヲ去ル後再ヒ生野銀山ニ歸リ出石藩ノ爲ニ捕ハレ翌元治元  
年正月姫路藩ノ手ニ渡リ終ニ京都ニ護送六角ノ獄ニ投セラル爾來鐵窓ノ下ニ呻  
吟スルコト五年慶應三年十一月十八日病ヲ獄中ニ死ス時ニ年三十三

辭世

忠義由來在攘奸 勤王事業極艱難 從容今日臨刑處 請看赤心赤於丹  
事なきさいのるは人の常なれと

やむにやまれぬ今の世のなか

右辭世詩歌ハ龍太郎獄ニ在リ白木綿ノ單衣背面ニ認メタルモノニシテ同獄室ニ  
在リシ四條公御預リ兵士巢内式部ナル者無事出獄ノ際同人ノ衣服ニ仕込窃ニ獄

外ニ持出セシモノナリト云フ

明治二十四年十一月五日東京靖國神社ニ合祀セラル

○早春の水

ふらなくに河瀬の水のまされるは

春立けふの雪けなるらん

○山家の子の日

やまざとば小松も軒にちかければ

ひかて子の日を祝ふなるらめ

○春日よふやくなかし

昨日よりけふはいろそふ青柳の

糸よりななき春ののとけさ

○梅に寄る述懐

心あらば囚屋のうちにはふきおくれ

君か軒端の梅の花の香

○加茂川夏月

立歸るをりこそなけれ加茂川の

清きなかれに月を眺めて

○夕立

夕立の空のけしきのはけしさに

思はぬかどに雨宿りせり

此ころのあつさもやかてわずられて

人こゝちするけふの夕立

○牢屋さやけき月を見てよめる

かく計りさやけき月をなかなければ

牢屋の内の心ちこそせぬ

○生野の名残

わか爲にをしむ命にあらぬとは

神や志るらん日本魂

ちはやふる神のめくみしまさしくは

またも世に出てはみしはらはん

玉鉾の道の數くおほければ

つくす誠のみちは一筋

たとへ身はふちせとかはれ加茂川の

清き心は水にならはん

思ふこと明石のうらの人もかな

我かふる里に音信をせん

数ならぬ身にはあれども丈夫の

つくす誠を君に見せばや

岩かぬもくたかんものは丈夫の

盡す誠のちからなりけり

よるへなき此身は糸にあらねども

むすはれとけぬ我思ひかな

君か爲盡す心になりしより

妻子のなきもうれしかりけり

君を思ひまどろむひまもなきころに

いたつらにのみたつる月日か

○題しらず

たらちねに先たつ罪は重くとも

いかよはすへき天皇のため



贈從五位片山九市小傳

### 贈從五位片山九市小傳

片山九市名ハ春量文政十一年二月一日丹波國氷上郡黒井村ニ生ル其祖先ハ織田信長ノ世一城主タリシ片山淡路守ナリト云フ安政五年三月黒井村ニ大火アリ殆ント一村ノ大半ヲ燒ク當時其系譜ハ舊記ト共ニ灰燼ニ歸シタルヲ以テ詳ナラス徳川幕府ニ至リ家世々庄屋ヲ勤メ又領主龜山藩黒井村出張所銀札場係ヲ勤メ屢領主ノ財政ニ資スル所アリ九市ノ父ヲ新五左衛門春乗ト云フ九市ハ其長男ナリ九市幼ニシテ文武ニ志シ八歳ノ比ヨリ同村神光寺住職覺如師ニ就キ讀書習字ヲ修ムルコト三年天保十年ノ頃ヨリ福知山藩上野俊平ニ從ヒ漢學ヲ修ムルコト五年尋テ篠山藩士赤木牧五郎ニ就テ馬術及劍鎗ノ道ヲ學ヒ又同藩ノ儒者關重郎左衛門ニ師事シ漢學ヲ修ム其間弘化五年ヨリ嘉永二年ニ至ル業成リテ父ノ職ヲ襲ヒ銀札場係ヲ命セラレ傍ラ自邸内ニ道場ヲ設ケテ近郷ノ子弟ヲ教授ス就中馬術

練達ノ名高ク龜山藩黒井陣屋詰ノ諸士來テ師事スルモノ頗ル多シ九市容貌秀麗  
品格卓逸衆ニ超ユルヲ以テ城下ヲ過クル毎ニ人皆之ヲ國主ト誤リ路傍ニ低頭ス  
ルモノアルニ至ル資性豪放不羈家事ヲ修メ嘉永六年米艦浦賀ニ來リシヨリ以來  
屢々武術修業ヲ名トシ外遊ヲ事トス曾テ丹後國岩瀧村ニ至リ同地ノ素封家千賀  
量助等ニ交ハリ親シク相往來ス終ニ同地ニ寓シ量助ノ孫女ヲ妻トシ當時提燈傘  
ヲ製スルヲ以テ業トナシ專ラ世情形勢ヲ聞クニ便ス其間廣ク諸國ノ志士ニ交ハ  
リ殊ニ宮津豊岡出石等ノ諸藩ニ出入シ專ラ馬術ヲ教授ス曾テ但馬ノ人中島太郎  
兵衛北垣普太郎等ト相結托スル所アリ文久三年八月中山卿義ヲ大和國五條ニ舉  
クルヤ京都ニ在リ故アリテ會スル能ハサリシカ同年十月生野義舉ノ事アルヤ京  
都ヨリ率先起テ之ニ應シ奔走頗ル勉ム軍敗ルル時恰モ斥候ト爲リ出テ、但馬國  
納座村ニ在リ土兵ノ要撃スル所ト爲リ出石藩ノ手ニ捕ヘラル實ニ同年十月十四

日ナリ出石藩ノ獄ニ下リ翌元治元年京町奉行屋敷ニ護送セラレ同年七月十九日  
斬ニ處セラル或ハ云フ病シテ獄中ニ死スト年三十七

九市初メ龜山藩士木村某ニ養ハル故アリテ去ル中年千賀氏ヲ冒シ九左衛門ト稱  
ス後生野ノ事ニ與ルヤ一ニ龜山藩士木村愛之助ト稱セリ九市ノ丹後岩瀧ニ在ル  
ヤ屢京都ニ出テ妹たみノ夫タリシ同地酒造家鈴鹿幸次郎ニ頼リ三條岩倉中山大  
原澤等ノ諸卿ニ出入シ專ラ國事ニ奔走シ毎ニ資金ノ調達ヲナシ爲メニ家財ヲ倒  
盡スルニ至レリ又曾テ中山大納言ヨリ同人カ國事奔走ノ勞少ナカラス殊ニ軍用  
金五千兩ヲ調達シタル盡力ニ對シ他日事成ルノ節二萬石ノ諸侯ニ封セラルル様  
奏聞スヘキ旨ヲ記シタル御墨付ナルモノヲ拜受セリ當時九市固ヨリ之ヲ受クル  
ヲ肯ンセサリシカ同人放蕩ノ故ヲ以テ父ノ勘氣ヲ蒙リ居リタルカ爲メ父ノ死後  
母ノ生前ニ於テ之ヲ免サレンコトヲ望ミ妹たみハ同人ノ素行修マラサルハ全ク

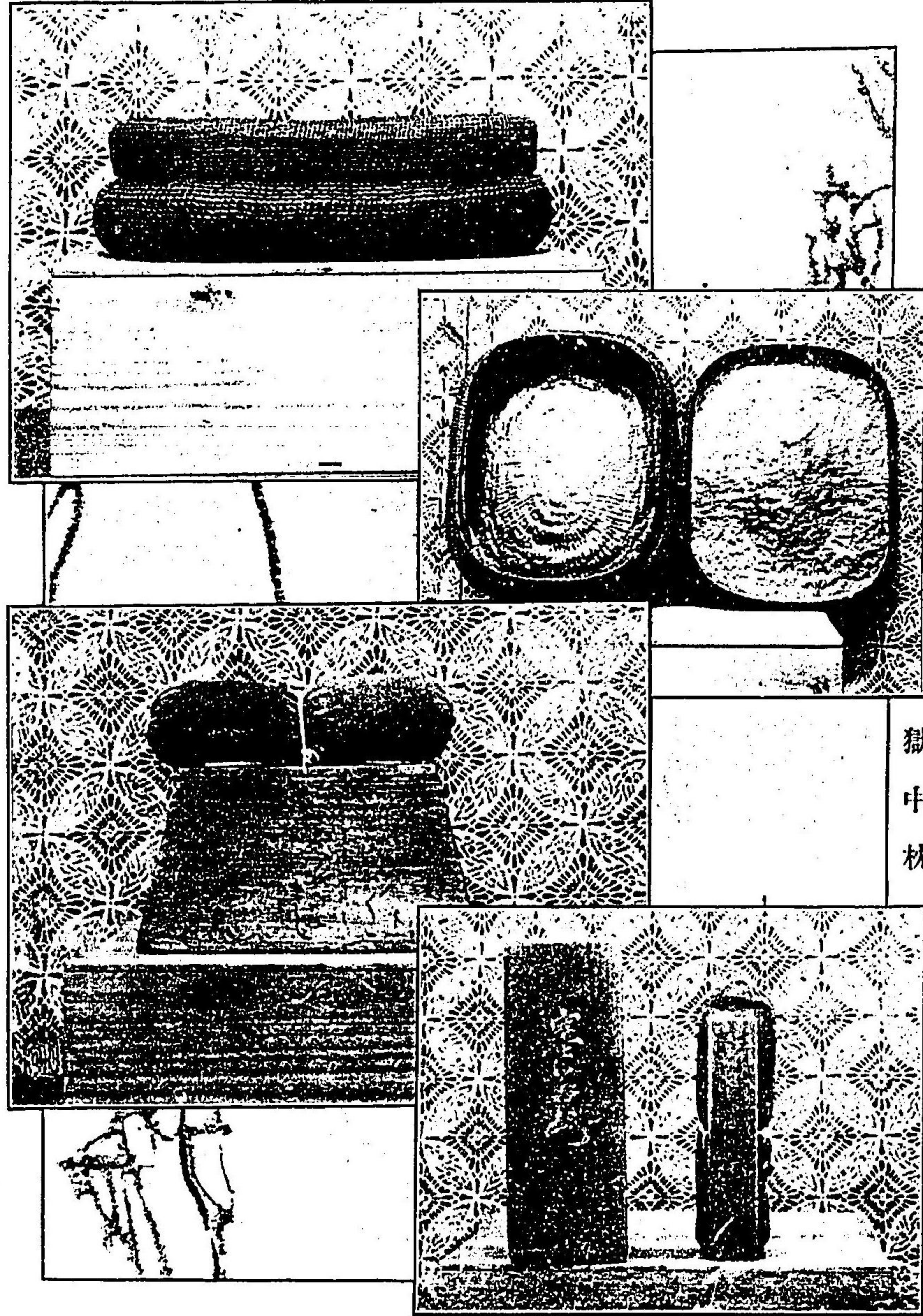
假裝ニシテ其實國事ノ爲メ多額ノ金額ヲ調達シタルコトヲ察知シ右御墨付ヲ母ニ示シ遂ニ其勘氣ヲ免サレタリト云フ又生野騷動ノ節偶同志者中右御墨付ノコトヲ記シタル手帳ヲ路ニ遺失シタル爲メ終ニ幕吏ノ知ル所トナリ爲メニ九市ハ其厄ヲ蒙リシト傳フ該墨付ナルモノ其後たみ久シク之ヲ保存シ居リシカ豊岡縣ニ於テ九市ノ身上取調ノ事アリ一族其難ノ及ハンコトヲ恐レ終ニ之ヲ火中ニ付セリ九市死後但馬國山口村官祭招魂社ニ千賀九左衛門トシテ祭祀セラレ又京都東山靈山ノ墓碑ニ木村愛之助トアルハ即チ九市ナリ其後明治二十四年十一月五日靖國神社ニ合祀セララル九市ノ甥片山義道家ヲ繼キ今現ニ氷上郡黒井村助役タリ

\*\*\*\*\*

從五位永田伴正小傳



函 紙



獄  
中  
枕

永田精四郎所藏

紙函記

紙函深三寸濶一尺許扁平而附圓漆色黯以藉吾友永田君伴正在獄中所手製也顧憶日國家多事幕府持開國之議而朝廷有鎖港之論各藩志士奔走其間議論鼎沸當是時藩議姑息士氣萎靡不振獨君與河合宗元等十數人卒先唱尊攘之大義慷慨淋漓誓以身報國終觸幕府忌諱宗元等八人河合鐵兵衛伊丹六松下鐵馬江坂元之助市川豐次處死罪而君與武井守正西村武正等四人武井實三近藤啓藏西村市太郎繫獄實元治元年十二月廿六日也君好詠和歌辭物無聊之餘吟詠自遣又戲捻紙糊飯塗以漆遂成此一種素朴之奇器王政復古之始君得恩赦命歸路藩外交方既而擢任彈正大巡察叙正七位後再任藩大屬掌會計之事尋補飾磨縣十等出仕掌聽訟之事後致仕從事商業今也為姫路第三十八國立銀行取締役兼支配人而宗元等八人墓木皆既拱矣時撫此器追懷往事感慨悲愴蓋有如隔世矣哉頃者予訪君於其文華堂談適及當年之事君出此器語予曰此器之成適與西村武正同檻為予朱書數字于函中時霹靂一聲砲丸連發屋瓦皆震守獄者密來報曰朝廷使岡山藩兵來擊也二人相顧愕眙不覺悲喜交至今而思之良如昨日屈指既二十五年而西村亦既歸黃泉矣因相共撫然者久之嗚呼此器也成于鐵窓血淚之餘者也為君之子孫者庶幾珍重之莫誤父祖之艱苦乎哉

明治二十五年十月上澁於桂華書屋舊友生下田重復

紙函の蓋裏 朱筆字

獄居無聊捻紙作此々人之好與物并美永兄笑曰如死我視志士溝壑令懦夫起他日寬宥百悲一喜國恩廣大永藏此裡

丙寅之秋七月初吉 破笠題

紙函の底 朱筆字

作りなす此文庫のふたゝひは世にあふ事のかたみ共みよ

慶應三年八月日 たかふみ

永田伴正獄中の枕

枕の側面 墨筆字

よを照す光しなくはなかくに 笠も籠にこもらざらし

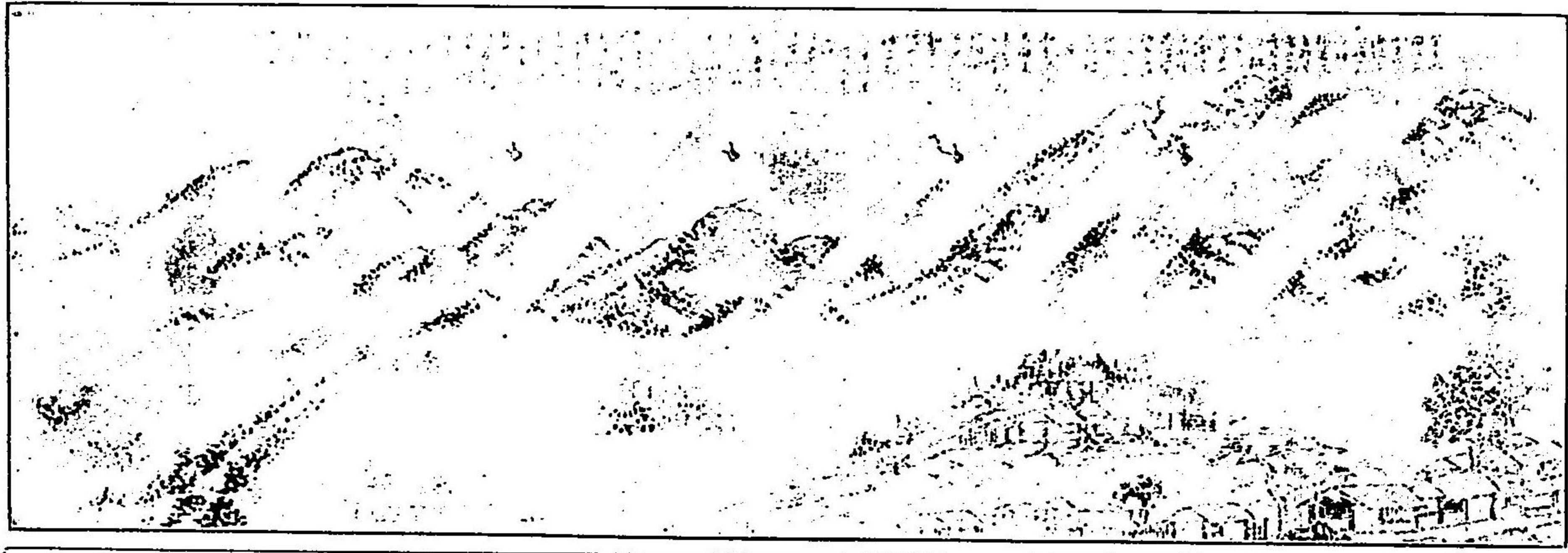
枕の裏 墨筆字

まのふれとたもとに あまる涙川せきとめ兼し 秋の夕暮

彌四

枕の底 銀粉字

寒翁枕



永田精四郎所藏

余曾兵庫驛遇雨有詩云、海  
風送雨暗前途、驛樹蒼茫看  
欲無、奔走東西成底事、楠公  
墓下甘嗚呼、三間君爲永田  
兄、作此圖、暗與余詩合、可謂  
一奇也、重賦小詩以博一噱、  
孤劍慨然、兵庫來津頭、欲去  
也、低回攘夷、聊盡勤王志、獨  
有忠臣楠子知、余屢往來于  
此地、大愛魚味之美、且性多  
病、不耐仕官、他年隱居焉、欲  
製嗚呼饅頭、而以供衣食、盡  
我餘年矣、三間永田二君如  
過此處、必尋嗚呼之牌、請試  
喫余所製之饅頭、想必相見  
曰、嗚呼美哉、此饅頭、亦想必  
相見曰、嗚呼善哉、子所曾謂、  
今而遂逸居此樂土、使余亦  
暢然、又想必相見一笑而曰、  
嗚呼此一嗚呼、余不知何嗚  
呼也

菊屋主人武正題

### 從五位永田伴正小傳

永田伴正幼名ハ亥之次姫路老臣内藤家ノ臣永田善兵衛ノ三男ニシテ天保十年十一月ヲ以テ生ル十二歳ノ時姫路河合家ノ臣鈴木半介ノ養子ト爲リ後彌四郎ト改稱ス十八歳ノ時故アリ鈴木家斷絶ス二十歳ノ時實家永田姓ヲ以テ再ヒ河合家ニ歸從ス時ニ河合惣兵衛等深ク國事ヲ憂フ依テ之ト結托シ東西ニ奔走シ以テ尊王ノ大義ヲ唱フ延テ土佐藩阪本龍馬肥後藩住江甚兵衛岡藩小河彌右衛門津山藩鞍掛寅次郎等ノ志士ト氣脈ヲ通シ某々大諸候ヲ要撃シ尋テ某所ニ義兵ヲ舉ケンコトヲ謀ル事成ラスシテ止ム然レトモ仍ホ斬姦ノ舉等過激ノ所爲至ラサルナキヲ以テ藩主ノ忌憎ヲ受ルコト倍甚シ藩士ノ間相見ル亦仇讐ノ如シ茲ニ於テ以爲ラク如斯俗藩ニ在テ迂吏ノ毒手ニ徒死センヨリハ寧ロ脱シテ西國ニ走リ他藩ニ投シ以テ同志ト共ニ事ヲ爲サント偶病ヲ得テ荏苒果サス時ニ幕府藩主ニ内命ヲ傳

へ幽囚セラルル元治元年十二月家名斷絶終身禁獄ノ處刑ヲ受ク時二年二十六同シク刑ヲ受クル者武井守正、三間半一、西村市太郎(武正)近藤燕、山口太藤平、自刃ノ命ヲ受クル者河合惣兵衛、伊舟城源一郎、萩原虎六、市川豊次、松下鐵馬、江坂元之助斬首ノ刑ヲ受クル者江坂榮次郎、河合傳十郎(惣兵衛ノ養子)ナリ爾來鐵窓ノ裡ニ在テ仍ホ國事ノ是非ヲ窺フ然レトモ獄吏ノ警戒嚴ニシテ毫モ聞知スル能ハス茲ニ於テ同囚相議シテ云ク空ク獄中ニ餘生ヲ送り恥テ後世ニ遺サンヨリハ今ヨリ食ヲ絶チ餓死スルニ如カスト後日記念ノ爲メ紙ヲ捻リ一文庫ヲ造リ其中ニ和歌ヲ書ス

作りなす此文庫のふたゝびは

世に逢ふことのかたみともみよ

文庫尙ホ家ニ藏ス時ニ某藩同志ノ士食ニ混シ密書ヲ投ス披テ之ヲ閱セハ即チ形

勢一變素志ヲ達スルノ期アルヲ知ル依テ早死ノ念ヲ斷ツ明治元年一月十六日藩遂ニ朝敵ノ汚名ヲ受ケ王師ノ向フ所トナリ忽チ悔悟歸順ヲ表シ開城降服ス茲ニ到テ獄ヲ開テ諸囚ヲ解放ス而シテ伴正等同志ノ囚ハ敢テ放タス却テ將ニ害ヲ加ヘントスルノ聞アリ危機一髮獄吏ヲ賺説シ獄ヲ開カシメ夜中城外ニ出テ藩吏ニ追會シ懇勸自首ノ意ヲ述フ藩吏又伴正等六名ヲ捕ヘ再ヒ野外ノ獄ニ下シ警戒最モ嚴ナリ官軍ノ將藩吏ニ向テ速ニ伴正等ヲ放免シ歸順ノ實ヲ舉ケンコトヲ勸告ス藩吏言チ左右ニ托シテ應セス幾モナク大赦ノ恩典ヲ蒙リ囚苦五年ニシテ再ヒ青天白日ノ身トナルヲ得タリ其獄ニ在ルノ間詠スル所ノ和歌頗ル多ク自ラ獄中百首ヲ撰ス

明治元年六月藩ノ秘命ヲ帶ヒ江戸ニ出テ事ノ藩邸ニ寓スル不可ナルアルヲ以テ因州藩ノ邸ニ寄寓シ仍ホ國事ニ奔走ス八月老臣河合屏山(惣兵衛ノ宗家)江戸ニ

在テ數年ノ間幽閉セラル伴正之ヲ憂フルコト久矣一夜大雨ニ乘シ其寓所ニ忍ヒ  
屏山ニ面シテ云フ君此宵窃ニ當所ヲ脱シ因州邸ニ走リ暫ク迹ヲ潛メ時機ヲ視テ  
國ニ歸リ先ツ藩政ヲ改革シ進ンテ君カ多年ノ大志ヲ貫徹スルノ道ヲ講セハ如何  
ト蓋シ同邸同志ノ士君ニ待ツ所アルヲ以テナリ屏山直ニ其言ヲ容レ坐ヲ起ツ即  
チ之ヲ護テ因州邸ニ入ル日ナラスシテ屏山朝命ヲ拜シ公然上京シ又之ニ隨フ九  
月又屏山ニ隨テ歸藩ス茲ニ於テ屏山藩政ヲ釐革シ大志又成ルノ緒ニ就ク十月河  
合家ノ用人トナリ拾人口ヲ領受ス尋テ本藩ニ命セラレ手當トシテ五人口及外交  
月費金拾五圓ヲ給セラル後外交兼公用人ヲ命セラレ二年春藩命ヲ以テ再ヒ江戸  
ニ出ツ職務前ニ同シ七月彈正臺ニ召出サレ少巡察ヲ拜命ス八月信州地方不穩ノ  
報アリ同地方及東山道巡察ヲ命セララル十月歸臺ス十一月大巡察ニ陞任ス三年二  
月本官ヲ以テ西京在勤ヲ命セラレ急行ス二月從七位ニ叙セララル四月官員減省ニ

付本官ヲ免セラレ位記返上ス勤仕中勵精ノ旨ヲ以テ金百圓ヲ賜フ五月歸藩ス六  
月本藩ニ召抱ヘラレ中小姓祿拾人口ヲ給ヒ少屬會計局出仕ヲ命セララル七月通稱  
ヲ廢シ件正ト改名ス九月出京彈正臺ヨリ再ヒ出仕ノ内命ヲ受ク辞シテ出テス四  
年二月權大屬ニ昇任聽訟掛兼斷獄掛ヲ命セララル八月大屬ニ昇任シ會計掛ヲ命セ  
ラル十二月飾磨縣ヲ置カレ十等出仕又聽訟掛兼斷獄掛ヲ命セララル五年七月長官  
ト議協ハサルノ故ヲ以テ請テ退職ス爾後身ヲ實業ニ委センコトヲ期シ六年六月  
姫路ニ於テ米商會所ヲ興シ同所ニ從事ス九年二月同會所閉鎖シ十一年十一月姫  
路第三十八國立銀行創設ニ從事シ支配人ニ撰ハル二十二年四月姫路市會議員ニ  
撰ハレ尋テ市會議長ニ推撰セララル二十三年一月第三十八國立銀行取締役ニ撰ハ  
レ支配人ヲ兼務ス二十七年七月同行常務副頭取ニ互撰セララル二十八年九月同行  
頭取ニ互撰セララル二十九年七月姫路師團兵營新設セララル、ニ際シ金壹千圓陸軍

省へ獻納シ更ニ其從事スル所ノ第三十八國立銀行ヲシテ金壹萬圓ヲ獻納セシメ  
又市内有志者ヲ勸誘シ總額參萬千五百圓餘ヲ以テ地所ヲ購入シ之ヲ獻納セシム  
三十一年六月第三十八國立銀行滿期トナリ株式會社三十八銀行ト改稱繼續ニ際  
シ重任頭取ニ互撰セラル八月前年獻金ノ賞トシテ銀盃一個ヲ下賜セラル同月二  
十七八年戰役ニ際シ陸軍省恤兵部へ金壹百圓獻納シタル賞トシテ木盃一組下賜  
セラル三十二年四月特旨ヲ以テ從六位ニ叙セラル

明治三十六年十月初旬伴正偶腸ヲ病ム臥席月餘十一月 陛下陸軍特別大演習御親閱ノ爲メ行幸觀兵  
ノ盛式ヲ姫路ニ舉行セラル、ヲ聞キ深ク之ヲ感喜シ殊ニ同月十三日舊藩ノ志士故河合屏山等贈位ノ  
事アリ伴正亦特旨ヲ以テ位ニ叙テ進メラレ從五位ニ叙セラル皇恩優渥感泣措ク能ハズ病爲メニ輕快  
ヲ覺ニ十五日自ラ舞子行在所へ御禮ノ爲出頭シ尙本縣知事ノ手ヲ經テ同人秘藏ニ係ル明珍宗家ノ鐵  
製龍ヲ献上セリ翌十六日觀兵式ヲ舉ケラルルニ當リ 陛下姫路ニ行幸第十師團偕行社ニ御少憩アラ  
セ給フヤ舊藩主伯爵酒井忠興ト共ニ親シク拜謁ヲ許サレ無上ノ光榮ヲ拜セリ尋テ河合屏山ノ爲ニ碑  
ヲ建テ贈位追告ノ祭典ヲ營マント欲シ屏山ノ孫升吉ヲ東京ヨリ招キ共ニ與ニ斡旋頗ル力ム十二月二

日碑成リ飾磨郡系引村仁壽山梅ヶ岡ノ先塋ニ建立シ深烈タル寒風ヲ冒シテ坂路ヲ登リ自ラ祭事ニ與  
ル同四日病再々ヒ發シ翌五日起タス終ニ不歸ノ客トナル同七日景福寺ニ葬ル子ナシ侍從武官長男爵  
岡澤精ノ四男精四郎ヲ養テ之レカ嗣ト爲ス

○攘夷沙汰有けるとき

ぬみじらは火矢にうたへて死かばねの

大海原にしまなさむかも

○述 懷

玉銚の道しある世にめぐり出て

ふたゝび君につかへてしがな

○寄鳥述懷

長き夜を思ひあかしの浦千鳥

鳴音を添へて君につたへよ

○題しらず

天にます先の帝の御よぎしの

御いつかしくみおほにな思ひる

○卯月の初め清水の獄に在りて郭公の顔になきけるを同し住まひしける人々と共にかたらひてよめるわびて住む心くみてか此朝け

清水の杜に鳴くほととぎす

○獄中月を見て

思ひわびまごるむ夜半の夢覺て

ぬるゝ枕にやどる月かけ

○獄中に雁をきよて

夜は更ぬ天飛ぶ雁の聲もうし

ぬれば古里いめにしみゆる

○冬の上ひとやにありて

たゞむきをむなしに組みてさむしろに

いをねぬよへは涙してほる

○ひとやにありて冬の夜よめる

さむしろを片敷まきていねがてに

夜たゞなげかひいきづきなかゆ

○近くひとやを出ん事のありなむなど人のうちかたらひけるころは卯月の初めつかたになむ



此うへの願ひも今はなつごろも

ひとへに歸る時は來にけり

○いさゝかこころをさしをわたる事のありてそのこころばへを  
世のさがをしぬびがへしのすきまより

ゆらにもりくる日の大御影

○又今朝こそあれ目出度歌よまむとて鶴聲非一といふ事を  
朝日子の御かひまちわてけさのあさけ

雲井の田鶴もさばに鳴なり

○題しらず

九重にかよりし雲のかつ晴て

日つぎの君を仰く尊とさ

○詠復古

御代こそは長閑にならめけふよりは

天津日嗣の神のまに

○我が君大江戸にましくていたく煩ひたまへるよしき  
てうちおどろきけれどかゝる身にてはいかゞ共せんすべ  
をしらねばたゞひたすらにたなそと打ならしつゝ神に祈  
りてみこころよからん事をのみ願ひつるにけふしも其し  
るしにか有けんしばしがほど元の如くすこやかにならせ  
給ふけるよしきこゝろてよろこばしさいはんかたなしされ  
はおほけなくもその心ばへをよみて猶行末のあらましを  
ねぎはべるにこそ

朝夕に祈りしまことうけつらん

神の御蔭もあらはれにけり

○葉月もちの夜の記

うらがなしきかなや、おのれある世にあらましかは、今宵は例なりとて、  
君のみまへにめされて、御酒など玉はりて、何くれとうち興ぜさせ玉はま  
しき、今はかうあらしくしきむしろじきにはひくまりて、涙にさへやつ  
ればてたるひとへきぬをなむ身にまとひたる、いかめしきひとやのかご  
くしき柱のすき間より、いとまろやかなる月影のさしのぞきたる、さす  
がに哀れにこそ、おなじすまふたる人のよめる、

うちむかふそなたは雲のかけもなし

われをもてらせ月よみの神

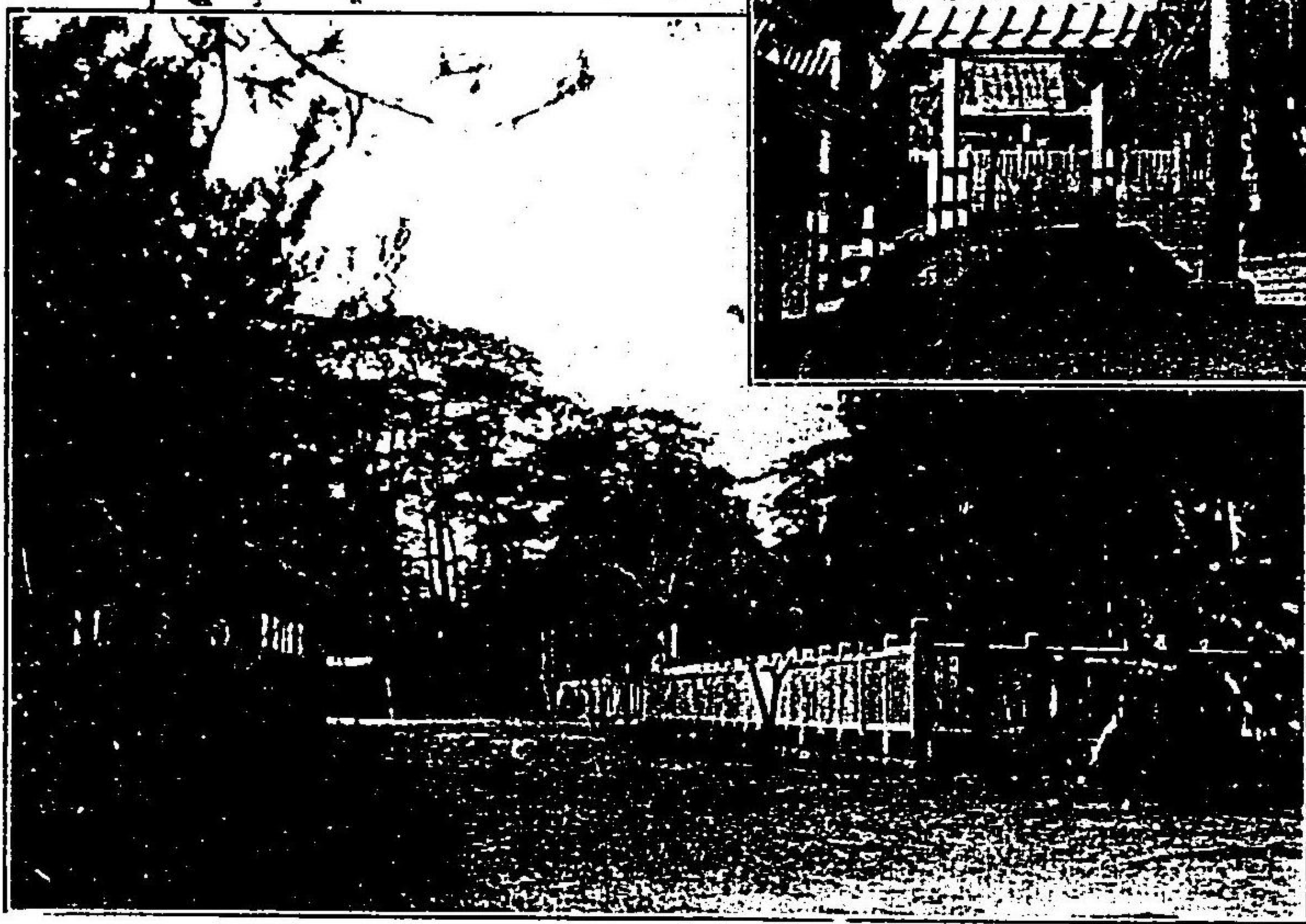
そも此ひとやは、ひがしにのみちいさき窓ありて打向ふなり、朝な〜か  
しわ手うちつゝ伊勢の大御神を始め奉り、二荒山にます大神、又うつつに  
ますいくさの君、我國の殿の君と若君をこそをかみ侍れ、猶そなたの空は  
塵はかり雲だになければ、我真心のくもりなきをも、ともにてらし玉へと  
なむ月の神にこひ聞はたる、歌なめる、とをもふにも猶やこりたる袖の上  
の月よ、盃にうかべなれこしかげなりや、いかにかと、いとうらがなしき  
や、

\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*  
\*\*\*

官幣大社伊弉諾神社



神社正面

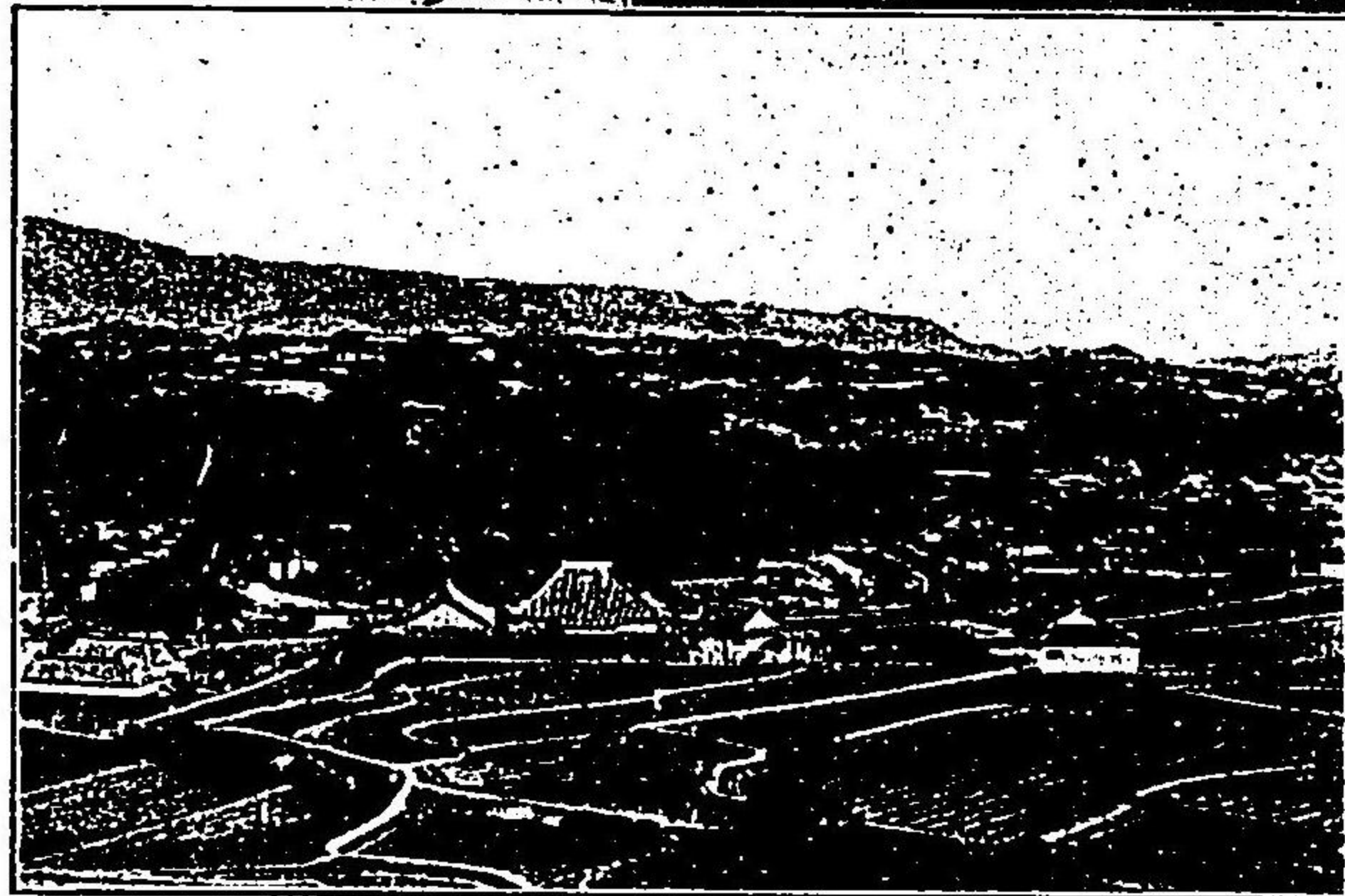


神社側面

拜 殿



神社遠景



社務所



### 官幣大社伊弉諾神社

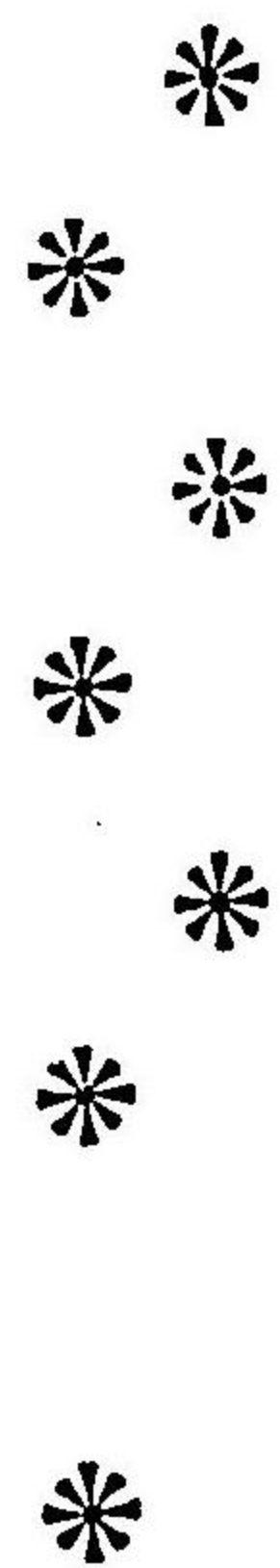
官幣大社伊弉諾神社ハ淡路國津名郡多賀村ニ在リ即チ淡路島ノ西岸郡家村ヲ距ル南十八町東岸志筑町ヲ距ル西一里廿三丁ニ位シ山巒其三面ヲ圍繞シ一面海ニ望ム所地勢平坦ニシテ森林蒼鬱ノ中宏壯ナル社殿ヲ構フ眞ニ幽巖ノ勝區タリ本社ハ延喜ノ制名神大社ニ列セラレ後本國ノ一宮ト稱ス延喜式神名帳頭註ニ淡路津名郡伊佐奈伎又曰多賀又天地大明神トアリ祭神ハ伊弉諾尊ニシテ諸國神明帳淡路ノ部ニ淡路伊佐奈伎神社伊弉諾尊トアル即チ是ナリ日本書紀神代卷ニ伊弉諾尊神功既畢靈運當遷是以構幽宮於淡路之州寂然長隱矣トアルハ即チ此ノ大神ノ淡路國ニ祭祀セル起源ナリ社地ハ往古ヨリ多賀村ニ在リシコトハ淡路常磐草ニ津名郡郡家郷伊佐奈伎神社多賀村にあり一宮多賀社トアルニヨリ明ナリ其一宮タリシコトハ大日本國一宮記ニ伊佐奈伎神社號多賀トアリ又伯家部類ニ神

祇官御年貢進社事淡路國一宮炭五十籠木五十束(中略)右大略注進如件永萬元年六月日トアルニ依リ知ルヘシ

其神領ニ就テハ新抄格勅符抄ニ大同元年牒津名神十三戸トアリ又淡路常磐草ニ元文二年四月廳宣一通賀集山護國寺にあり其文に云く廳宣留守所可令早引募一ニ宮法華櫻兩會舞樂料荒野拾町募事右兩會舞樂料田荒野拾町可引募東神代八木兩鄉等無催促田代云々早令開發榎列並兩神代之荒野可引募彼料田之狀仍執達如件トアリ以テ其神領ノ大ナルヲ知ルヘシ

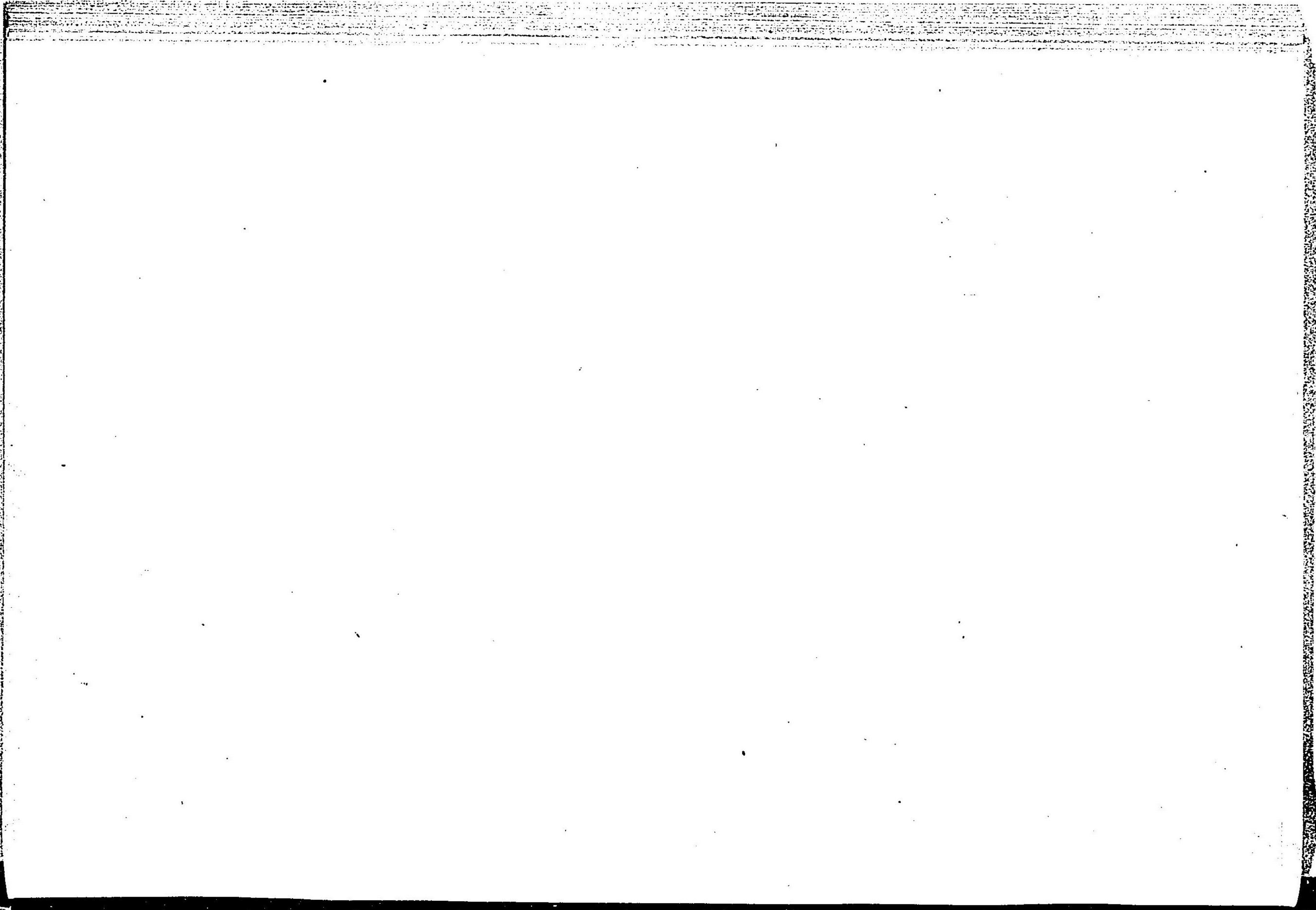
本社ハ初メ明治四年五月國幣中社ニ列セラレタリシカ後十八年四月二十二日官幣大社ニ列セラル而シテ本社ハ往古以來幾回ノ改築ヲ經タルモノナルヘシト雖モ其時期詳カナラス今ノ本殿ハ即明治十二年九月ノ造營ニ係ル幣殿拜殿其他十數棟ノ建物アリ社地總テ九千四百餘坪ヲ占メ極メテ宏大ナル境内ニシテ老杉古

松鬱々繁茂シ殊ニ本社ノ東方玉垣内ニ連理ノ榊並ニ子生椿アリ其子生椿ハ木ニ瘤アルヲ以テ名ケタルモノニシテ俗ニ子ナキ者之ヲ懷抱スレハ靈瑞アリト云フ又本社祭式中「粥タメシ」ナルモノアリ毎年正月ニ當リ其年ノ豊凶ヲトスル古式ニシテ今尙之ヲ傳フ本社ハ毎年四月二十二日ヲ以テ例祭トス

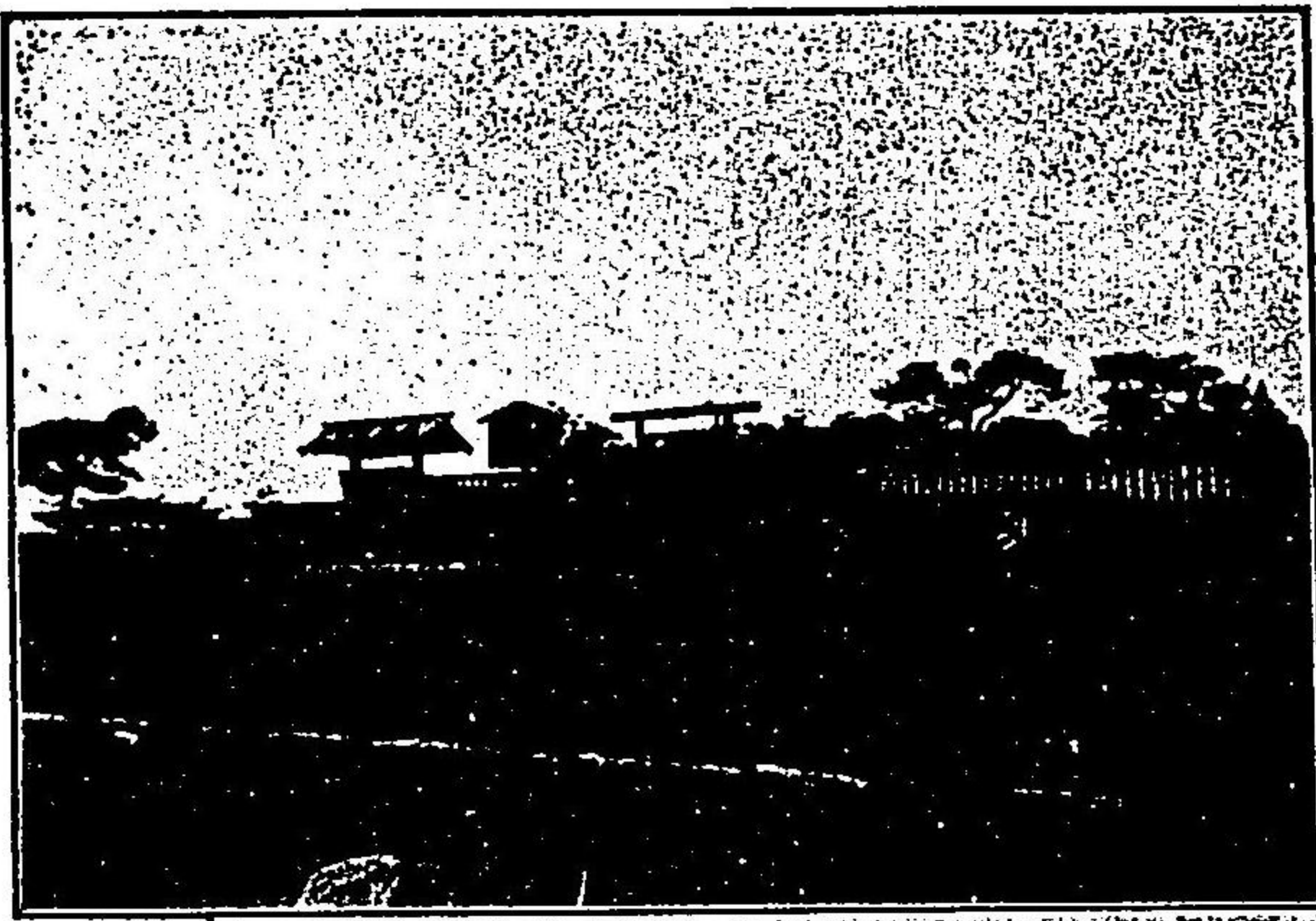


日岡御陵





日岡御陵



日岡山全景

## 日岡御陵

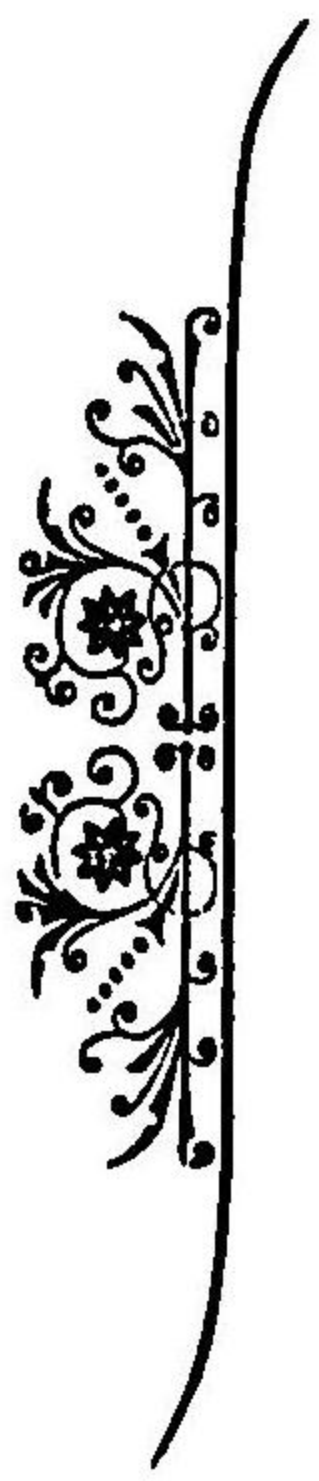
日岡御陵ハ播磨國加古郡氷丘村ノ内大野ニ在リ山陽鐵道加古川停車場ヲ距ル北約二十三町ニシテ日岡山ノ麓ニ至ル山麓ニ郷社日岡神社アリ該神社ヲ右シ坂路凡ソ三丁餘ニシテ山頂御陵墓ニ達ス而シテ其兆域ハ東西四拾間南北七拾五間ニ亘リ道路敷ヲ併セ總テ參千貳拾貳坪トス景行天皇ノ皇后播磨稻日大郎姬ノ御陵墓ナリ

日本書記ニ景行天皇二年春三月丙寅朔戊辰立播磨稻日大郎姬（一云稻日稚郎姬）  
郎姬此云異羅菟咩（爲皇后云々五十二年夏五月甲辰朔丁未皇后播磨大郎姬薨云々トアリ又播磨風土記ニ賀古郡（今ハ加古ト改ム）ノ條ニ望覽四方云此土丘原野甚廣大而見此丘如鹿兒故名曰賀古郡狩之時一鹿走登此丘鳴其聲比々故号日岡此岡有比禮墓所以号禮墓者昔大帶日子命誂印南別嬭之時云々爾時印南別嬭聞而

驚畏之即遁度於南毗都鳥於是天皇乃到賀古松原而竟訪之於是白犬向海長嘯天皇問云是誰犬乎須受武良對曰是別嬪所養之犬也勅云好告哉故號告首乃天皇知在於少島云々遂度相遇於是御舟與別嬪舟同編合云々還到迎印南六繼村始成密事故曰六繼村勅云此處浪響鳥聲甚譁南遷高宮故曰高宮村是時造酒殿之處即号酒屋村造贊殿之處即号贊田村造宮之處即号館村又遷於城宮田村仍成婚也云々有年別嬪薨於此宮即作墓於日岡而葬之舉其尸度印南川之時大飄自川下來纏入其尸川中求南(南ノ字誤寫ナランカ)不得但得匣與褶即以此二物葬其墓故號褶墓トアル即是ナリ謹テ按スルニ御名日本書記ト風土記ト文字ヲ異ニスト雖トモ其義相同シ即チ稻日ハ印南ニテヒトミハ五音相通ス大郎姫ハ書記本文ノ註ニ稚郎姫トアルニ據ルニ別嬪ト同シ義ナリ

該御陵墓ノ敷地ハ年序ヲ經ルニ從ヒ日岡神社ノ境内ト爲リタルモ明治十七年十

月整然之レカ區域ヲ改メ御陵墓ニ治定セラレ二十一年ニ至リ修理全ク工ヲ竣ユ  
明治十八年 天皇陛下山口廣島岡山諸縣御巡幸ノ際御歸途八月九日加古川驛ニ  
鳳輦ヲ駐メサセ玉ヒ片岡侍從ヲ遣ハシ幣帛神饌ヲ捧ケラレタリ



官幣大社廣田神社

面正社神

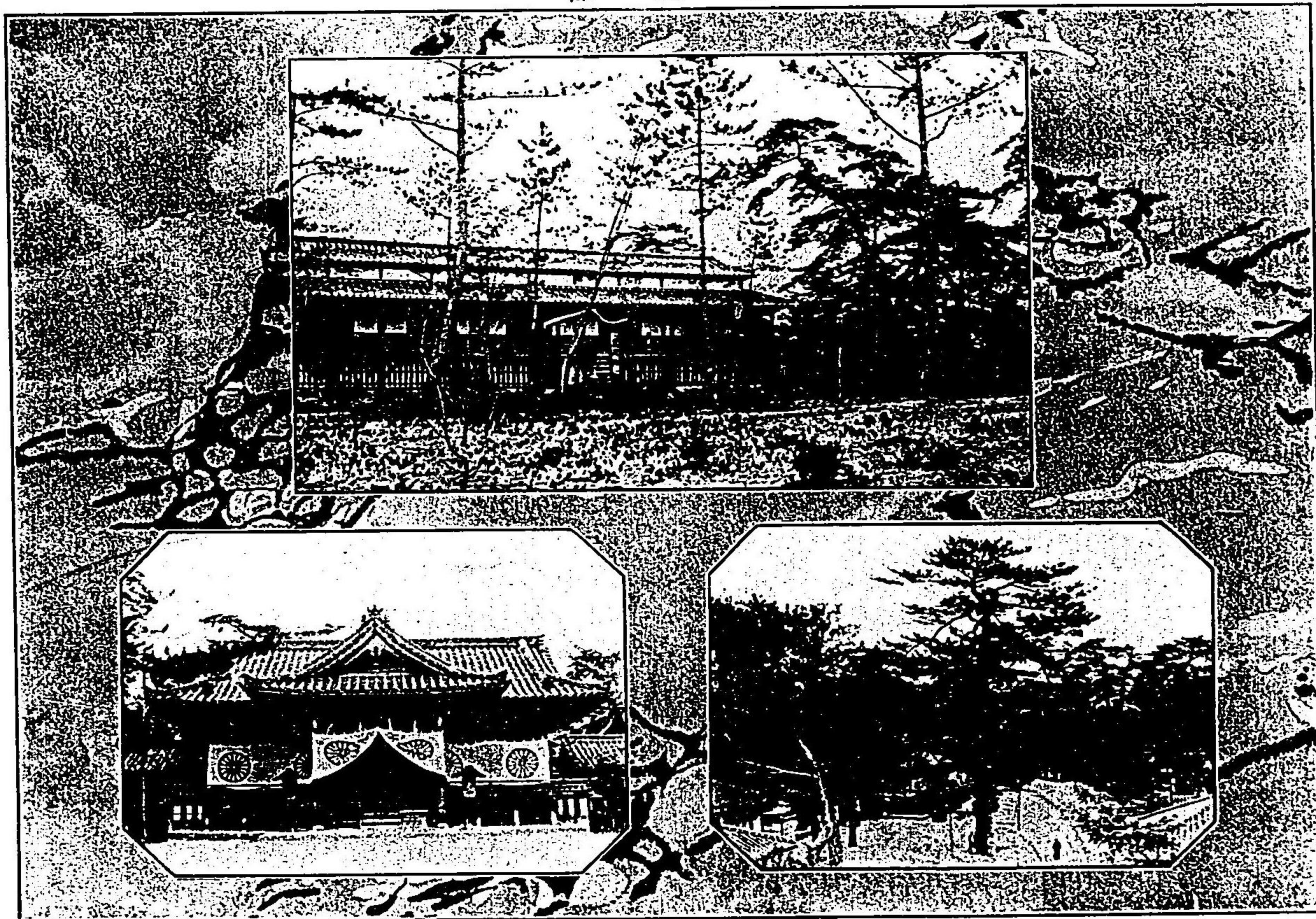


居鳥ノ一先場馬



景遠社神

望遠館



拜殿

神社側面

## 官幣大社廣田神社

官幣大社廣田神社ハ攝津國武庫郡大社村ノ内廣田村ニ在リ官設鐵道西宮停車場  
ヲ距ルユト西北凡ソ十八町土地高爽ニシテ西北山巒ニ接續シ遙ニ攝津ノ海ヲ望  
ミ最モ景勝ニ富ム社殿ハ即チ丘岡ノ半腹平坦ノ地ニアリ

本社ノ祭神ハ天照大御神ノ荒魂ニシテ御鎮座ノ始メハ神功皇后攝政元年二月三  
韓ヲ征伐シテ凱旋シ給ヒシ時神勅ニ依リテ祭ラセ給フモノナリ日本書紀神功皇  
后ノ卷ニ皇后聞忍熊王起師以待之命武内宿禰懷皇子橫出南海泊于紀伊水門皇后  
之船直指難波于時皇后之船廻於海中以不能進更還務古水門(今武庫郡西ノ宮港)  
而卜之於是天照大神誨之曰我之荒魂不可近皇居當居御心廣田國即以山脊根子女  
葉山媛令祭トアリ(現ニ西ノ宮神社境内ニ南宮神社アリ即チ葉山媛ヲ祭ル)  
茲ニ本社ノ所在ヲ尋メルニ其初メ何レノ處ナリシヤ詳カナラス廣田西宮參詣獨

案内（元祿年間ニ書キタルモノ）ニ「六軒新田の上高隈原と申すは昔廣田大神鎮座の地なり」トアリ又武庫郡式社記ニ今川貞世の「道行ふり」（應安永和頃ノ書ナルヘシ）に川つらに沿ひて木深く物ふりたる山あり鳥居たてりろのあたり人に尋ね侍れば昔足姫のもろこしの三の國したるがへ給ひ歸り玉ひけるよりやかに武庫の山（今ノ甲山ナラン）と申とむとあるを見るに今の社地の馬場先なる鳥居のもとば當時西國街道なりしかば廣田川（御手洗川トモ云フ）を隔て、高隈の原を見渡しての事なるへく是により考ふるに今の上原新田の西南に續く岡ならん」トアリ然ルニ其後曾テ今ノ社地ナル馬場先正面ノ地ニ遷シ奉リシコトアリシカ此地素ト平坦北東ニ廻レル廣田川ノ水害ヲ虞リ中御門天皇ノ御宇享保九年五月五日今ノ地ニ遷祀シタルモノナリ

社殿ノ制往古得テ知ルヘカラスト雖モ仲資王記ニ土御門天皇元久元年十二月遷

宮ノ事ヲ記シタル條ニ廣田本宮五社遷宮御裝束今日奉送畢云々トアリ其後二十二年ヲ經テ後堀河天皇ノ嘉祿元年十月ニ社殿燒亡セシ由明月記及百練抄ニ見ユ又靈元天皇ノ天和四年ニ往古ノ建物ヲ列記シタル廣田社宮建覺ト題セル記錄ニ本社五社但一社三間ツ、拜殿三間十三間神樂殿、御藏、神主殿、御輿屋、稻荷、祇園、松尾、地殿、御假殿、子安、須門、神馬殿、御供所云々トアリ正親町天皇ノ天正七年ニ社殿以下悉ク兵燹ニ罹リシ事本社ニ保存スル繪旨ニ見ユ以後廿四年ヲ越ヘ後陽成天皇慶長九年豊臣秀頼改造ノ事并ニ寛文三年徳川家綱改造ノ事アリ其後享保九年馬場先正面ノ地ヨリ今ノ地ニ遷シタル當時徳川吉宗之ヲ改築シタルモノナラン本殿及脇殿四所共ニ等シク九尺四面檜皮葺ナリ拜殿ハ梁行二間桁行六間ニシテ瓦葺ナリ其他ノ建物ハ五所チ一畫セル齋垣ト御炊屋又ハ御供所ノミナリシ如ク見ユ明治四年五月十四日官幣大社ニ列セラレ同年同社境



内ニアリシ西宮神社ヲ分離シ西宮町ニ移シ縣社ニ列セラル後明治十年ニ至リ官費ヲ以テ改築修繕ヲ加フル所アリ而シテ明治十六年本社五所ノ中ニ東方ヨリ第二殿ニ座ス廣田神社ト第三殿ニ座ス八幡大神トノ位置ヲ替ヘテ中央ナル第二殿ニ遷シ奉レリ

往昔本社ノ祭式ハ年中七十三度行ハレシコト正親町天皇ノ元龜二年十一月ノ記錄ニ見ユ就中八月ニ施行セル大輪田神事ナルモノハ最モ重キ祭事ニシテ當日早朝西宮ノ濱ヨリ御船ニテ兵庫和田岬ニ渡御アリ翌二十三日陸路還御アルヲ例トセリ此祭事ハ醍醐天皇延春六年ニ始メテ行ハレシ事岡司社由來記ニ見ユ祭事ノ多クハ後水尾天皇寛永年間ヨリ廢絶セリ蓋シ豊臣氏ノ滅亡ト共ニ神領ヲ廢セラレタルニ依ルモノナラン而シテ其僅ニ明治維新ノ際ニ至ル迄傳ハリシモノハ旬御神事(毎月朔日)御弓始(正月二日)御田植神事(四月)等ナリシカ官幣大社ニ列

列セラレタル以來例祭ヲ毎年三月十六日ト改メ其他祈年新嘗ノ祭典ヲモ起スコトトナレリ

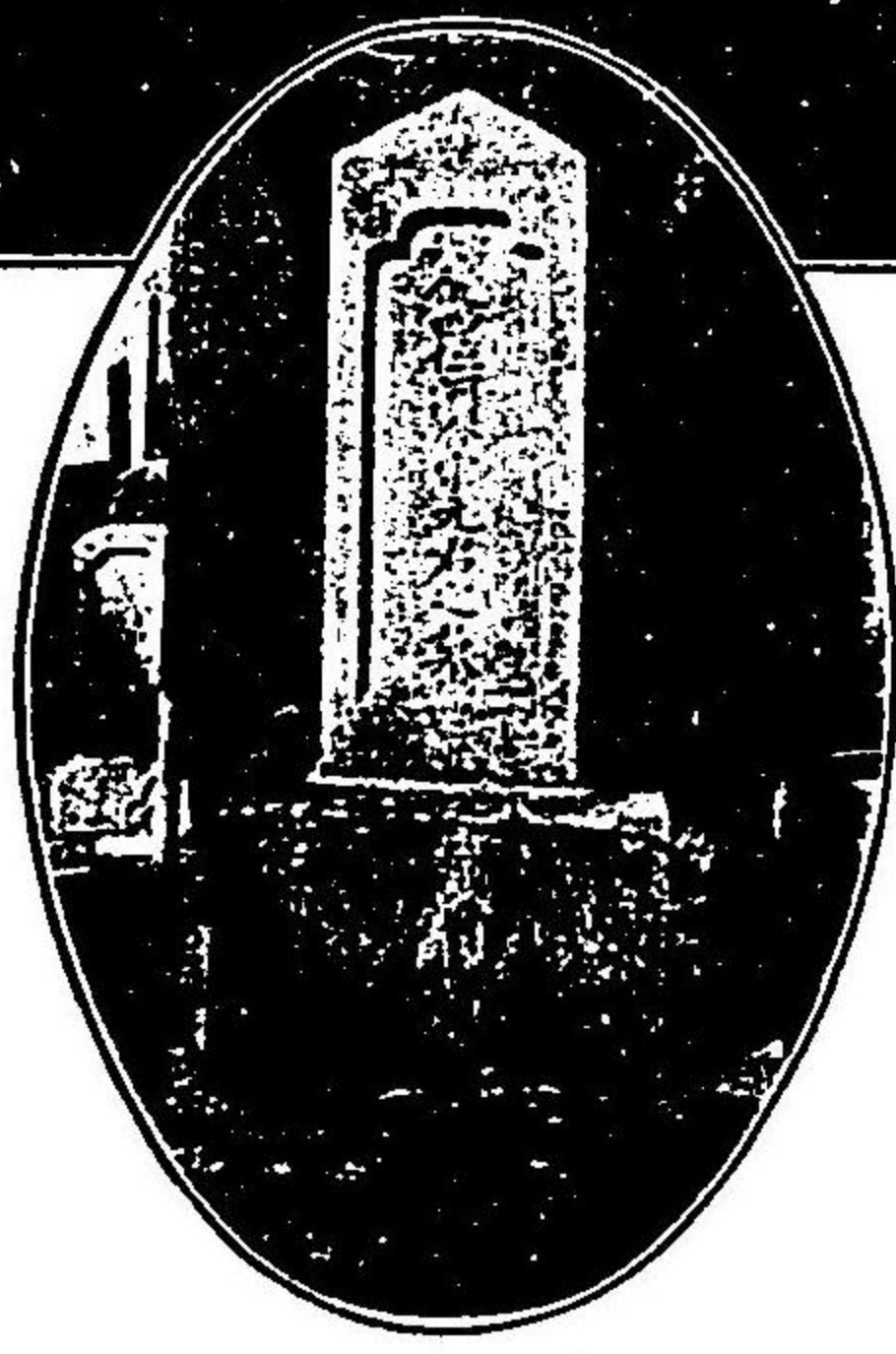
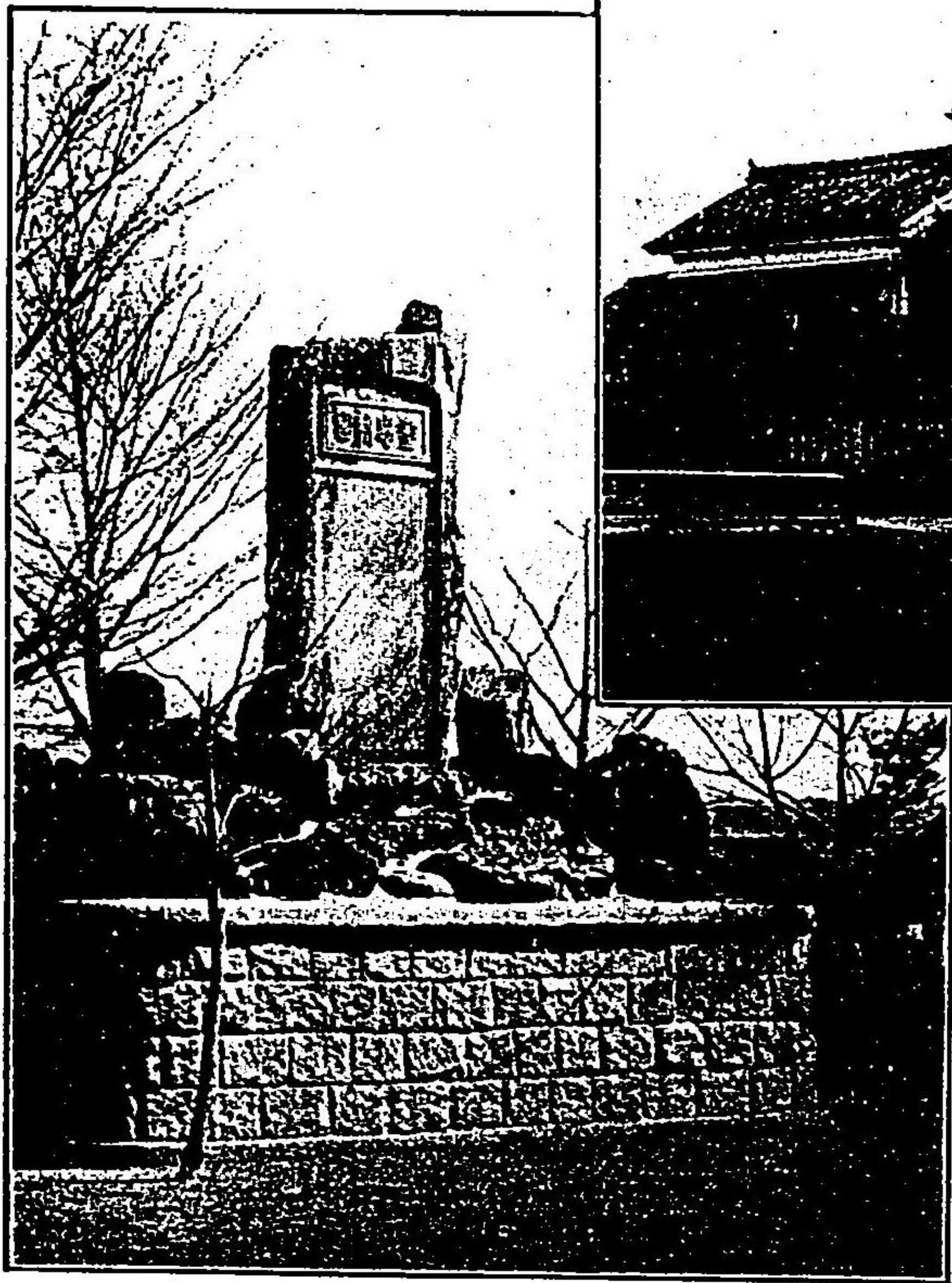
神領ノ事ハ往昔朝廷ヨリ神戸神田ヲ寄セ玉ヒシハ勿論ニシテ新抄格勅符抄ニ廣田神四十一戸トアリ攝津志ニ西宮町十九屬邑ニ越木岩已上呼云戸田莊トアリ西宮町ノ北端今在家町邊ヲ古ヘ戸田村ト稱シタルコト今猶古老ノ口碑ニ傳フ武家ヨリ神領ヲ寄セシハ壽永三年四月源賴朝平氏征伐祈禱ノ爲メ淡路國ナル廣田領壹所寄附ノ事吾妻鏡ニ載セアルヲ見ル又慶長九年豊臣秀頼廣田西宮兩社再興ノ時ノ西宮社領覺書ニ米貳千貳百五拾石トアルハ本社ト西宮ト兩社ヘノ事ナルヘク其御社領ノ多カリシコト以テ見ルヘシ

現今境内地總テ四千四百餘坪ヲ有シ又其境内社殿ノ西ニ方ル丘陵ニ往古ヨリ廣田ノ名木ト稱スル紫色ノ躑躅アリ花候觀客頗ル多シ明治三十四年ニ至リ御鎮座

以來一千七百年ニ相當セルヲ以テ同年四月十七日ヨリ十九日ニ至ル間大祭典ヲ  
執行シ之レカ紀念ノ爲メ氏子有志相謀リ寄附金ヲ醸出シ境内ニ接續シタル七反  
餘畝歩ノ土地ヲ買上ケ之ニ上地官林登町五反歩餘ノ地ヲ合シ總計貳町參反歩餘  
ノ神苑ヲ開キ又苑中眺望佳絶ノ地ニ建坪三十八坪ノ一館ヲ新築シ名ケテ望遠館  
ト云ヒ以テ參詣者遊覽ノ便ニ供セリ

贈從四位河合惣兵衛之墓竝紀念碑

紀念碑全景



紀念碑

河合惣兵衛墓

河合惣兵衛獄中書

毎朝瓦屋敷に於て  
 筆を執るに  
 筆を執るに先立  
 名丹上様  
 玉印を  
 五箇月を  
 四月に  
 五月に  
 六月に  
 七月に  
 八月に  
 九月に  
 十月に  
 十一月に  
 十二月に

河合惣兵衛の  
 行状記  
 一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、  
 十一、  
 十二、

姫路河合さま所藏

### 贈從四位河合惣兵衛之墓並紀念碑

贈從四位河合惣兵衛之墓ハ姫路市坂田町善導寺ニアリ惣兵衛諱ハ宗元姫路藩士  
ナリ徳川幕府ノ末世ニ當リ力ヲ王事ニ盡シ終ニ獄ニ下サレ自刃ス享年四十九左  
ニ其墓表ヲ掲ク

君諱宗元通稱惣兵衛考諱勇毅妣出淵氏歷  
使番宗門奉行惣頭至持筒頭君容貌魁梧性  
亦激烈終始以尊攘大義自任焉文久甲子十  
二月廿六日有故賜自裁君從容就死祀遂絕  
識者歎惜焉今茲戊辰大赦有令再血食而君  
不有男宗孝因得養承家君娶折井氏生四女  
長適人次即宗孝配餘尙在家明治紀元十二

月十六日義士宗孝盾石謹表

惣兵衛ノ紀念碑ハ姫路市東方京口橋ノ南飾磨郡市殿村ノ内神谷村字觀音寺ニア  
リ境内總テ百二十四坪餘トス惣兵衛ノ女河合さきノ所有ニ屬ス其敷地ハ縣道  
(飾磨ヨリ生野ヲ經テ豊岡ニ達ス)ニ面シ道ヲ隔テ、姫路市ノ外濠ニ接ス明治二  
十五年八月岡澤精武井守正近藤薰永田伴正等十六人同志相謀テ建立シタルモノ  
ニシテ豊碑屹然行人皆其遺烈ヲ追慕ス紀念碑ノ高サ臺石共壹丈五尺餘其篆額  
「盡忠報國」ノ四字ハ故有栖川宮熾仁親王殿下ノ題セララルル所其碑文左ノ如シ

故姫路藩士贈從四位河合君紀念碑

君諱宗元稱惣兵衛河合其氏播之姫路人考諱宗信妣出淵氏其先出於遠江松  
場山城主河合宗忠世仕酒井氏食祿二百五十石君初爲使番累進物頭宗門奉  
行歷任作事勘定兩奉行夙嘆王室之式微深憂國威之不振恒唱尊攘糾合同志  
將大有爲焉文久二年壬戌五月本藩擇勇幹士賞京師以衛大内君膺其選於是  
博與諸藩志士締交東奔西馳周旋締結列侯之間又屢說藩主欲使闔藩一心協  
力從事勸王也爲權吏所遮遏而不果三年癸亥春偕同志謁姉小路少將備陳攘

夷聖勅宜速決行謂言若不聽則當繼以死而已矣時朝廷有大和行幸之議幕府  
及會桑諸藩聞之以爲事變不可測乃諫止征釐遂罷長藩堺町門守衛而三條中  
納言等七卿亦奔長門於是大勢一變無復可奈何君乃與藩士萩原虎六等五人  
去往大阪會藩主將上京方是時藩主班幕府老中首座因勸奏攘夷之實行於朝  
廷君別奉命抵江戶見老中板倉周防守告以近畿狀情併抒所見既而西還途遇  
藩主東行扈從再入江戶承聞說主使幕府速奉勅旨掃蕩異類不聽君知事竟不  
可爲稱病歸國君養子宗貞嚮脫藩而走君因坐屏居尋下獄先是萩原虎六等在  
京師斬千種氏臣賀川肇處士家里新太郎等藩吏以爲出君指揮君曰事皆由我  
願罰吾一人勿罪餘人藩命虎六等五人以自盡捕宗貞處斬而君亦賜死至此其  
家遂絕矣實元治元年甲子十二月二十六日也聞者莫不嘆惜焉君生於文化十  
三年丙子二月得年僅四十有九葬於姫路善導寺塋域娶折井氏生四女養境野  
求馬二男以配二女宗貞是也君爲人剛毅重氣節厲廉耻狀魁梧儼然偉丈夫  
也好讀書通大義又精武術槍劍砲火之伎皆究其盡奧平生慨上下偷安誓以振  
興士氣誘掖後進爲已任其事主也獻替輔翼莫不盡心焉願酒井氏者幕府之世  
臣而世所謂譜第也君家世食其祿獨唱尊攘於其間事之至難固不待論則其言  
不聽謀不從亦何怪焉然終始不變其志抵死而無悔自非勇於義而自信篤者安  
能如此君歿之四年王政復古百廢俱興明治元年五月藩議以小林定脩子宗孝  
承其後十一月朝廷命復舊祿宗孝後又病歿宗家升吉二男欽次嗣其間折井氏  
與宗貞妻以贅婦能支持其家歲月之久嘗艱茹苦砥厲貞操弗少懈鄉黨稱之廿  
三年夏 皇后宮駐蹕兵庫縣聞之賜金五百圓此亦足以見君之遺風餘烈

使其婦及女有所親戚與起也明年十二月勅贈君從四位蓋特典也嗚呼君生而志業雖不成死而永浴天恩垂光後昆其亦可以瞑矣今年二月故舊相謀將立石於城東神谷村以永其傳囑余文余既嘉其學又懼君之軼掌王事昭昭如此而世久歲遷遂歸溼滅也備叙其顛末係之以銘銘曰

其生也屈 其死也伸 屈者一時 伸者無垠 聲揚藩國  
名達帝宸 家絕復繼 有廟薦新 彼蒼者天 報施孔明  
人其鑑之 孰敢不振 鷲山魏々 逸水泠々 仰想君風

大勳位一品陸軍大將有栖川城仁親王家額

勳一等正二位陸軍中將伯爵山田顯義撰

明治廿五年八月

田所千秋書

### 左ニ惣兵衛ノ小傳ヲ載ス

#### 河合惣兵衛小傳

河合宗元通稱惣兵衛ト云フ姫路藩士ナリ祿二百五十石ヲ領ス資性剛毅容貌魁偉幼ニシテ讀書ヲ好ミ博覽強記和漢ノ學ニ通シ又武藝ニ熟達ス其仁壽山校ニ在ルヤ才學識見洽ク儕輩ニ超絶シ人ノ畏敬スル所トナル選ハレテ藩校ノ肝煎役トナ

リ監督嚴正諸生大ニ畏服ス後勘定奉行宗門奉行ヲ經テ物頭トナリ夙ニ王室ノ式微ヲ慨キ勤王ノ士ニ乏シキヲ憂ヒ藩ノ國學教授秋元安民ト共ニ尊王ノ大義ヲ唱ヘ大ニ志士諸生ヲ薰陶ス文久二年ノ春尊王攘夷ノ說四方ニ鼎沸シ物情騷然タリ藩主酒井雅樂頭忠績幕府ノ命ニ依リ禁闕護衛ノ兵ヲ出タス惣兵衛養子傳十郎同志十餘人ト卒先シテ此選ニ應シ京師ニ入り秋元安民ト共ニ岡藩士小川彌右衛門京師ノ人村井修理少進等ニ結ヒ專ラ王室ノ中興ヲ圖ル時ニ關白九條尙忠所司代酒井若狹守忠義等幕府ノ意旨ヲ承ケテ勤王ノ士及浮浪ノ徒縉紳ノ家ニ出入スルコトヲ禁ス有志ノ士關白及若狹守ヲ憎マサルモノナシ然ルニ藩主江戸ヲ發セシ時幕府命スルニ京師ニ至リ所司代ト力ヲ協セテ護衛スヘキコトヲ以テ是ニ於テ惣兵衛藩主ヲ諫テ曰ク所司代ハ奸曲ニシテ王室ノ爲ニ忠アル者ニ非ス如何ソ彼ト力ヲ協スヘキ且天下ノ形勢ヲ考ヘ諸藩ノ向背ヲ窺フニ尊王攘夷ヲ以テ主ト

スルニ如クハナシト言テ盡シテ大義ヲ疏陳ス然レトモ藩主ハ累世徳川譜代ノ臣也徳川氏ト存亡ヲ共ニスヘシトシ敢テ從ハス執政松平孫三郎モ亦其説ヲ善トシ侍讀諸葛次郎助ト謀リテ惣兵衛カ勤王ノ志アルヲ非トシ永ク京師ニ在ラシメハ如何ナル事ヲ惹起サンモ測リ難シトナシ事ヲ構ヘテ之ヲ國ニ追ヒ歸セリ然レトモ惣兵衛少シモ屈セス藩ニ歸リ益尊攘ノ大義ヲ説キ志士ヲ勵マシテ止マス其後藩主國ニ就キ幾許ナラス後幕府ノ命アリ將ニ江戸ニ赴カントス時ニ流言スルモノアリ外夷將ニ大阪ニ來ラントスト是ニ於テ惣兵衛建言シテ曰ク先ツ京師ニ入り天機ヲ伺フテ後東シ且再ヒ兵ヲ出シテ京師ヲ護衛スヘシ近畿ノ急ヲ傍觀シテ王事ニ勤メス徒ニ東上セハ何ヲ以テカ天下諸藩ニ對シテ言ヲ發スルヲ得ンヤト頻ニ之ヲ争ヒ又同志ノ士ト共ニ隨行京師ニ抵ランコトヲ請フ聽サス時ニ尊攘ノ論愈盛ニ京師中國ニ行ハレ藩主モ心動ク所アリ惣兵衛ニ命シ同志ノ士近藤啓藏

萩原虎六、江坂元之助、伊舟城源一郎、松下鐵馬、市川豊一ノ六人ヲ携ヘ別ニ京師ニ赴キ動靜ヲ探ラシム惣兵衛、長州藩士久坂玄瑞熊本藩士宮部鼎藏等ト結ヒ共ニ諸藩ノ名士ニ通シ東西ニ奔走シテ王事ニ盡力ス惣兵衛ノ京師ニ在ルヤ一日トシテ三條實美卿ノ邸ニ伺候セサルハナシ偶詣ラサレハ實美卿書ヲ裁シテ之ヲ招キ國事ヲ謀議セシム惣兵衛ノ名ハ京師ニ於テ知ラサルモノナク各藩ノ志士亦來訪スルモノ日々夥シ惣兵衛此多端ノ裡ニ於テ尙同士ノ薰陶ニ勉メ每朝武術ヲ練習セシメ又相撲ニ依テ体ヲ養ヒ夜ニ至レハ毎ニ史書ノ輪講ヲナサシメ或ハ自ら講シ以テ同志ニ教示ス文久三年春正月幕府後見職一橋中納言入洛東本願寺ニ館ス是ヨリ先攘夷ノ内勅既ニ幕府ニ下レリト雖トモ因循遲疑未タ其期限ヲ奉答スルニ至ラス後見職ノ入京スルヤ諸藩ノ志士京師ニ集ルモノ其ノ期限ヲ問ハント欲シ肥後藩士轟武兵衛、川上彦齊、長州藩士久坂玄瑞、寺島忠三郎等其旅館ニ詣



リ問フ所アルモ其答辨曖昧ヲ得ス然ニ開鎖ノ議論ハ日ニ切迫シ上ハ宸襟ヲ  
惱マシ奉リ下ハ藩民其堵ニ安スル能ハス天下ノ形勢日一日ニ危殆ニ陥ルヲ見惣  
兵衛憤慨措ク能ハス姉小路卿ニ迫リ死ヲ以テ苦諫シ一橋中納言ニ嚴促セシメン  
ト欲シ同年二月十二日夜惣兵衛其携フル所ノ六人ヲ具シ正裝禮服姉小路卿ノ邸  
ニ伺候シ卿ニ面謁シ衷情ヲ吐露シ以テ死ヲ請フ卿固ク之ヲ止メテ曰ク疇昔一橋  
中納言ニ詣リ三條中納言等ト嚴促深夜ニ至ル一橋中納言モ 叡慮ノ動ス可ラサ  
ルヲ悟リ數旬ヲ期シテ攘夷ヲ實行スヘシト奉答スルニ至レリ今ヤ幕府將ニ輿論  
ヲ容レントス姑ク時機ノ至ルヲ待ツヘシ子等ノ誠忠至情洵ニ感賞スヘキモノア  
リ今夕ノ事必ス内奏シテ 天聽ニ達ス可シト惣兵衛等感泣シテ邸ヲ退ク翌日姉  
小路卿雜掌西本圖書ヲシテ鯉魚三尾酒一樽ヲ惣兵衛等ニ贈ラシメ前夜ノ事ヲ賞  
セシム惣兵衛又屢書ヲ朝廷ニ奉リ攘夷ノ 叡慮ヲ貫徹センニハ公武合体シ協心

戮力事ニ當ルニ非レハ其不可ナルコトヲ極論セリ既ニシテ姉小路卿兇徒ノ毒刃  
ニ斃レ其嫌疑者薩藩士田中雄平仁禮立之丞僕藤田太市拘ヘラレテ壬生ノ牢獄ニ  
在リ東市尹永井主水正之ヲ其廳ニ鞠訊スルニ當リ雄平糾彈場ニ自刃ス而シテ糺  
治其要ヲ得ス朝廷其怠慢ヲ責メ之ニ閉塞ヲ命シ特ニ惣兵衛ヲシテ之ヲ糺治セシ  
ム時ニ同年五月ナリ惣兵衛朝命ヲ帶ヒ水戸藩士梶清次右衛門ト共ニ糺問ニ從事  
ス抑モ治獄ノ職ハ京尹ノ司掌スル所然ルニ之ヲ時ノ志士ニ特命スルカ如キ未曾  
有ノコトタルノミナラス其勅命ヲ受ケタル者ノ名譽ハ言ヲ要セサルモ京尹ノ失  
態恥辱慚死ノ外アラサル可シ故ニ西市尹瀧川播磨守ハ大ニ憂悶シ惣兵衛ニ依テ  
之カ解疏ヲ請ハント欲シ惣兵衛ノ讀書家ナルヲ知り其部下ノ與力ヲシテ大部ノ  
書籍一帙ト縮緬二匹トヲ齎シ以テ面會ヲ求メシム惣兵衛之ヲ拒絕シ敢テ引見セ  
ス惣兵衛ノ諸藩士ノ間ニ雄視セラレ其勢力ヲ有スル偶然ニ非ラサルナリ同年八

月十八日長州藩大和行幸等ノ事ニ坐シ堺町門ノ警衛ヲ免セラレ事ニ預リシ七卿  
勅勅ノ身トナリ關白鷹司家ニ詣リ其理由ヲ質問シ退テ大佛妙法院ニ至リ朝命ヲ  
侍ツ惣兵衛等三條卿ニ扈從シテ大佛ニ在リ七卿等凝議夜ヲ徹ス惣兵衛三條卿ニ  
獻言シテ曰ク此危急存亡ノ秋ニ當リ禁闕ヲ後ニシ七卿ノ袂ヲ聯ネテ去ルアラハ  
誰アリテ君側ヲ清メン宜シク京師ニ留リ雪冤ノ計ヲ回ラスヘシト然ルニ翌朝ニ  
至リ議遂ニ七卿長門下向ノ事ニ決スルヤ惣兵衛三條卿ニ謂テ曰ク生等京師ニ止  
リ諸藩ノ有志ト謀リ死力ヲ盡シテ此冤枉ヲ雪クノ計ヲナスヘシト卿ニ告別シテ  
京師ニ止マリ有志ト奔走シ大ニ盡ス所アリ然ルニ七卿去テ後京師ノ情況一變シ  
同年九月惣兵衛等傳奏野々宮宰相中將ヨリ京師退去ヲ命セラレ伏見ヲ經大阪ニ  
至リ國ニ歸ル時ニ藩主幕府ノ老中タリ將軍ノ命ヲ奉シ海路大阪ニ至リ將ニ京師  
ニ入ラントス惣兵衛同志ト共ニ大阪ニ至リ藩主ニ謁見シテ具サニ京師ノ情況ヲ

陳ヘ同志ト共ニ建議シテ速ニ攘夷ノ議ヲ決シ朝廷ニ奏聞センコトヲ勸ム藩主之  
ヲ容レ惣兵衛及伊舟城源一郎ヲシテ共ニ江戸ニ赴キ老中板倉周防守ニ京師ノ動  
靜ヲ報セシム惣兵衛江戸ニ抵ル暫クニシテ又京師ニ歸ラント欲シ箱根ニ至ル途  
ニ藩主江戸ニ赴クニ逢フ再ヒ從フテ江戸ニ入り藩主ニ勸メ幕府ニ上言シ 聖慮  
ヲ奉シ攘夷ヲ決行セシメント欲シ反覆爭論スレトモ藩主從ハス惣兵衛遂ニ用ヒ  
ラレス謂ラク止マルモ亦何ノ益カ之レアラント病ト稱シテ國ニ還ル藩主其言ヲ  
歸國ニ托シ又京師ニ赴カントスルヲ察シ固ク入京スルヲ禁メ惣兵衛鬱々トシテ  
樂マス國ニ歸リテ出テス元治元年甲子藩主將軍ニ從フテ上京ス惣兵衛國ニ在リ  
同志ト共ニ憤慨シテ曰ク藩主ハ去秋參内シ攘夷ノ議已ニ決スルコトヲ奏聞シ猶  
因循今日ニ至ル何ノ面目アリテ 天顏ヲ拜スルコトヲ得ント蓋シ曩ニ藩主ノ參  
内ハ其實奏聞ニ及ハサルモ當時四圍ノ事情其外觀ヲ裝フノ已ムヲ得サルモノア

リ是ヲ以テ藩主故ラニ一時ヲ彌縫セシニ過キス時ニ養子傳十郎脱走シテ踪跡ヲ逸ス惣兵衛是ニ連座シテ家ニ禁錮セラルル次テ獄ニ下サレ元治元年十二月二十六日自刃ヲ命セラル是ヨリ先文久三年八月十八日朝因州藩ノ志士河田佐久馬及其同志者同藩ノ重臣高橋省已ト意見ヲ異ニシテ之ヲ九門内ニ斬殺シ知恩院ニ引上ケ自刃セントス惣兵衛此報ヲ聞キ是等誠忠ノ士夫フ可ラストシ倉皇馳セテ同院ニ至リ説得諭示遂ニ其死ヲ止ム惣兵衛ノ禁錮セラルルヤ河田佐久馬等屢書ヲ惣兵衛ニ致シ早晚危難ノ免ル可ラサルコトヲ陳シ宜シク身ヲ脱シ鳥取藩ニ來ルヘキコトヲ懇説ス親戚故舊亦尙カニ之ヲ懇懇ス惣兵衛曰ク我ニ老母ノ在ルアリ若シ身ヲ脱セハ如何ナル危難ノ老母ノ身ニ來ルヤ知ルヘカラス猶且同志數名ノ獄ニ在ル者必ス糾梏ノ慘苦ヲ受ケ直ニ斬殺セラルヘシ彼等ヲ死地ニ視テ豈一身ノ生ヲ計ランヤト頑トシテ敢テ從ハス惣兵衛死ニ臨ミ渴ヲ覺ユト稱シ茶ヲ請ヒ徐

ニ之ヲ飲ミ終リ神色自若筆紙ヲ乞フテ一首ノ辭世ヲ書シテ刀ヲ取り喉ヲ切テ死ス時ニ年四十九惣兵衛ト共ニ尊攘ヲ唱フル者數十人皆此日ヲ以テ處分セラル

○獄に下る時

去ひて吹くあらしの誘ふもみち葉も

猶くれなるの色はかゝらし

○辭世

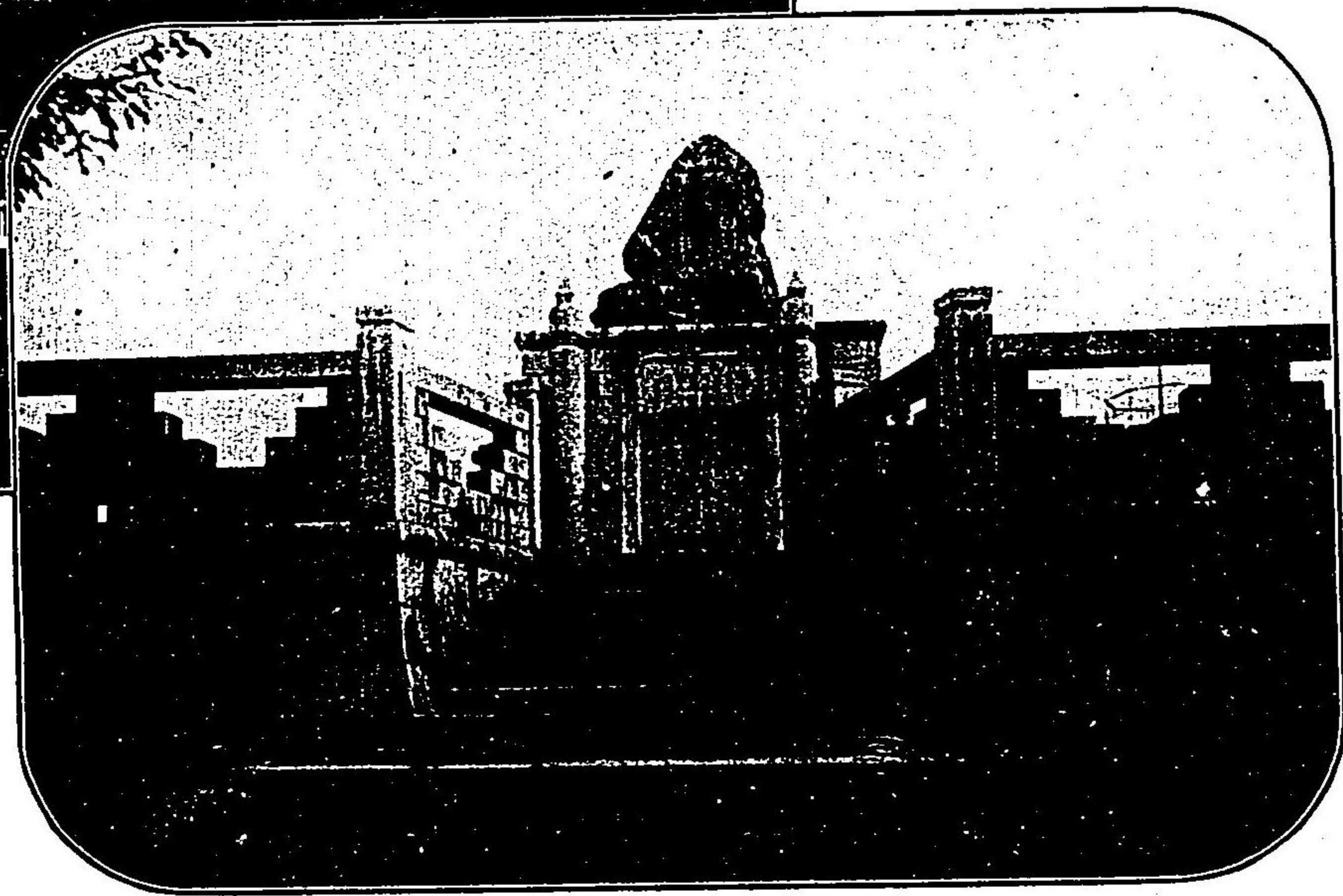
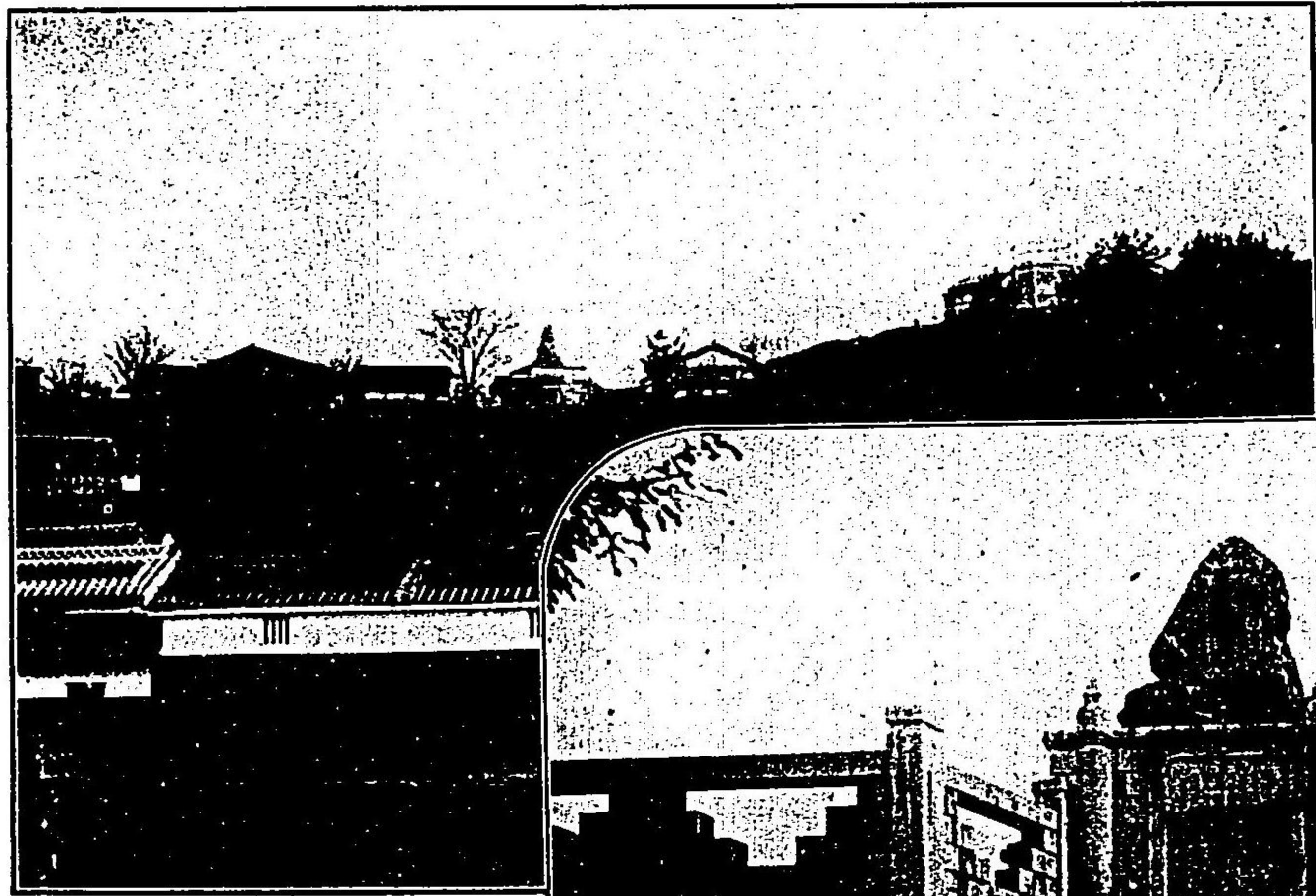
ひをむしの身をいかてかは惜むへき

たゝをしまるゝ御世の行末

明治二十三年四月 皇后陛下御駐輦ノ節其勤王ノ志ヲ懷テ國難ニ殉セシヲ憫然ニ思召サレ金五百圓ヲ其遺族ニ下賜セラル次テ二十四年十一月五日東京靖國神社ニ合祀セラレ同年十二月十七日特旨ヲ以テ從四位ヲ贈ラル

藥師山招魂紀念碑

藥師山全景



招魂紀念碑

### 藥師山招魂紀念碑

藥師山招魂紀念碑ハ姫路市ノ西端飾磨郡高岡村ノ内山畑新田藥師山上ニアリ藥師山ハ往古琴丘ト稱ス明治初年ノ頃ニ至ルマテ其東方ノ山腹ニ藥師堂アリシヲ以テ此名アリ明治九年飾磨縣廳舎（現今姫路病院ニ充ツ）建築ノ際其山腹ヲ取崩シタルカ爲メ今全ク其蹟ヲ絶ツ丘上頗ル景勝ニ富ミ海上遠ク四國ヲ望ミ海陸船車ノ來往一目睹願ノ間ニアリ該紀念碑ハ明治十年西南ノ役第十師管下姫路營所ニ屬スル士卒七百六十七名ノ戰死者ヲ追吊センカ爲メニ建設シタルモノニシテ其篆額ハ「勁節嚴風」ト題シ故陸軍大將有栖川宮熾仁親王殿下ノ筆ニ係リ當時大阪鎮臺司令官タリシ陸軍少將三好重臣之レカ碑文ヲ撰書セリ其文左ノ如シ

明治十年春鹿兒嶋賊徒作亂圍熊本城

官軍進討賊據險健闘官軍轉戰敗之賊

徒窘窮退保城山遂圍而殲之凡八閱月  
而西南蕩平蓋將校士卒捨身殉國得速  
奏成功我第十師管兵戰死者七百六十  
餘人今茲有志者胥謀立碑表偉勳以慰  
忠魂余故叙概略傳之不朽

明治十二年六月

陸軍少將正五位勳二等三好重臣撰並書

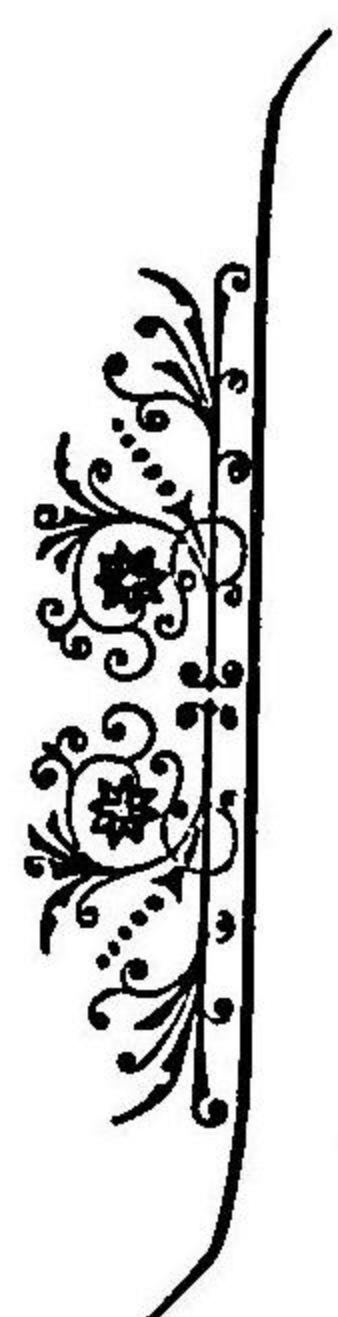
抑該紀念碑ハ明治十一年十一月山陽博交社（同年五月姫路營所軍人ノ組織セル  
社交団体ニシテ後姫路偕行社ト改ム）之レカ建設ヲ發起シ當時姫路營所第十聯  
隊長タリシ陸軍大佐茨木惟昭主トシテ其董督ノ任ニ當リ谷村猪介以下將校五名  
各事務ヲ分擔シ姫路其他ヨリ義捐金ヲ募集シ十二年九月二十二日工ヲ竣ヘ工費

總テ一千六百有餘圓ヲ要セリ其碑石ハ縣下揖保郡下伊勢村官林字峯相谷ノ産ニ  
シテ同村ヨリノ寄附ニ係ル又其ノ輸送ニ付テハ姫路船場眞宗大谷派本德寺專ラ  
之ヲ斡旋シ該派ノ信徒ヲシテ運搬ノ勞ヲ捐テシメタリ其後十八年七月 今上陸  
下山口廣島岡山ノ三縣ヘ御巡幸アラセラレ御歸途八月八日鳳輦ヲ該本德寺ノ行  
在所ニ駐メサセ給フヤ親シク該紀念碑建設ノ舉ヲ聽カセ給ヒ特ニ金圓ヲ下賜セ  
ラレタリ

紀念碑ノ高サルソ二丈三尺餘其敷地凡五十坪ニシテ附屬地ヲ合セテ一千五百有  
餘坪ニ上ル其初民有地タリシカ悉ク寄附金ヲ以テ之ヲ買上ケ後明治十二年八月  
ニ至リ姫路射楯兵主神社神官黒田千穎外二名ノ所有名義ニ改メ十七年一月更ニ  
本德寺ノ名義ニ改メ二十年五月ニ至リ終ニ官有地第三種ニ編入シ本德寺專ラ之  
レカ管理ノ任ニ當リ以テ今日ニ至ル而シテ創設以來毎年該敷地ニ於テ招魂祭ヲ

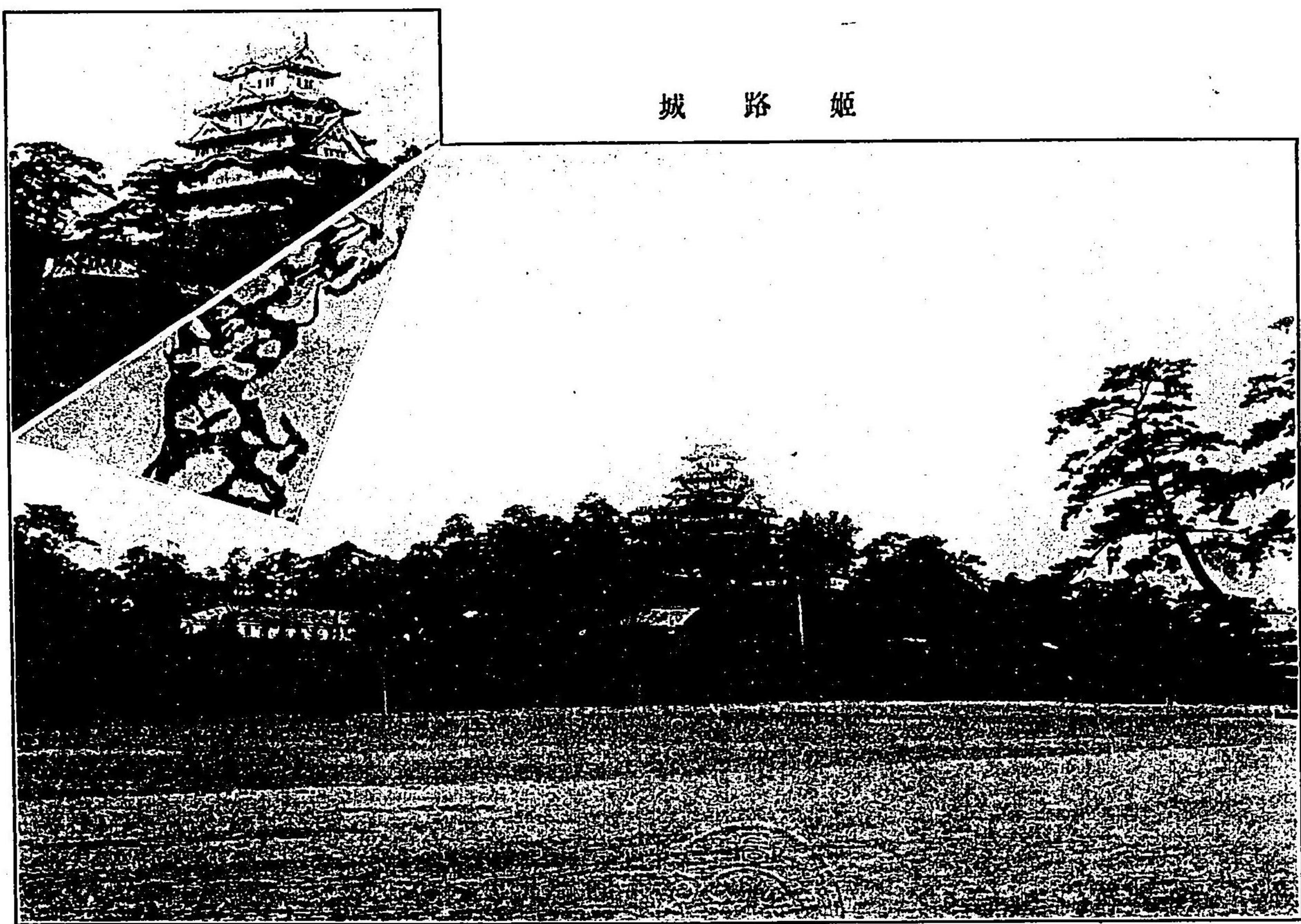
姫  
路  
城

舉ケ來リシカ近時第十師團城南練兵場ニ於テ執行スルユトトナリ連綿今尙其祭  
祀ヲ繼續ス





城 路 姫



## 姫路城

元弘二年後醍醐天皇北條氏ノ爲ニ隱岐ニ遷サレ給フ時播磨國司赤松次郎左衛門  
則村入道圓心護良親王ノ令旨ヲ奉シテ義兵ヲ西播白旗城ニ招集シ西國ノ道ヲ塞  
キ自ラ摩耶山ニ出張シ子息ヲシテ姫路丘稱名寺ノ堂宇ヲ利用シ小寺賴季ヲシテ  
之ヲ守ラシム後十數年ヲ經テ後村上天皇正平元年即チ光明天皇貞和二年圓心ノ  
二男筑前守貞範ニ至リ該稱名寺ノ佛宇ヲ他ニ移シ（池田輝政ノ時更ラニ今ノ五  
軒邸ニ移轉ス正明寺即チ是ナリ）茲ニ支砦ヲ築キ中國ヲ扼ス之レ姫路城ノ創築  
ニシテ姫路城主ノ權輿ナリ而シテ當時其本城ハ白旗山ニアリテ姫路ハ僅カニ四  
町四方ノ藩鎮タリ實ニ今ヲ去ルユト五百五十七年前トス今其略歴ヲ叙スレハ左  
ノ如シ

赤松貞範創メ姫路丘ニ城キシカ後又飾東郡庄山ニ城ヲ營ミテ之ニ移リ族小寺賴

季ナシテ當城ヲ守護セシム小寺職治ノ世ニ至リ嘉吉元年六月赤松左京太夫滿祐將軍義教ヲ弑シテ當國ニ奔ル京軍追跡シ大ニ木ノ山ニ戰ヒ滿祐自殺シ一族家臣多ク戰死シ職治亦討死ス故ヲ以テ山名宗全播州ヲ押領シテ當城ヲ守ル應仁元年五月圓心六代ノ孫赤松兵部少輔政則細川勝元ニ一味シ備前播磨五ヶ所ノ城ヲ攻落シテ播磨ノ牧ニ復任シ姫路城主トナリ城壘ヲ營補ス居ルコト三年新タニ城壘ヲ置塩山ニ築キ移リテ之ニ居リ當城ハ舊例ニ依リ小寺豐職ヲシテ守ラシム其後政隆ノ世ニ至リ御著ニ城ヲ築キテ移リ居リ後又庄山ニ移ル是ヨリ先キ備前邑久那福岡ノ城主黒田左近太夫高政ノ子重隆多可郡黒田ヨリ路城ニ移住シケルカ其子美濃守職隆ト相襲テ當城ヲ管ス時ニ織田信長秀吉ニ命シテ播州ヲ伐タシメ西播悉ク麾下ニ屬シ置塩城主赤松則房ハ阿波徳島ニ赴キ小寺氏ハ備後鞆城ニ移ル依テ秀吉黒田孝高ヲシテ當城ヲ守ラシム天正八年秀吉三木城ヲ攻落シ三木釜城

ニ居ル時ニ孝高秀吉ニ告ケテ曰ク三木ハ播州偏僻ノ地名將ノ居ル所ニアラス吾居ル所ノ姫路ハ國ノ中央海陸ノ便アリ此國ヲ領センモノハ必ス此地ニ居ルヘキナリト自ラ退テ妻鹿功山城ニ移ル於是秀吉三重ノ天守ヲ築キ姫路ニ移ルコト三年太閤丸即チ今ノ西ノ丸是レナリ天正十年西國ニ赴ク時弟秀長ヲシテ留守セシム後木下家定其子勝忠及家定ノ弟延俊等此城ヲ守リテ慶長五年ニ至ル同年池田三左衛門尉輝政當城ヲ守リ播磨備前淡路ヲ合シテ百万石ヲ領ス慶長十三年大ニ城ヲ營ミ五重ノ天守ヲ建テ（今ヲ去ルコト二百九十六年）内郭ヲ擴メ外郭ヲ構ヘ城外ニ市鄣ヲ立テ町ヲ別チテ八十八町（米字ニ取ルト云フ）トナシ八町毎ニ一ノ門口ヲ造ル内郭總テ十一門アリ即チ野里門、久長門、京口門、鳥居先門、總社門、中ノ門、鷹門、埋門、車門、市ノ橋門、清水門是レナリ此時ニ至リテ始テ姫路山上ト山下ノ宿村中村國府寺村トヲ併セテ悉ク姫路ト稱シ大ニ舊格ヲ

改ム在城十四年子利隆襲キ其子新太郎光政ニ至リ元和二年備前岡山ニ移ル元和三年本多美濃守忠政桑名ヨリ入部此時所々ヲ修補シ猶郭外ニ水湟ヲ掘リ石壁ヲ固クシ且ツ節磨津ニ到ル行程一里餘ノ間ニ河川ヲ鑿チ船路ヲ通ス名ケテ船場川ト云フ時ニ長子忠刻徳川將軍家（臺徳院）ノ女婿トナリ別ニ城内西方ニ樓臺ヲ構フ是ヲ天樹院丸ト云フ此時ニ至リ姫府ノ潤色大ニ進ム忠政卒シ一男政朝襲キ在城八二年シテ卒ス十數代ヲ經テ寛延二年正月十五日酒井忠知（後改忠恭）厩橋ヨリ移封ノ命ニ接シ同七月二十四日入部ス

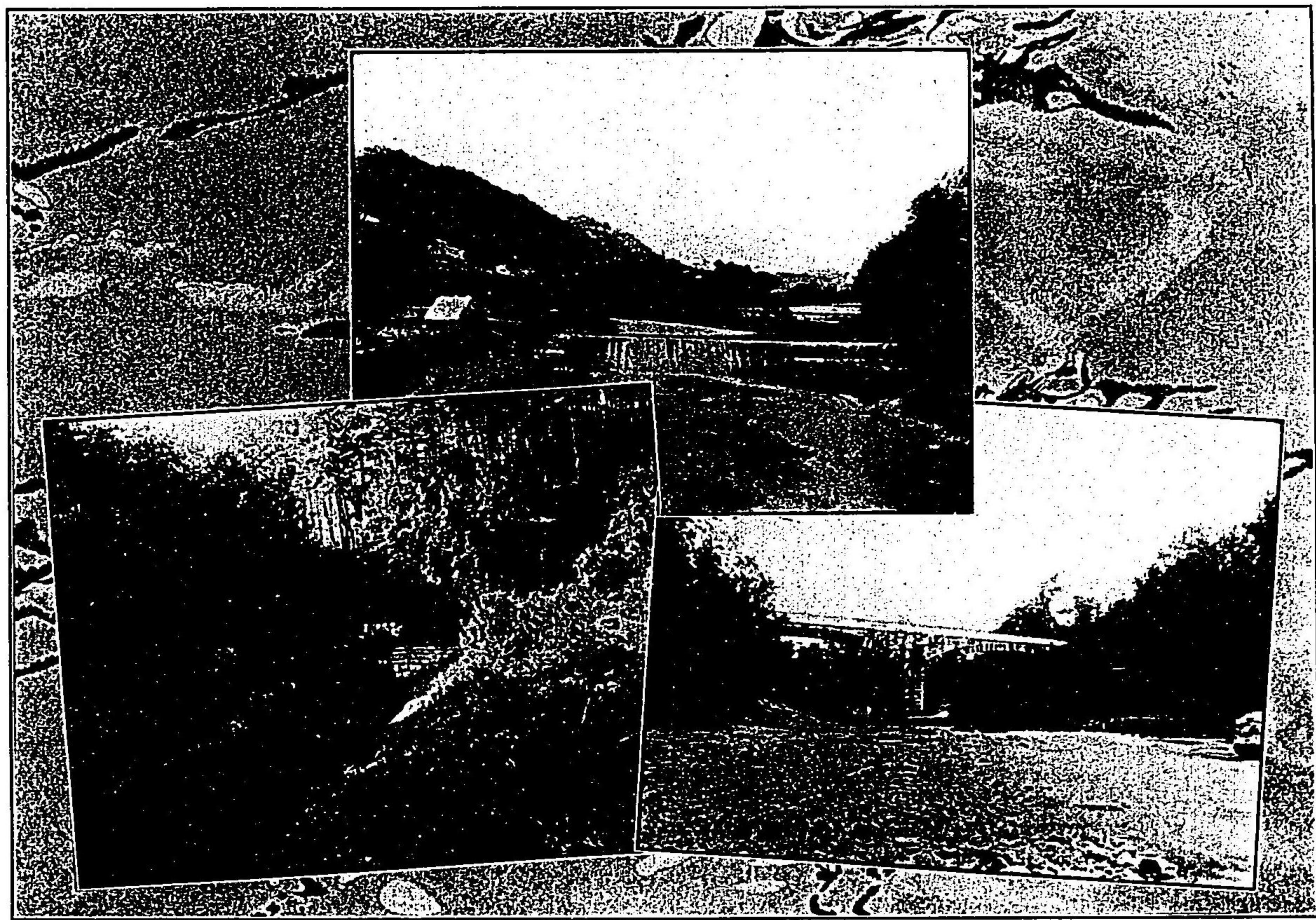
忠以、忠道、忠實、忠學、忠寶、忠顯、忠績ヲ經テ忠惇ニ至リテ維新ノ革變アリ一時將軍慶喜ニ從ヒケルカ終ニ恭順ノ意ヲ表シ自ラ江戸ニ屏キ忠邦ヲシテ後ヲ襲カシム明治二年忠邦封土ヲ奉還シ全四年廢藩置縣トナル酒井氏此地ヲ領スルコト百二十二年赤松貞範築城ヨリ廢藩ニ至ルマテ五百二十六年ナリ維新以後陸軍省

ノ所轄トナリ第十師團ニ屬シ今尙舊城ノ五重天主閣等ヲ存ス

附  
錄

淡  
河  
川  
疏  
水  
沿  
革  
誌

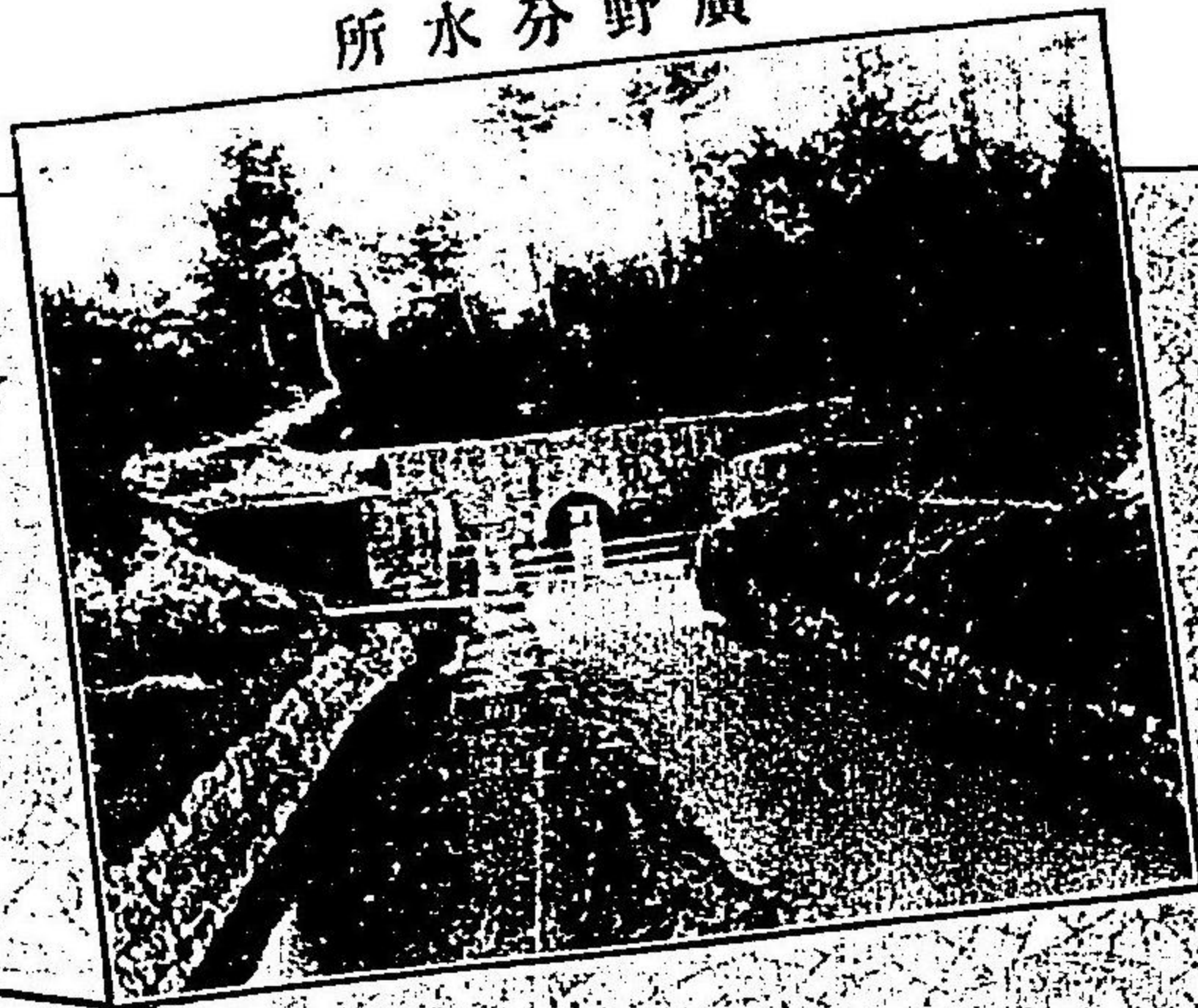
水 源 石 堰 堤



芥子山隧道

御坂噴水管孤橋

廣野分水所



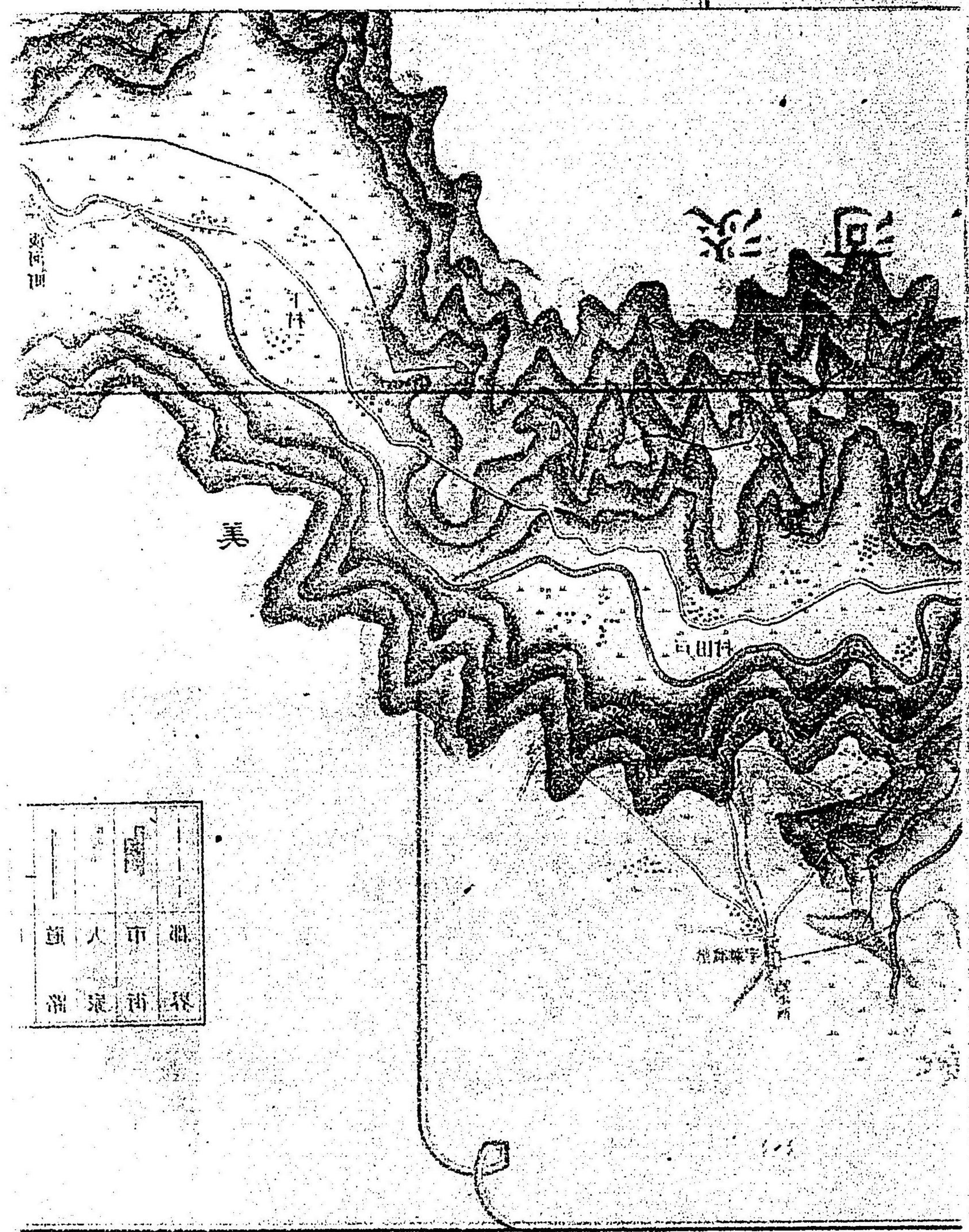
廣野隧道



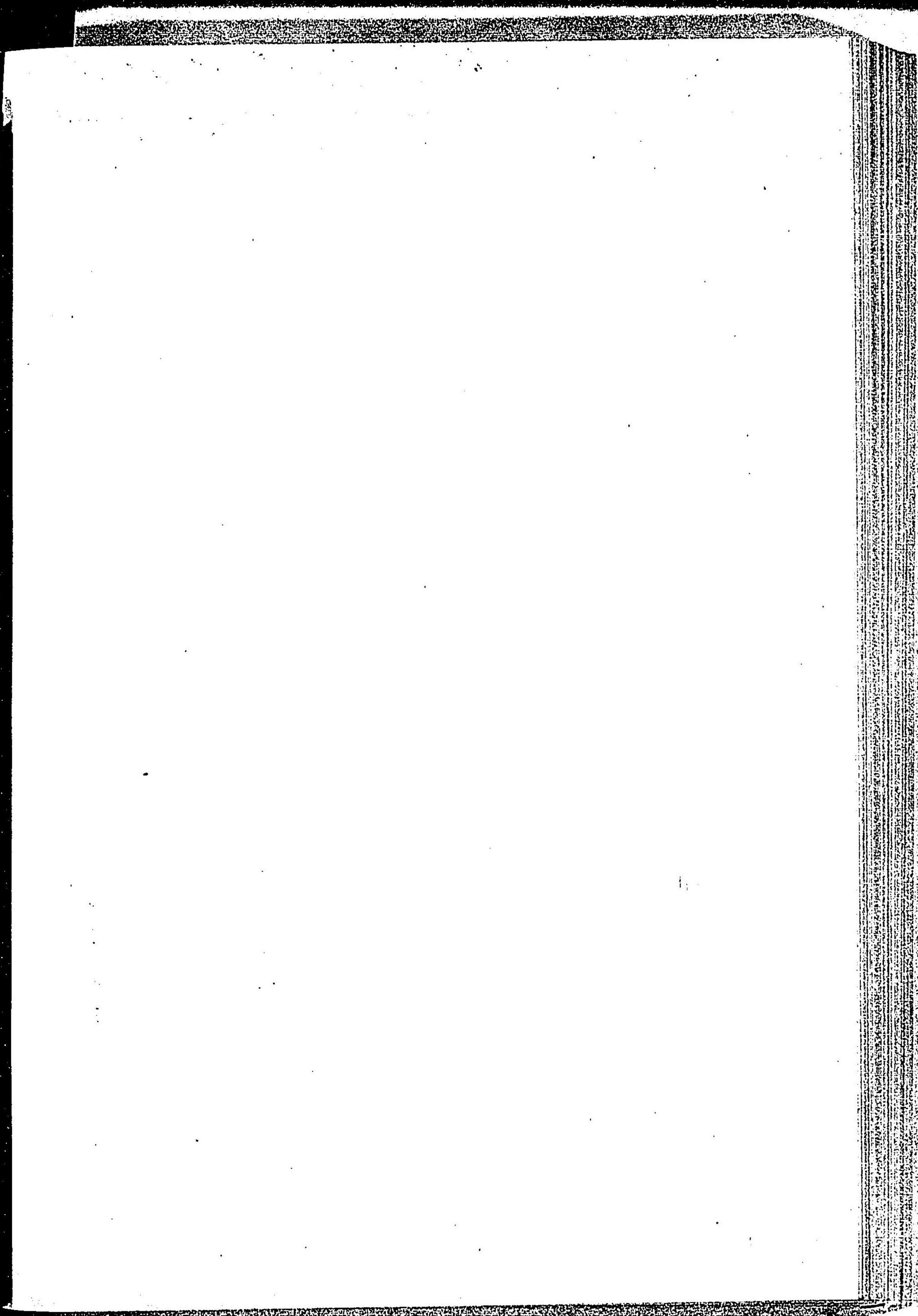
練部屋配水所



神出四番瀧

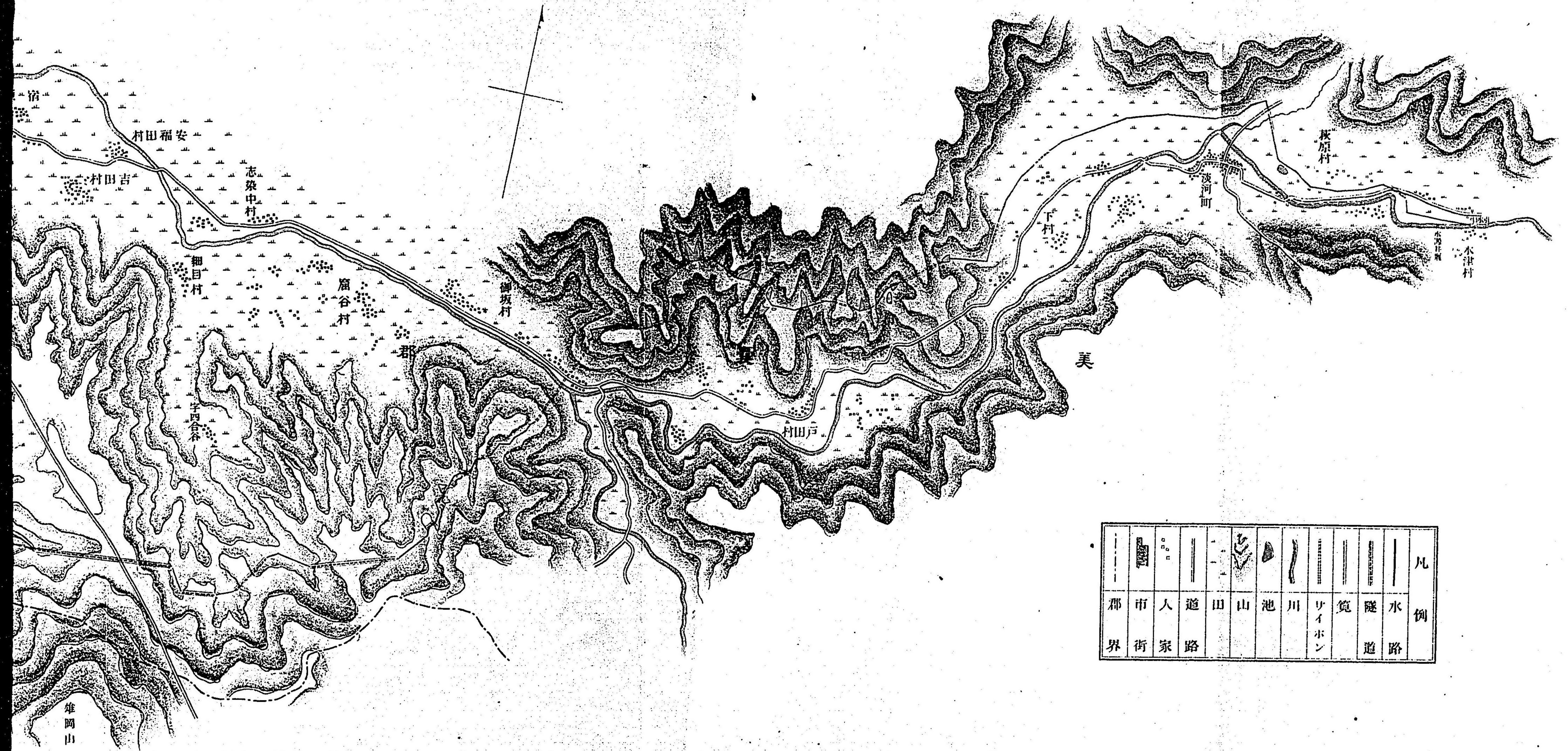


行印官設局甲下力



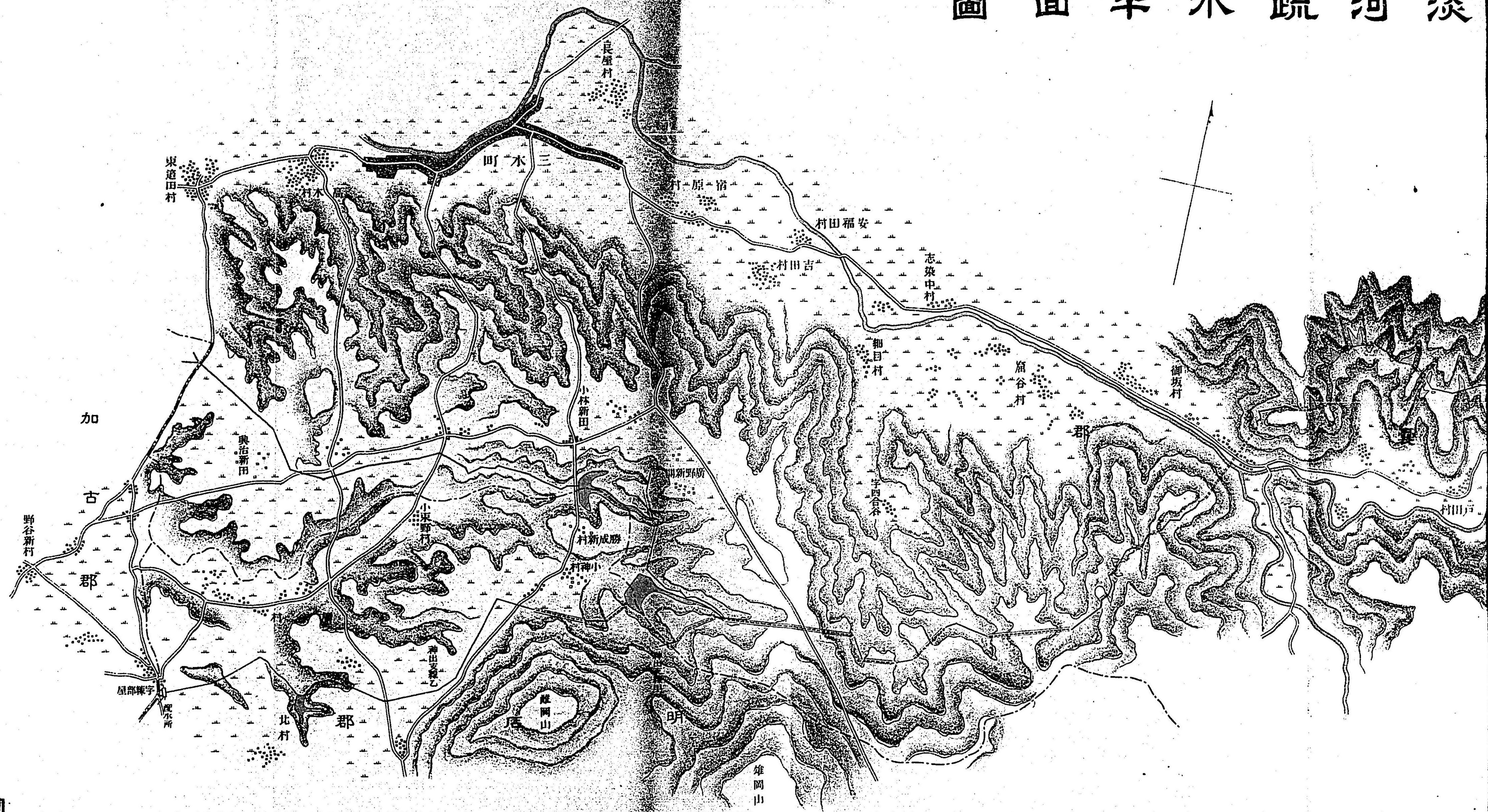


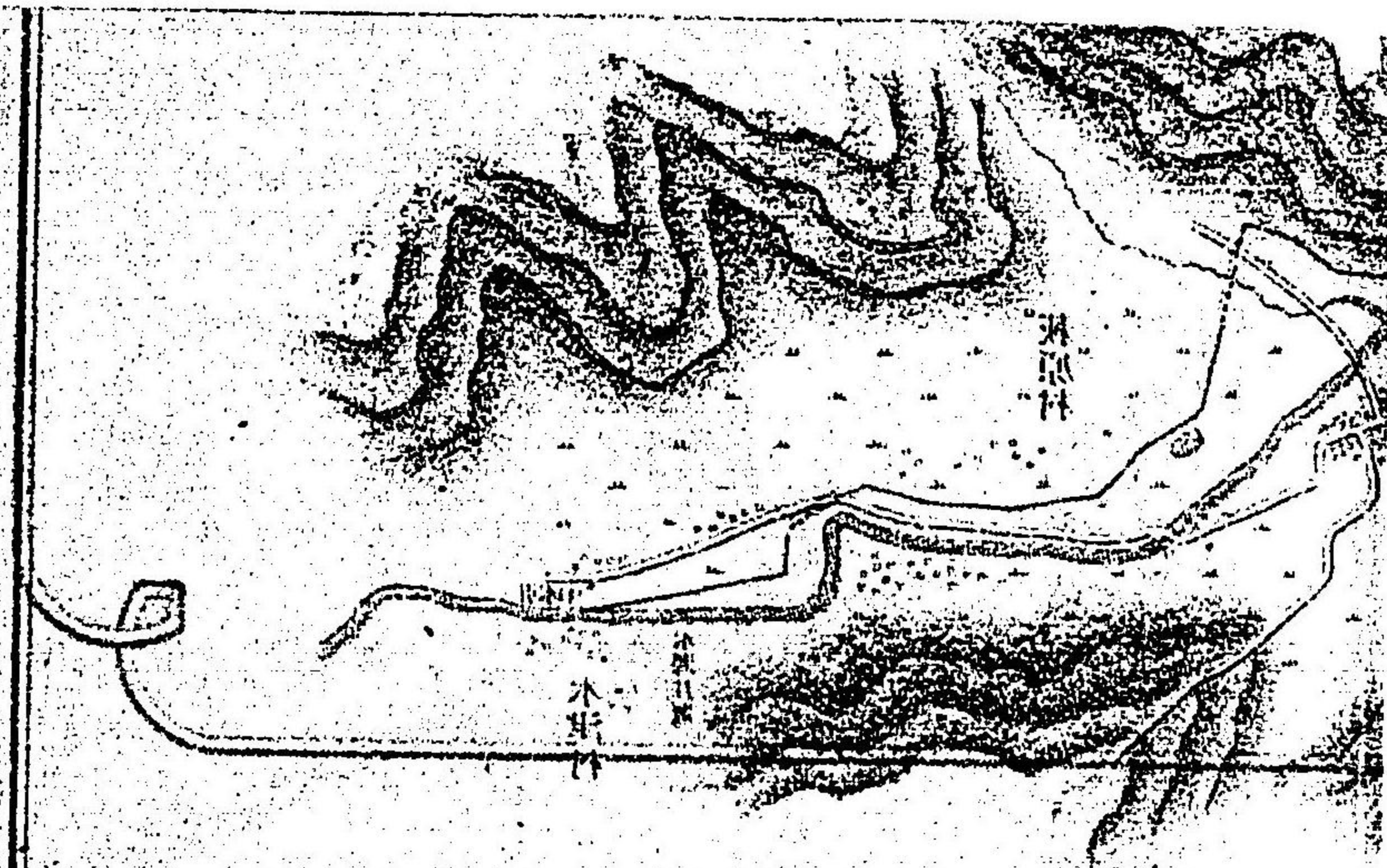
# 淡河疏水平水面圖



												凡例
郡界	市街	人家	道路	田	山	池	川	サイホン	竈	隧道	水路	

# 淡河疏水平水面圖





山	川	河	水	田	山
山	川	河	水	田	山
山	川	河	水	田	山
山	川	河	水	田	山

## 淡河川疏水沿革誌

明治三十六年秋十一月陸軍特別大演習御親閲ノ爲メ鳳登ヲ舞子大本營ニ駐メサセ給フヤ縣下官民舉テ其千載一遇ノ盛舉ナルヲ感泣シ本縣知事ノ手ヲ經テ郡市地誌統計書并ニ物産等ヲ傳獻スル者尠ナカラス就中加古郡長三輪信一郎ヨリ獻納シタル淡河川疏水沿革誌ノ如キハ同郡ニ於ケル町村ノ經營ニ係ル事蹟ヲ記述シタルモノニシテ其公益ノ顯著ナル以テ他ノ模範トナスヘク風化的行政上頗ル參考ニ資スルニ足ルモノアルヲ認メ茲ニ之ヲ附録ス

淡河川疏水ハ兵庫縣加古郡母里村外四ヶ村普通水利組合カ其區域内ノ田畝灌漑ニ資センカ爲メニ起シタル事業ニシテ工費ノ内金四萬五千圓ノ國庫補助ヲ仰キ明治二十一年一月工事ニ着手シ二十四年四月始メテ竣工シタルモ僅カニ一期間ノ通水ヲ行ヒシノミニテ二十五年七月水害ノタメ水路全部殆ント破壊シ復々通水スルコト能ハサルニ至レリ故ヲ以テ更ニ縣稅ノ補助ヲ得テ二十六年七月復舊工事ヲ起シ翌二十七年六月成功シタルモノナリ今其工事ノ起原及沿革ヲ畧叙ス

レハ左ノ如シ

加古郡ノ東部ハ明石郡ノ西北部美夔郡ノ西南部ト相接シ地勢東北ニ起リテ漸ク西南ニ傾斜シ一大高原ヲ爲セリ隨テ林野火田其多キヲ占メ水田甚ダ乏シ想フニ往昔印南野ト稱スル原野ナリシヲ漸次開墾シ以テ今日ノ形狀ヲ爲シタルモノナルヘシ是ヲ以テ當初ハ村落散在シテ人口稀少ナリシモ年ヲ逐フテ益増殖シタルニヨリ遂ニ水田開墾ノ必要ヲ生シタリ然レトモ水利乏シキニヨリ今ヲ去ルコト百二十有餘年前明石郡東村某ナルモノ焦心苦慮攝津國八郡山田川ノ源流ヲ引カハ以テ灌溉ニ供シ得ヘキコトヲ發見シ明和八年十月ヲ以テ測量ヲ遂ケ地方ニ説ク所アリシモ時勢未ダ許サ、ル所アリテ其計畫ヲ實施スルニ至ラスシテ止ム爾後文政九年ニ至リ加古郡國岡新村嘉左衛門野寺村勘左衛門及同村藤左衛門等某ノ遺志ヲ繼キ此舉ヲ遂ケント欲シ數回ノ測量ヲナシ工費ヲ積算シテ時ノ藩

主ニ出願シタリシモ當時各藩政ヲ異ニシタルヲ以テ藩議熟セス此企モ亦水泡ニ歸シタリ降テ明治初年明石郡東村藤本増右衛門ナルモノ又前輩ノ志ヲ繼キ自ラ測量計畫スル所アリ廢藩置縣ニ際シ第六大區第六小區副戸長魚住完治又山田川疏水ノ議ヲ唱ヘ藤本増右衛門ヲ聘シテ其狀況ヲ聽キ有志ノ賛成ヲ得テ明治五年測量ニ着手シ凡ソ十個月ニシテコレヲ終リタルモ未ダ以テ起工スルノ場合ニ至ラサリキ後明治九年ニ至リ政府地租改正ノ舉アリコレカ爲メ加古郡ノ東部ハ非常ノ重租ヲ課セラル、ニ至リタリ爰ニ姫路藩主酒井氏治世ノ頃此地方ハ特ニ薄稅ヲ課シ猶風旱ノ災厄アリタルトキハ手當ト稱シテ若干ノ米錢ヲ與ヘ之ヲ救助シタリシモ廢藩ト共ニ是等ノ救助法廢セラレ農民望ヲ失ヘル時ニ際シ當時ハ殆ント連年旱害ヲ被リ多キモ平常收穫ノ五六分甚シキハ收穫皆無ナリシコト往々アリテ人民ノ資力將ニ盡キントセリ此時ニ當リテ彼ノ地租改正ヨリ生スル非常

増租ニ遭ヘルヲ以テ地方人民ハ到底之ニ耐ユルコト能ハサルニ至レリ今試ニ増租ノ最モ甚シカリシ母里村ニ就キ新舊租額ヲ對照セハ左ノ如シ

母里村各大字新舊地租比較表

大字名	舊地租額	明治九年改正新租額	差引増租額
印南新村	七〇、四三六	二二〇、六六五	一四三、四三三
駒草新村	三三、八三〇	一、一〇九、一六一	九三、四四一
野寺村	三三、四四三	一、〇〇八、五九四	九七、一、一五〇
野谷新村	三三、〇六五	三三、六〇八	五四、五四四
草谷村	六七九、七六六	九七、六三一	三七、九一五
下草谷村	二〇五、五六一	三三〇、〇一八	一、四、五〇八
計	一、五五五、〇〇九	六、五七、九三三	四、〇二一、九二一

元此地方ハ畑地多カリシヲ以テ主トシテ綿花ヲ栽培シ傍ラ綿絲ヲ績キ綿布ヲ製造シテ以テ生計ノ資トナセシモ維新以後外國綿ノ輸入益々加増シ低價ノ綿絲ヲ

販賣スルニ至リシヨリ高價ナル内地産ノ綿花ハ需用大ニ減シ從テ綿布ノ販路亦杜絶セシヲ以テ他ニ生産ノ道ヲ求ムルニアラサレハ生計ヲ立ツルノ途ナキニ至リタリ

早害ニ次クニ地租改正ヲ以テシテ地方人民困難ヲ極メタルニ今又主要ノ生産物タル綿作ハ外國綿ノ爲メニ壓倒セラレタルヲ以テ地方人民ノ窮狀見ルニ忍ヒサルモノアリ是ニ於テ人民ハ勢ヒ政府ニ請願シテ地租ノ輕減ヲ仰クカ將タ水利ヲ求メテ水田ヲ開キ米作ヲ盛ニスルカ二者其一ヲ選フニアラサルヨリハ他ニ之ヲ救フノ方策ナキニ至レリ然ルニ地租ハ政府法規ノアル在リテ濫リニ一地方ニ限り輕減ヲ行フヘキニアラサレハ水利ヲ求ムルノ策ニ出ルノ止ムヲ得サルニ至リシナリ是ヲ以テ山田川疏水ノ議復々興リ明治十一年九月始メテ疏水起工ノ事ヲ請願シタリ而シテ時ノ兵庫縣令森岡昌純ハ此請願ヲ容レ十二年三月屬僚ヲ派

シテ豫定水路ヲ踏査セシメ水流ノ疏通スルニ適セルコトヲ人民ニ明示シタリ然  
レトモ人民ノ衰弊其極ニ達セル際ナレハ到底民力ヲ以テ成功スルノ目途ナキニ  
ヨリ官ヨリ工費ヲ貸與シ且官ニ於テ工事ヲ施行セラレコトヲ出願シ爾來屢之  
ヲ請願ス明治十五年ニ至リ縣令森岡昌純ハ縣ニ於テ實地測量并ニ工事計畫ヲナ  
スコトヲ許シ翌十六年之レカ調査ニ着手シタリ然ルニ事業重大ナルヲ以テ尙實  
地ノ調査ヲ其筋ニ稟請シ同年二月農商務省ヨリ御用掛南市郎平ヲシテ來縣シテ  
調査セシメラル是ヨリ先キ明治十三年印南新村ニ葡萄園ヲ置キ福羽逸人之レカ  
園長ニ任シ盛ンニ葡萄ヲ栽培シタリ是ヲ以テ時ノ政府ノ顯官視察ノ爲メ續々出  
張セラレ明治十三年四月内務權大書記官田中芳男ヲ始トシ十五年ニ農商務大輔  
品川彌二郎十六年ニ大藏卿松方正義農商務卿西郷從道等該園ニ出張アルヤ郡長  
及人民總代等困難ノ事情ヲ述ヘ園長福羽逸人亦地方ノ窮狀ヲ詳細ニ陳述スル所

アリタルヲ以テ何レモ其時々附近各村ヲ巡視シ民情稍ク上ニ達シテ疏水ノ必要  
モ亦知悉セラル、ニ至レリ此時ニ當リ水路ノ測量既ニ完結ヲ告ケタルヲ以テ縣  
令森岡昌純ハ該地方復興ノ爲メ疏水起工ヲ必要トスルモ民力到底工費ヲ出スニ  
耐エサル事由ヲ詳具シ國庫金貸與ノ事ヲ政府ニ稟請シ次テ十八年縣令内海忠勝  
就任更ニ稟請スル所アリ終ニ國庫金四萬五千圓貸與ノ許可ヲ得タリ  
明治十九年三月始メテ水利土功會ヲ組織シ疏水ニ關スル諸事ヲ評決スルコト、  
シ郡長赤堀威之レカ事務ヲ管理ス抑モ木工事ハ水源遠ク隔絶シテ水源ト水末ト  
ハ其地勢ヲ異ニシ一大困難ノ企業ナルヲ以テ縣令内海忠勝ハ猶詳密ノ測量ヲ必  
要トシ技師ノ派遣ヲ内務大臣ニ稟請シタルニ大臣之ヲ容レ同年四月技師田邊義  
三郎ヲ出張セシメ實地ヲ檢査セシメタリ次テ縣令内海忠勝ハ人民ノ請願ニヨリ  
疏水本線ニ限り之レカ工事ヲ縣廳ニ於テ施行スルコトヲ許シ縣屬柏谷素直ヲ測

量主任トシ内務技師田邊義三郎監督ノ下ニ測量ニ從事セシメタリ而シテ此測量ノ結果ハ從來企圖セル如ク水源ヲ山田川ニ取レハ土質不良ニシテ工事ニ適セス依テ其地質不良ノ部分ヲ避ケ下流ヨリ引水セントスレハ水源ニ一大石堰堤ヲ築キ水ヲシテ上騰セシメサルヘカラス爲メニ多額ノ工費ヲ要スルニヨリ之ヲ廢シ更ニ水源ヲ美蘘郡淡河川ニ取り同郡木津村ヨリ引水シ御坂村ニ鍊鐵ノ噴水管ヲ伏設シ美蘘川ヲ横キリ廣野ヲ經テ宮ノ谷ニ出ルモノトセハ山田川ニ比シテ工事稍易キヲ以テ設計ヲ變更スルニ如カストシ遂ニ之ニ決シタリ然ルニ此水源變更ノコトタルヤ地方人民ノ未タ其利害ヲ聞知セサル所ナルノミナラス噴水管伏設ノ如キハ本邦未曾有ノ工事ナレハ人民中疑惑ヲ懷クモノアリ水利土功會ノ如キモ爲メニ工費豫算ノ決議ヲ躊躇シ遂ニ土功會ヲ開クモ議員ノ出席少ナク決議スルコト能ハサルニ至ル是ニ於テ郡長赤堀威ハ郡書記ヲ派出シテ各議員ニ就キ出

席ヲ勸告セシメ又戸長及人民總代等ヲ召集シテ懇篤ニ訓諭スル所アリタルヲ以テ漸クニシテ明治二十年六月ニ至リ工費豫算ヲ可決シ直チニ起工ノ準備ヲナシ翌二十一年一月廿七日ヲ以テ起工式ヲ舉ケ次テ工事ニ着手シタリ  
工費ハ其豫算金六萬九千貳百五拾五圓九拾貳錢五厘ニシテ内國庫貸與金四萬五千圓ヲ控除シタル殘額金貳萬四千貳百五拾五圓九拾貳錢五厘ヲ關係郡村ノ負擔トシテ之ヲ賦課シタルニ元來疲弊ノ村落ナレハ忽チ徵收ニ支障ヲ生シ容易ニ之ヲ徵收スルコト能ハス是ニ於テ水利土功會ヲ開キ工費借入ノコトヲ議決ス然ルニ工事ハ意外ニ難工多ク且中途降雨其他ノ天災ニ妨ケラレ進行豫期ノ如クナラサリシヲ以テ不安ノ念ヲ懷クモノアリ爲ニ借入金ヲ爲サント欲スルモ地方ノ債主ハ此事業ヲ信用セス容易ニ需メニ應セス是ヲ以テ郡長赤堀威ハ殆ント施スヘキノ策ヲキニ苦シミ終ニ縣知事ニ乞ヒ債主招募ノコトヲ依頼シ其助言ヲ得テ僅

カニ幾分ノ借入ヲ爲シタルカ如キ有様ナリ郡長赤堀威ハ猶水利土功會議員中ヨリ工費借入委員ヲ選任シ諸方ニ債主ヲ募ラシメ又滞納者ニ對シテハ數名ノ屬僚ヲ派遣シ日々滞納者ノ宅ニ臨ミ工費ノ納付ヲ督促セシムル等實ニ容易ナラサル煩勞ヲ以テ工費ノ收納ニ勉メタリ

工費徴收ニ最モ困難ヲ極メシハ母里村ニシテ地租改正以來益衰弊ニ陥リ明治九年以降ノ地租滞納者ノ處分スラ結了セサリシヨト數年十七年ニ至リ滞納人員四百四十名ニ對シ所有地ヲ差押ヘ公賣ニ附スルニ至レリ而シテ其内七拾町步餘ハ相當買受人アリシモ殘ル七拾餘町步ハ遂ニ官ニ沒收スルノ止ムヲ得サルニ至リシナリ事情此ノ如クナルヲ以テ土地所有者ハ何レモ其所有地ヲ擔保トシテ負債ヲ起シ明治二十二年ノ始ニ至リテハ全村ノ負債總額實ニ貳萬七千四百拾圓餘ニ達シ之レヲ現住戸數六百五十三戸ニ分割スレバ一戸平均實ニ四拾壹圓餘ニ當レ

リ其窮狀推知スルニ足レリ此時ニ當リ國庫ノ貸與金ハ既ニ其第一回返納期ニ達シタルモ地方ノ狀況此ノ如クナルヲ以テ到底返納スルコト能ハス縣知事内海忠勝ハ人民ノ請願ヲ容レ之レカ延納ヲ許可シタリ而シテ人民ハ猶出資困難ナルヲ以テ終ニ二十三年八月ヲ以テ再ヒ國庫金貸與ノ件ヲ請願シタレトモ許可セラレサリキ

工事ハ起工以來既ニ二年餘ノ時日ヲ費シテ大半成工シタルモ獨リ芥子山隧道ハ土質脆弱ニシテ工事ノ進行スルニ隨ヒ益困難ニ至リ容易ニ貫通ニ至ラス爲メニ工費ノ豫算ニ多額ノ不足ヲ生シタリ依テ郡長赤堀威ハ二十三年九月十日ヲ以テ水利土功會ヲ開設シ追加豫算ヲ議セシメタリ然ルニ既記ノ如ク工費ノ徴收困難ナルニ起債亦容易ニ行ハレス加フルニ芥子山隧道工事ハ其奏効ヲ月ルコト難キヲ以テ議員中將來ヲ杞憂スルモノアリ容易ニ決議ニ至ラス再三開會シテ同年十



月二十日ニ至リ原案ニ大削減ヲ加ヘテ僅カニ議決シタリ  
是ヨリ先明治二十三年六月法律第四十六號ヲ以テ水利組合條例ヲ發布セラレタ  
ルヲ以テ同年十一月水利土功會ヲ廢シ更ニ其區域ヲ水利組合ノ區域トシ普通水  
利組合ヲ設ケ郡長之レカ管理者トナリ十一月十三日ヲ以テ知事ノ認可ヲ經テ組  
合規約ヲ定メ同月廿八日組合會議員ヲ選舉シ始メテ普通水利組合ノ組織成リ水  
利土功會ノ引繼ヲ受ケテ疏水事業ヲ遂行シタリ  
既ニシテ工事ハ益々進行シ全線殆ント成功シ芥子山隧道モ日ナラス貫通セント  
ス然ルニ曩ニ水利土功會ニ於テ工費ニ大削減ヲ加ヘタルヲ以テ又不足ヲ生シ更  
ニ二十四年四月四日普通水利組合會ヲ開キ工費ノ追加豫算ヲ決議セシム次テ同  
月七日ニ至リ芥子山隧道始メテ貫通シ茲ニ水路全部ノ竣功ヲ告ケタリ抑モ芥子  
山隧道ハ二十一年二月工ヲ起シテヨリ三年四箇月ノ日子ヲ費シテ漸ク貫通シタ

ルモノニテ二十三年七月工事ノ受負ヲ解約シテ縣廳ノ直轄ニ移シタル時ノ如キ  
ハ一晝夜ノ進工開鑿實ニ僅カニ二尺ニ過キサリシナリ是ニ於テ二十四年四月十一  
日始メテ水源閘門ヲ開放シテ通水試験ヲ行ヒタルニ結果甚々良好ニシテ五日間  
ヲ費シ同月十六日練部屋配水所ニ達シタリ而シテ兵庫縣知事林董ハ同年六月三  
日水路ニ出張通水ノ狀況ヲ視察シ且加古郡長赤堀威ニ對シ疏水工事ノ引繼ヲ了  
シタリ其後國庫貸與金ハ人民ノ請願ヲ容レ二十五年三月ヲ以テ終ニ棄捐セラレ  
タリ

工事既ニ成リタルヲ以テ二十四年九月二十日ヨリ翌二十五年五月二十日ニ至ル  
一通水期間ハ無事通水シ二十五年始メテ田地灌漑ノ用ニ供シタリ然ルニ同年七  
月非常ノ大雨アリテ水路ハ築堤崩潰シ隧道陷落シ復々通水スヘカラサルニ至レ  
リ是ニ於テ管理者加古郡長阿部光忠ハ直チニ復舊工事ヲ起ササル可カラサルモ

組合ハ當初ノ工事ニ於テ已ニ資力盡キタルヲ以テ假令姑息ノ工事ヲ施ストスルモ到底其負擔ニ耐ユルコト能ハサルヲ察シ普通水利組合會ノ決議ヲ經テ特ニ地方稅ヲ以テ工費ヲ補助セラレンコトヲ兵庫縣知事ニ稟請シタルニ縣知事周布公平ハ之レヲ容レ更ニ技師ヲ派遣シ實地ヲ巡檢セシメ又土木監督署ノ技師ヲ聘シ再查ノ上設計ヲ爲サシメタルニ最モ完全ニ工事ヲ施サハ其工費實ニ拾七萬八千七百七拾八圓七錢ニシテ地方稅ヲ以テ補助スルトスルモ猶組合ノ負擔ニ屬スル工費五萬八千七百六拾貳圓八十四錢六厘ヲ要シ其負擔輕カラサルニヨリ組合ニ再考ヲ命シタリ是ヲ以テ管理者加古郡長ハ直チニ之ヲ普通水利組合會ノ議ニ付シタルニ組合會ハ姑息ノ工事ヲ施シテ憂ヲ後ニ遺サンヨリハ寧ロ此際万苦ヲ凌キ以テ完全ナル復舊工事ヲ施スニ如カストノ意見多數ヲ占メ之ヲ可決シ更ニ管理者加古郡長阿部光忠ハ此設計ニヨリ工費補助セラレンコトヲ稟請シタルヲ以

テ縣知事周布公平ハ臨時縣會ニ提出シ之レカ決議ヲ經テ國庫補助ノ義ヲ政府ニ稟請シ遂ニ許可ヲ與ヘラレ二十六年七月復舊工事ニ着手シ工事至難ノ部分ハ縣廳ニ於テ之ヲ施行シ其他ノ部分ハ組合之ヲ施行スルコトトシ翌二十七年六月ヲ以テ全水路ノ復舊工事ヲ了ヘ越エテ十二月二十三日竣成式ヲ舉行スルニ至レリ復舊工事將ニ終ラントスルノ前一月二十七年五月二十日時ノ第四師團長北白川宮殿下特ニ本疏水路ヲ巡視セラレ親シク工事ノ實況ヲ視察セラル是レ實ニ同組合員永久ノ記憶シテ忘ルヘカラサル一事ナリトス

水路ノ支線及溜池築造工事ハ明治二十五年ヨリ着手シ今日ハ既ニ之ヲ終リ山野及畑地ノ水田ニ變換スヘキモノモ概ネ之レカ工事ヲ了シタリ

疏水路ノ延長ハ一万四千四百七十間ニシテ内隧道二十八箇所此延長二千八百五十七間二分而シテ其最長ナルモノハ五百七十間ナリ

灌漑反別ハ起工ノ際千百七十六町歩ノ田地ニ灌漑スヘキ目的ヲ以テ着手シタル  
モ現今ニ在リテハ其利益ヲ受クル總反別千九百九十九町餘歩ニシテ之レニ明石  
美蘘兩郡ニ於ケル反別ヲ合算セハ實ニ二千百町歩餘ニ及ヘリ

普通水利組合ノ負債ハ明治二十七年水害復舊工事ヲ終リシ時ノ現在額八万九千  
八百拾五圓ノ多額ナリシモ爾來年々償テ了ヘ現今ノ殘額ハ壹万七千四百拾五  
圓九拾錢ニシテ來ル三十七年十二月ヲ以テ償還ヲ完了スル筈ナリ

疏水起工前現在ノ田反別ハ千九拾六町四反七畝二十八歩ニシテ之レカ收穫ハ貳  
万九百貳拾九石ニ上ラサリシカ現今ニ在リテハ反別ニ於テ九百三町五反歩ヲ  
増シ收穫ニ於テ貳万四千七拾石ヲ増加シタリ之レヲ目今ノ米價ニヨリ積算スレ  
ハ貳拾八万八千八百四拾圓ノ增收トナレリ而シテ地租ハ變換地ノ過半今猶地價  
据置中ニ在ルヲ以テ其詳細ナル増加ヲ知ル能ハスト雖トモ本年十月現在ノ地租

ヲ起工前ノ地租ニ比較セハ其中間明治二十三年及三十二年ニ於テ地價ノ修正ア  
リタルニ拘ラス三千六百五拾貳圓六拾五錢四厘ヲ増加セリ明治五十五年ニ至リ  
地價据置地ノ修正ヲ終ラハ其増加額六千圓ニ超ユルナルヘシ

三十一年明石郡神出村及岩岡村美蘘郡別所村ノ内小林新田及興治新田ニ對シ田  
地灌漑ノ用ニ供スル爲メ疏水ノ餘水ヲ分與スルコトヲ許シ後三十三年美蘘郡三  
木町及久留美村ニ又之ヲ許可シタリ現今明石郡神出村外一箇村及美蘘郡三木町  
外一箇村ハ何レモ普通水利組合ヲ設ケ之カ經營ヲ爲セルモ美蘘郡別所村ノ内小  
林新田及興治新田ノ兩村ハ未タ普通水利組合ヲ組織スルニ至ラス而シテ二組合  
二箇大字ノ給水反別ハ合セテ七十七町貳反餘歩ナリ

疏水工費調書

一金八万四千四百七拾參圓貳拾四錢

當初工費

内

金四万五千圓

國庫貸與金

金參万九千四百七拾參圓貳拾四錢

組合負擔金

一金拾七万八千七百七拾八圓七錢

水害復舊工費

内

金拾貳万拾五圓貳拾貳錢四厘

地方稅補助金

金五万八千七百六拾貳圓八拾四錢六厘

組合負擔金

合計金貳拾六万參千貳百五拾壹圓參拾壹錢

明治三十七年三月二十五日印刷  
明治三十七年三月二十八日發行

(非賣品)

兵 庫 縣

印刷所  
印刷者

神戶市奥平野二五五  
全 上

ミカド印刷商會本店  
堀 田 肇